女鑑

明治三十五年七月廿四日發兌

第貳百五拾七號

東京國光社

女鑑第貳百五拾七號

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵劵代用は（一錢、三錢）一割增の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納税の來書は一切受取り申さゞる事

定價

一册　金拾錢
六册三ヶ月分　前金五拾七錢
十二册半年分　前金壹圓拾錢
廿四册一年分　前金貳圓拾錢
全國無逓送料

廣告料

五號活字廿字詰一行　金參拾錢
三一頁　金八圓
半頁　金拾貳圓
一頁　金拾六圓
表紙一

色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年七月十九日印刷
明治三十五年七月二十日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊素一
東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地
印刷人　蛙木員雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元　株式會社國光社出版部
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八）

主任　石井泰次郎君

◎家庭の燈臺　◎料理界の北斗

料理講義録

前期

第貳號

本號目次

◎規則入用の方は三錢郵劵封入申込むべし

（明治卅五年七月五日發行）

東京京橋區鈴木町十一番地

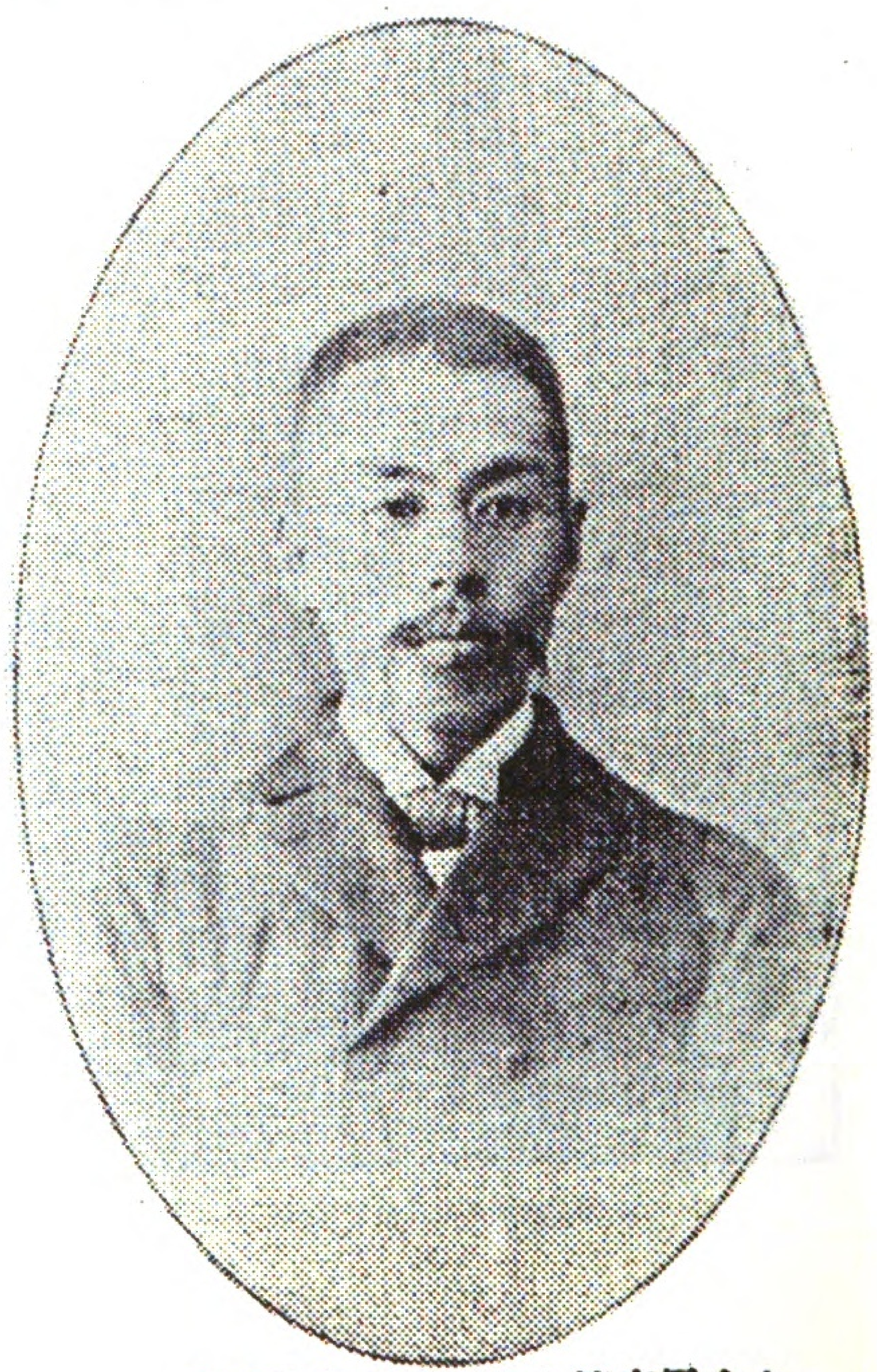
大日本割烹學會發行



山形縣女子師範學校長津田元德氏



野口裁縫專門女學校長野口銀吉氏

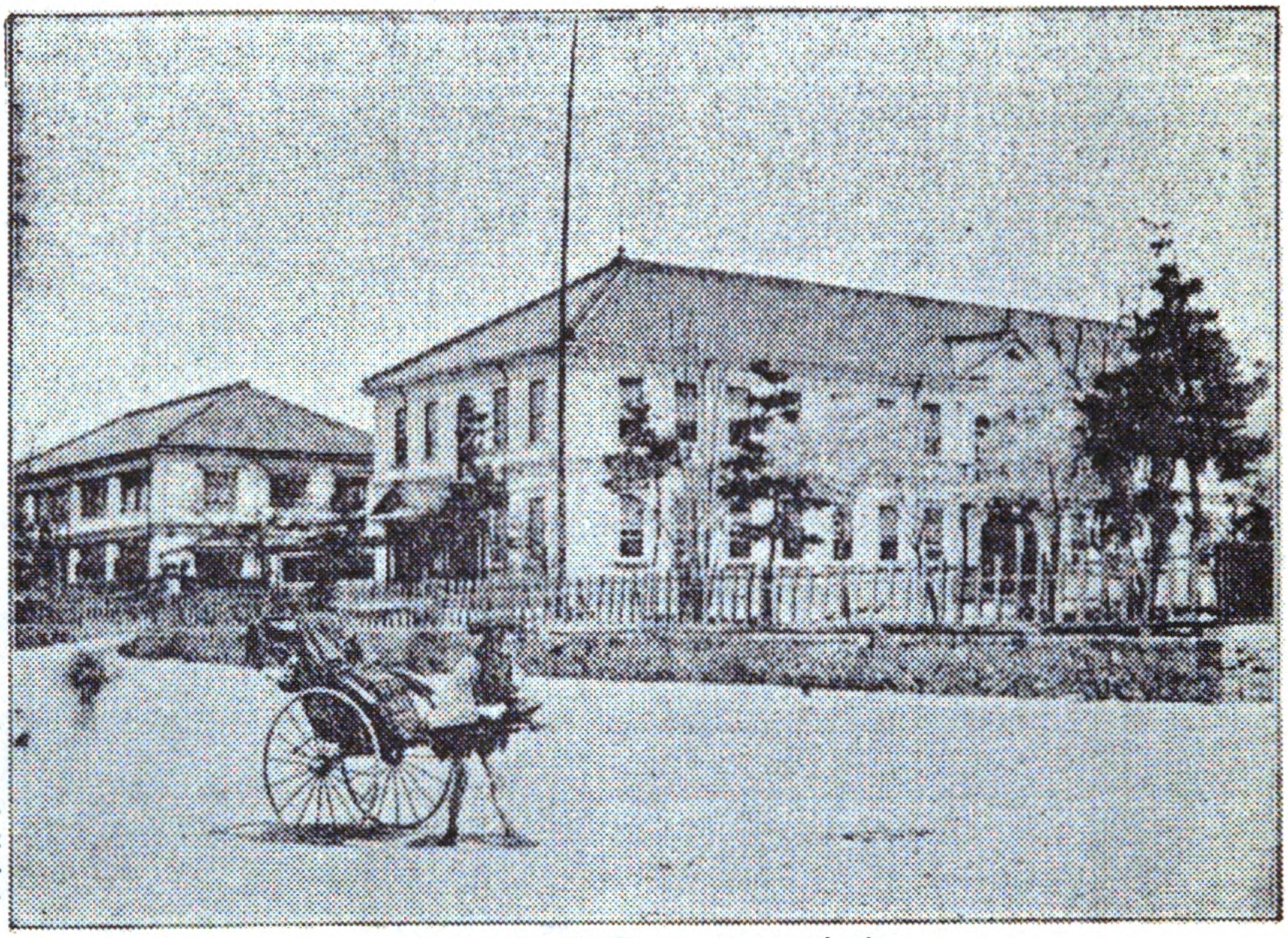


名古屋高等女學校長甫守謹吾氏



栃木縣立宇都宮高等女學校職員及專修科卒業生

(松本下里くま子寄贈)

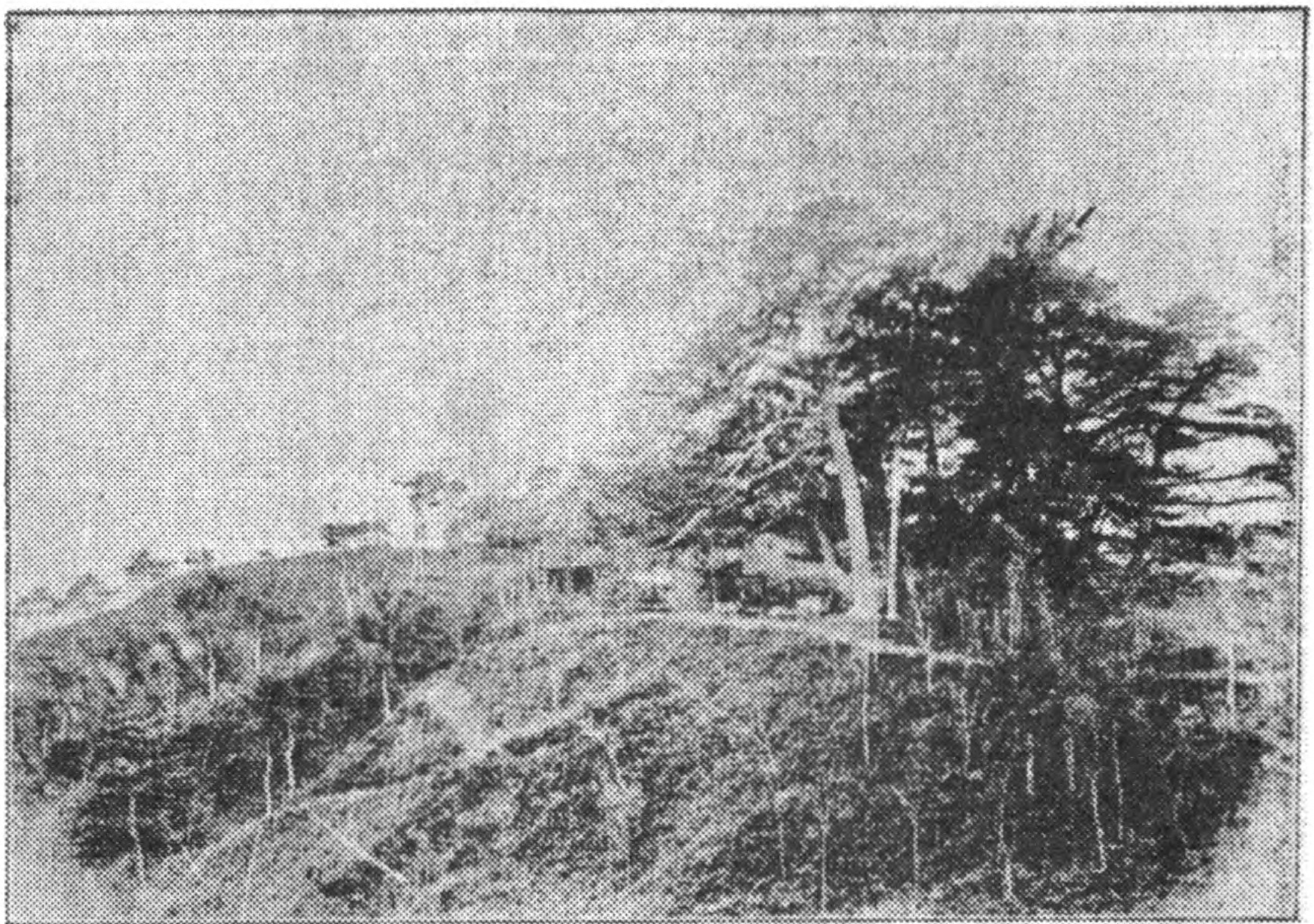


信州松本小學校女子部

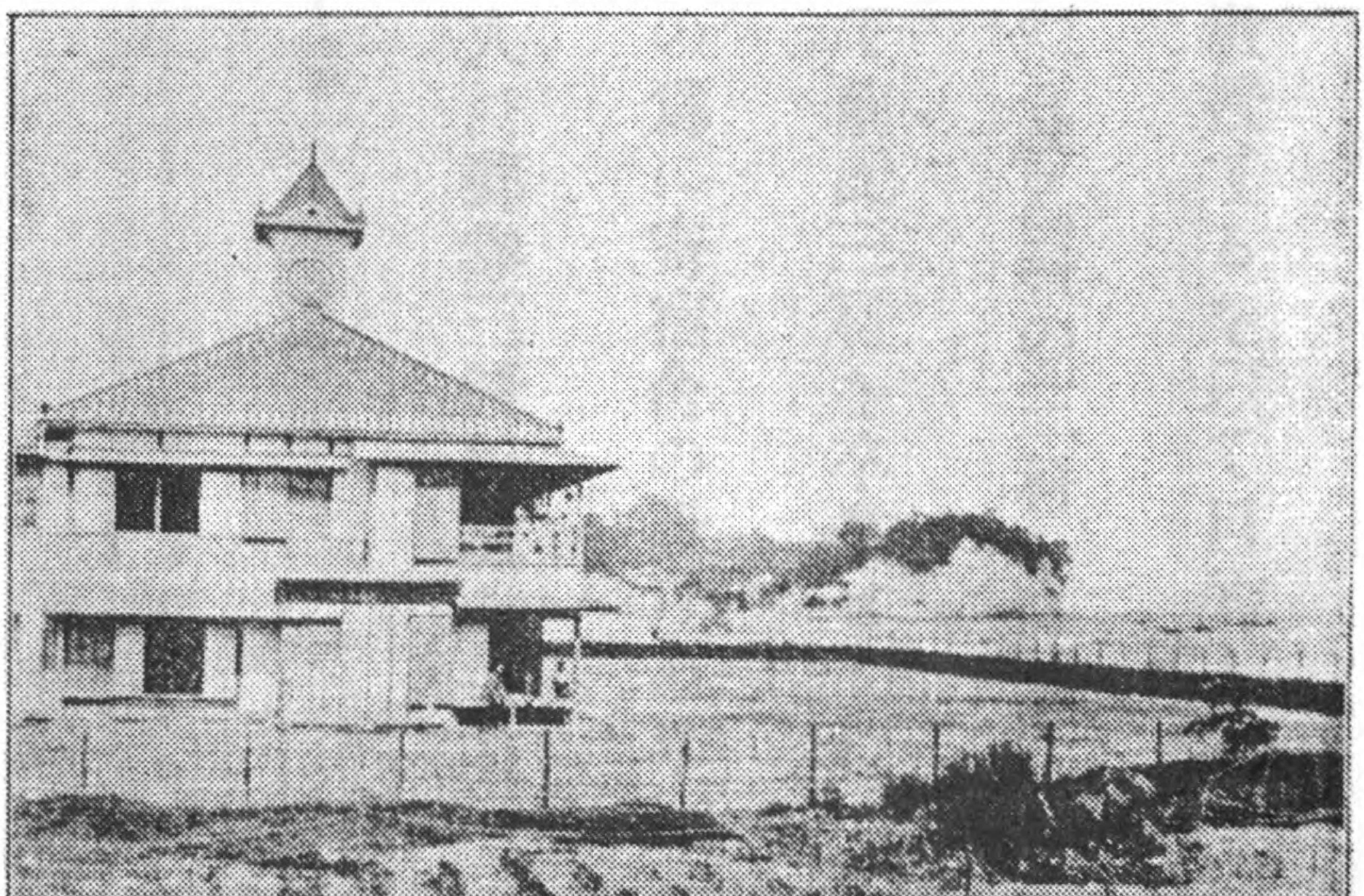
(福島高やす子寄贈)



岩代國飯坂温泉



勿來關趾



常陸國大津八勝園

女學生の夏期休業

黄梅連旬の雨晴れて、鑠金の炎暑は來れり。而て之と同時に多くの學校はみな夏期休業となりぬ。暑中九旬の時日は言ふまでもなく、一年の四分の一に當るなり。縦令ひ學窓螢雪の苦は此の長月日の休業に値ひするとはいへ、又た赫々たる炎熱は學校生活に於ける修業に堪ふべからずとはいへ、若し徒に悠遊自適の間に消過せんは、孜々として寸陰をも惜むべき學生に取りて、寧ろ甚だ嘉みすべきことにあらず。

されば如何にして暑中休暇を過ごすべきやとの問題は屢々學者名流の間に解決せられて、殆んど餘蘊なきに似たりと雖も、その解決や、多くは男學生にのみ限られて、女學生の爲めに説明せられたるもののあるを聞かざるは遺憾といふべし。顧ふに東京に於ける、又た地方に於ける幾萬の女學生は、如何にして、此の暑中休暇を經過せんとするか、懷かしき故山の風月にあるか、翠滴る青山の下か、白波跳る海邊か、門に倚るの人を省するは孝養の一にして、又人生の樂事なり。暑を風塵の外に避けて、身心を養ふも亦來るべき學期の成業を望む所以の途なるべし。余輩は女學生の歸省若くは避暑旅行を

非とするものにあらずと雖も、但だ一事の敢て勸めたきは、此の休暇を利用して、渠等がその生涯の前途に於て必ず通過せざるべからざる家庭の實地を研究する事にあるなり。

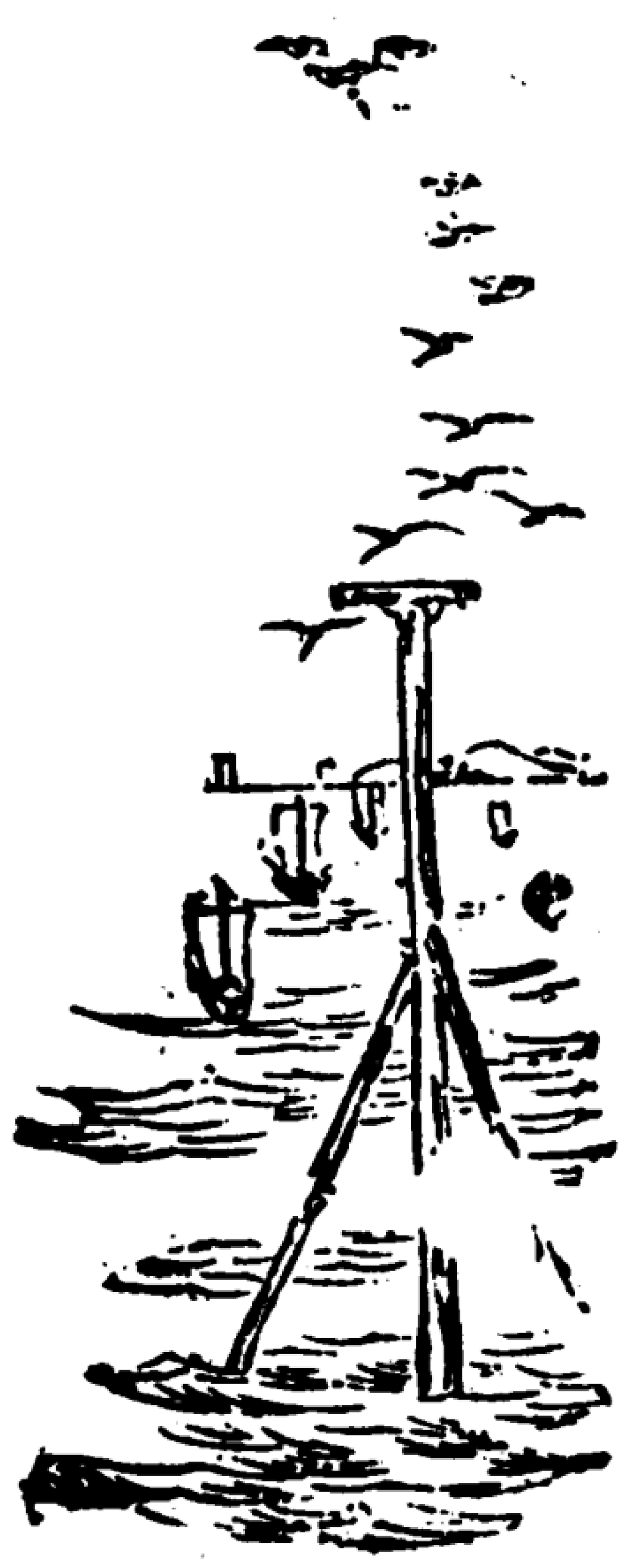
女生と家庭との關係は今更ら言ふまでもなし、而て新知識を有する女學生が、如何に日本將來の家庭改良上、重大の責務を有するかも亦此に言ふの要なきなり。されば余輩が今説くところの家庭の實地修養が女學生に取りての必要は勿論言明を待つまでもなかるべし。

女子がその高等學科を卒りたる頃は概して妙齡標梅の期に際するをもつて、一たび君子の求めに逢はゞ、忽ち新夫人たるの位置を占めざるべからず。既に此の位置を占む、豈其の資格なかるべけむや。而て其の資格ある者は豫め準備養成するにあらずんば、一旦夕の間に整ひ得べきにあらざる也。斯く云はゞ餘りに理窟に落つるの嫌はあれど、兎にも角にも將來家庭を支配すべき運命を有する女學生が、その準備として、又た實地の修練として、猶彼の男學生の、歴史上、地理上の修學旅行を爲すが如くに、夏期の休日を家庭の研究に費やすは、利益多くして趣味も亦甚だ多かるべきなり」

故鄕の家に歸れば父母兄妹の團欒せる樂しきホームは、吾身を迎ふるなり。旅行して遠方の伯父叔母を訪はんか、從兄從妹等の一群は皆わが健康を祝して如何に悦ぶべきぞ。而て此にも愉快なるホームは在るなり。若し又た己が平日尊敬する人又は仰慕する人の家族に身を托して、其家に朝夕を送ら

むには、わが尊敬仰慕せる其人のホームの狀況は、吾が眼中に映じて、資益するところ更に多かるべし。左れば苟も此志を以て夏期休日を送らんか、青山銷夏の地にも碧海避暑の時にもホーム上研究の材料ありて、到る處有益なる見聞を與ふるに吝ならざるべし。要はその心懸けと注意との如何にあるのみ。

若夫れ此期に於ける旦夕の好伴侶たる讀物は、如何なる種類の書籍を選ぶべきやと問ふ人あらば、余輩は勿論家庭生活に資益すべき古來の傳記、小說の類を以て之に答へざるべからず。ビスマーク夫人傳、ヂスレリー傳其他東西賢婦節女の傳記などの類は通常家庭の模範としては、少く高尙に失する傾きあれど、又確かに有益にして面白き讀物の一なるべし。





論説

母親の心得

愛敬女學校長　棚橋絢子

予が今述べむとするは高尚の理論にあらずして、日常普通の事のみ。聖人も「道不遠人、人之爲道而遠人、不可以爲道とのたまひ、朱文公も、これを若爲道者厭其卑近以爲不足爲、而反務爲高遠難行之事、則非所以爲道矣と註せられき。道は天下の萬世にわたりて、須臾も離るべからざるもの、從つて吾人の之に依り、之を踏み居るべきものにして、日常の行爲を離れて他に隱僻高遠、不可知の道なるものあるにあらず。道は至大無邊なり、從つて、物として之に依らざるなし故に至正明白のものなれども之を守る事難く、之を樂しむこと更に難く、常に湮沒して行はれざるなり。さればおのれは、茲にいさゝか兒女の父母殊に母たるものが、兒女殊に女子の家庭教育に對する注意を說き、併せて婦道の何たるかを述べむと欲す。敢て新論新說にあらずして、古人の既に云ひ盡されたるものなれども、近來西洋文明の輸入と共に、日本從來の美風たる婦道の如きも之を非難する輩あらはれ、從つて女子の家庭教育に就ても、種々說をなすもの出でゝ、人の岐路に迷ふあり。家庭教育の如きも、また極めて大切にして行はざるべからざるにも拘はらず、日常普通の事なるを以て、人却つて常に忘却し、知らず〳〵輕視するものあり。これおのれがこゝに於て更に說かんとする所以にして、其說極めて普通平易、何

れも日常に行はざるべからざるものなれども、之を行ふ事難く、樂むこと更に難きものなり。其普通明白のことなるを以て、輕視せらるゝことなきを望む。

おのれは、先づ幼兒の敎育を說き、漸次小學校時代、高等女學校時代の女子に對する父母の注意に說き及ばむとす。

幼女の敎育は誠に大切なり。幼兒は其心意も、其身體の如く柔軟潔白なり。故に一切のものに感染し、善となく惡となく、外來の刺戟一として其習をなさゞるなし。世には、有形の身體を丁寧に扱ふべきを知つて、其身體よりも一層美妙にして、切實なる無形の心意を、忽に扱ふは、本末を顚倒したるものと云ふべし。身體は風にもあてじと丁重に子守を置き、褓姆を附し監視するものあれども、其心意に至つては、之を等閑に附するもの比比みな然り、心意水に溺れ、火に燃かれ、石に傷つくの危なきを得んや。深く注意せざるべからざるなり。諺に「三ッ子のたましい百まで」といひ或は「小兒は成人の父なり」といふが如く、幼少の時は、一生の氣質の摸型を作る時代にして、而も薄弱なる時代なれば、注意に注意を重ねざるべからず、其發育も迅速にして、其一日は靑年時代の數十日に當るべく、加ふるに一切の外物を採つて、心意を作成する時なれば、この外物中一不善混ずるあらば、直に、深く其心中に入りて、剔去する能はざるに至るべし。幼兒の敎育は斯の如く大切なり。而してなほ未だ學校にも通はず、家庭のみにあるを常とする時代なる幼女は、この時代に於て、專ら家庭敎育の影響のみを受くる時代なり。今其の敎育に就て、心付きたる二三節を述べむ。

◎胎教●● 胎兒と母體との間、心意に離るべからざる連絡ある事は、其筋の學者の證明する所なりかくて幼兒は母胎に在つて、既に其影響を受くるを以て、胎教なるもの極めて必要なり。西洋にても之を重んずと聞けど、おのれの見知せざる所なれば、暫く之を云はず、古來日本支那に於いて、賢婦の之を遵奉し、偉人を生みたる例亦多し。この時代の教育は、直接に胎兒に施す能はざるは勿論なるを以て、母を介して、間接に施すの外なきが故に、妊婦たる者は、自己を正うして胎兒を敎育すべきなり。母の心意の胎兒の心意に影響する事、影の形に伴ふが如し。故に母は心意を正うし、女德を守り、温順端正、貞淑の精神を存し、一惡意一卑慮の心中に存在するを許すべからず。德はもと一のみ。唯女子にありて女德となり、男子の德とは多少其形式を異にするあるも、其根本たる精神に至りては同一なり。男子に在ては剛毅たるべきもの、女子にありては端正となり、忠勇は貞淑と爲り、正義は温順となりて、かれとこれと唯其形を異にするのみ、されば妊婦たるもの、女德に背くことなく、完全に其德を持すれば、其胎兒は、男女孰れにしても立派なる精神を享受すべきなり。胎兒の影響を受くるは、母體の心意にあるを以て、一點の瞞著を許さず。一點の僞を容れざるなり。故に母たるものは、心を正しうせざるべからず。若し一邪念の萌すあらむか、直に之を滅却すべし。邪念は惡むべきも、之を滅却する精神は美とすべし。此精神直に胎兒に感染すべければ、勉めて心を安らかに又平かにし、純潔ならしめざるべからず。一時の感情慾望に支配せらるることなく、正道を以て一切の事物を整理する克己、即はち自制の精神を養ひ、以て胎兒の精神を

敎育すべし、高尚婉美なる精神を維持し、卑陋僻固の精神を滅却すべし。常に德を念じ、道を踏み、孝に貞に、沈着勤儉なるべし。放恣、倨傲、輕薄は、胎兒の美質良性を殺すのみならず、更に之を己に同化するの惡魔なるを思へ。（未完）

婚姻に關する不當の用語

法學士　天野弘一

文明の今日、否帝國の新民法實施せられてより既に四年を經たる今日に於て、猶は世人概ね法律思想に乏しく、從て婚姻に關しても幾多の迷想が行はれて居る。例ば、彼の所謂三々九度の御祝儀をすればそれで立派な夫婦になつたと思ひ、犬も喰はぬ夫婦喧嘩の揚句女房去つた緣切つた、と、三くだり半の去狀を出せば、それで夫婦の緣が切れたと心得て居る輩が世間には隨分多いのである。されど吾輩は、今茲に婚姻は如何にして成立するか、離婚の原因は如何等の法律論をするのではない。其等の問題は、何れもゆツくりと順序を追うて御話する事として、先づ今日は、婚姻に關して世間普通に行はれて居る一二の言葉を捕へて、如何に世人が頑迷なる思想を抱いて居るかを指摘し以て之が矯正を促すのである。

扨てよく世間でいふことであるが「どこどこではよめをもらつた聟をもらつたよくおさまればいゝが」「次男はよそへくれましたむすめはやつとかたづけました」と。是れ果して正當なる用語なりや否や。一體もらふとかくれるとかいふ言葉は、普通先づ金錢物品乃至は犬か猫かに付ていふことであつて、苟くも萬物の靈たる人間を、而かも文明の今日に於てもらふのくれるのなどと決していへる

筈のものでない、成程二千年も前の野蠻時代に於ては、何れの國でも一家の長たる者其家族に對して、所謂生殺與奪の權を有し、父は其子を賣るともくれるとも、果ては生かすなり殺すなり勝手氣儘にすることが出來たのであるから、此の如き時代に於て此の如き用語は一向怪むに足らざるのみか、寧ろ社會の制度に適合したものであつたが、星遷り物變りたる今日に於ては、果して如何。其不穩當なること敢て多言を要せぬであらう。試みに觀よ、今の時に當つてよめを買ふの聟を買ふのといふたら、どの位をかしく聞ゆるか。焉ぞ知らん古に於いては、所謂賣買結婚あるもの行はれ、よめや聟は皆賣り買ひをしたものであるたから、其時代に於てはよめを買ふむすめを賣るというても少しもをかしくない。否寧ろ適當の用語であつた。然るに文明の今日に於ては、人身賣買は法の禁ずる所で誰あつて其不法を知らぬものはない、何ぞ計らん文明の今日に於て、人身贈與の不法なることは世人未だ之を知らぬと見える。否少くとも其非理不法なることを眞から知り切らぬのである。何となれば、若し眞に其不法なることを知悉する以上はかりそめにも人をもらふのくれるのといふ言葉を、決して口にすることが出來ぬ筈である。言語は思想を言ひ顯はすの手段であるから、心にも無いことが言葉に顯はれる筈は決してない。論より證據現に世のしうとしうとめなる者は、よめやむこを迎ふることを恰かも犬の子か猫の子でももらふことゝ心得て居る。だから其當然の結果として、いやになつたらいつ何時でも追ひ出すといふ了簡になるのである。是れ皆もらふくれるといふ言葉より生ずる弊害である。

凡そ言語は思想と共に消長し、思想は言語と共に

消長し、兩者密接の關係を有するものであるから若し或る野蠻卑俗なる言語が世間に慣用せらるゝに於ては、如何なる人も之を口にして恥ぢず、否寧ろ當然の用語と思惟するに至り、從つて之に依つて言ひ顯はさるゝ思想其ものも、亦いつしか當然なるかの如くに思惟せられ、斯くして兩者互に因果の關係を爲し、其野蠻なる思想墮落したる思想は益々固着してしまひ終に之を矯正改革することは極めて困難なるに至るのであるから、吾輩は些細なる言葉咎めをして世間の人の揚足を取るやうであるが、言語が思想の上に及ぼす勢力の至大なるを思ふのあまり、茲に一言を費したのである切に願はくは、世人が吾輩の前に指摘したる言葉を聞くこと、猶は恰かも、人身賣買等の言葉を聞いてぞつとする如くに至らんことを。



山口氏の妻

藤の舍主人

婦人一たび嫁がば貞操を守りて夫と生死をも共にすることこそ誠の道なるべけれど、近來ことやうなる說に迷はされ、破鏡の歎をもらし、覆水の恨みを懷くものいと少からず。豈歎かはしき至りならずや。

伏見の城に忠義の花を咲かせ、西軍に舌を捲かせたる鳥居元忠七代の孫、下野壬生藩主伊賀守忠孝は、智德兼備の明君にして、而も祖父の魂を受けたるにや、武勇を勵み、臣下を慈むと殊に深

く、今は仇波騒がざる世なりとも、唯に玉杯を飛ばし、絃歌に耽けるべき秋にあらずと仰せければ從つて家臣にも、主の爲めに水火を厭はざるもの多かりき。こゝに用人役を勤むる山口善左衞門の弟に、善之進といへる若者ありけり。未だ部屋住の身なれども其性質謹直にして、君の寵愛淺からず、朋輩の敬重また厚かりければ、やがては國家老にやならむ、江戸家老にやならむなど、とり〴〵にその行末をたのもしくぞ思ひける。あゝ家には鼠、國には賊、世には惡奸の絕ゆる時なしとかや。同じ部屋住に熊川郡藏と呼べる腹黑き人ありしが、面魂あくまでふとく、酒にすさみ、色に狂ひて、不義非道の振舞のみ多き物から、性來の辨佞もて上に佞ひ、下を欺きて巧におのが欠點を隱匿したり。然るに不幸にも善之進は、この人と共に江戸に呼ばれ、近習役を申し付けられぬ。善之進は朋友に信實を盡し、公儀大事と精勤を盡しければ、おひ〳〵拔擢せられて、納戸頭となり、同家中、勢力ある福島與左衞門の娘を娶りて妻とせり。げに積善の家に餘慶多きは自然の道なるに小人その理を悟らず、却つて之を惡むこそおぞましけれ。郡藏は善之進と共に召されたれども、放蕩無賴にして、人の意見を容れず、一筋に善之進の登用せらしが上に、容姿うるはしき少女と婚儀を結び、翼をならべ、枝を連ねて時めかしけるを意恨に思ひ、おのづから中垣へだつる間となり、遂善之進を陷穽に陷れむ事を企て、除ろに機會を待てり。かくて善之進は、伊賀守の呉服物取扱ひを命せられければ、凡て朋友等の望みに任せ、呉服物の通帳を貸し與へて其用事を辨じけり。郡藏も通帳を借りて種々贅澤を盡し、華麗の衣服を調製したれど、更に代金を拂はざりき。やがて寶曆二年

もみ雪ふる冬とはなりぬ。此頃善之進疾を獲て、出仕もなり難く、家に籠居して保養する折柄、呉服屋來りて郡藏の支拂につき、さま〴〵と歎願して止まざれば、善之進實もとて、また〴〵使を以て催促しけれど、固より之を調へ得べくもあらず、さりとて此上日延の斷も覺束なければ、いでや此機に乘じ、日頃の怨ある善之進を討つて出奔するの外なし。しか〴〵と心を定めぬ。あはれ窮鼠却つて猫を嚙む小人の心ぞ淺ましき。翌くる極月廿六日未明善之進方に行き、面會を求めたり。狡鰐の淵に臨めども神ならぬ身の如何で知るべき。快く一室に請じ、一つふたつ四方山の物語しつつ、善之進莨盆ひき寄せて吸ひ付けむとする間一髪、紫電一閃、覺えたるかと不意に眞向より浴せかけたり。善之進は思ひよらざる事なれど、心得たりと渡り合ひ、脇差ぬきざま右の股に切付けぬ

郡藏物ともせず、二の太刀をたゝみかけて、肩先五六寸切下げたれば、鮮血迸りて滿室忽ち紅の波をたゞよはせり。善之進の妻は、奥の物音たゞならじと、急ぎ夫の差添携へて、室内に駈け入りたるに、何事ぞ、血にそみたる二箇の手負、火花を散らして鎬を削れるさま、いと物凄く夫の命風前の燈火に似て最とゞ危く見えにけり。なみ大抵の婦女ならむには此機に臨まば、さうなく立所を失ひて泣き叫ぶべきを、さすがは武士の家に生れたる思想堅固の貞女、いかでかためらはむ。持ちたる刀とり直し、夫の敵逃さじと、精神こめたる刄の切先、郡藏の太腹深く貫ぬけり。郡藏刺されながらふりかへり、右の肩より乳のあたりまで切下げたれど、己れも急所の痛手にまた働くこと能はざりき。臺所に居たる下女この樣を見て大に驚き、兄善右衛門に急報しければ、追取刀に

て走せ來れり。其他近隣合壁の者ども驅け集ひぬれど、既に善之進は芳魂白玉樓上に飛び去りし後なりけり。兄善右衛門齒がみをなして口惜がれば、居並ぶ人々吾知らず袖を絞りぬ郡藏は虫の音息のたえぐ\なれど、人々立寄り、いかに郡藏、何事にて討果たせしぞと問ひければ意趣ある故に斯のごとし。女に妨害せられたるこそ千秋の遺恨なれ。われ善之進を討つて逃亡せむと企てたれども、天運拙くして此に至りしは殘念至極とて、夫より何を問へども頭をふり眼を瞑して答へざりけり。されば善右衛門は、弟の妻に向ひ手は淺きぞ、心を慥かにして仔細を述べよといひければ、妻は漸く顏をあげ、ありつる事を物語りて、最早敵を討ちたれば、心にかゝる雲もなく、黄泉路の坂もやすく\と、夫に供して越え侍らむ、わが父母へはよしなに傳へ下さるべしと。答てうつ伏しぬ。あゝ、か弱き女の身を以て、夫に獻身せし貞節は感ずるに餘りありといふべし。かくて郡藏亦間もなく息絶えければ、藩主伊賀守に此趣を屆出たるに、いたく殘念におぼしめし逸早く手科醫を下されて、治療を加へけれど、既に致命傷を負ひたれば、夕暮告ぐる鐘の音に、花の盛りの手をやめも、廿三歳を一期とし、安らかに微笑をもらして眠につきぬ。夫妻の死骸は、下女おげんといへる者、其報恩のため切に乞ひて、自ら厚く之を葬りたりとぞ。

君を置きてあだし心をわがもたば
末の松山波もこえなん



國文學講義

紫式部日記講義(三十六)

井上頼文

七日のほど、かはる〴〵、よろづのもの丶くもりなく、しろきおまへに、人のやうだい、色あひなどさへ、けちえんにあらはれたるを見わたすに、よきすみゑに、かみどもを、おはしたるやうに見ゆ。

いとゞ物はしたなくて、かゞやかしきこゝちすれば、ひるは、をさ〳〵さしいでず。のどやかにて、ひんがしのたいのつぼねより、まうのぼる人々を見れば、いろゆるされたるは、おりもの丶からぎぬ、おなじうちぎどもなれば、なか〳〵うるはしくて、心々も見えず。

ゆるされぬ人も、すこしおとなびたるは、かたはらいたかるべきことはせで、たゞえならぬ、みへ、五へのうちきに、うはぎは、おりもの、むもんのからぎぬ、すくよかにして、かさねには、あや、うすものをしたる人もあり。

あふぎなど、みめには、おどろ〳〵しくかゞやかさで、よしなからぬさまにしたり。心ばへある、本文、うちかきなどして、いひあはせたるやうなるも、心々と思ひしかども、よはひのほど、おなじまちのは、をかしと見かはしたり。

人の心のおもひおくれぬけしきぞ、あらはに見えける。

も、からぎぬのぬひものをば、さることにて、袖

くちに、おきくちをし、ものぬひめに、しろがねのいとをふせて、くみのやうにし、はくをかざりて、おやのもんにすゑ、あふぎどものさまなどは、たゞ、雪ふかき山を、月のあかきに、見わたしたるこゝちしつゝ、きら〳〵と、そこはかと見わたされず、かゞみをかけたるやうなり。

釋義

○七日のほど　七夜までの間なり○かはる〳〵　タチカハリ、イリカハリ奉仕する、種々の儀式をさす○くもりなく　滞りなくといふにおなじ○しろきおまへ　御産殿の装飾は、すべて白きものを用ゐれば、白き御前といへり○けちえん　掲焉の字音なり。物の目だちてハッキりしたるを云○すみゑ　彩色なく、墨ばかりにて書きたる繪○かみどもを　髪などをの意○おはしたる　生したるの意○はしたなくて　キマリガワルくての意○かゞやかしきこゝち　晴れがましき心もち○をさ〳〵　ものごとを指し詰て、たしかには言はず、おほよそに定めていふ語○まうのぼる人々　参上する人々なり。○いろゆるされたる　禁色を聴されたる女房達をいへり。装束要領抄に曰はく。地ずりの裳、うはぎをしわたして、蘇芳などの織物なり。色ゆりぬも、さもある女房は、織物のからぎぬ、うはぎゆりて着る、つねの事なり。云々、凡そ織物は、上臈、小上臈までゆりて、中臈以下はゆらざる例なりき○おなじうちき　唐衣と同じ地の内着あり。うちきは、内着の意にて、こゝは、唐衣の下に着たるをいへり○心々も見えず　織物の唐衣内着など、正式の衣服を着たれば、いづれも嚴格にして、シヤレたる様子も見えず、折角、人々が工夫して、

物好につくりたる、苦心の程も見えずとの意〇ゆるされぬ人　織物の着用を聴されぬ人〇三へ五へ　衣のかさねの名〇うはぎは、おりもの　うはぎは、衣服の上にきる衣にて、唐衣の下に着る故に、色ゆるされぬ女房にても着ることを得るなり〇かさね　装束の下に襲ねて着る衣をいふ〇本文　詩や文章などの句をいへり〇おなじまち　同じ方の意〇ぬひもの裳、唐衣などに、糸を以て、種々の模様を繍ひたるもの〇さることにて　言ふまでもなくの意〇おきくち　袖口にさま〴〵の色糸を以て飾りたるも〇ふせて　伏せての意にて、糸をぬひつくることとなり。

さて、前文の、御湯殿は、とりのときとか、と、いふより、こゝの文までは、七日間の、御湯殿のありさまの、おほよそをいへるなり。

譯解

御七夜までの間、タチカハリ、イリカハリ、奉仕する御湯殿の儀式をはじめ、萬事滯りなく相すみぬ。御産所の白き御几帳の御前に居る人人の樣體や、または、白き裝飾の中を往來する人の衣服の色あひなど、目だちて、あざやかに顯れたるを見渡すに、マルデ上手の書きたる墨繪の人物に、ふさ〴〵と髪などを生したるやうに、毛ぎはなど、ハッキリして、ひとしは、うつくしく見ゆ。

式部は、をんなざかりも過ぎたる身なれば、ただへ、としわかき女房たちに、たちまじるは、マガワルキに、かやうに相立つ所にては、猶更、キマリガワルクテ、晴がましき心ちすれば、晝の中はアンマリ出仕せず、ひとりユッタリとして、常に居る東の對の屋の部屋より、中宮のま

します御殿に參上する人々を見れば、禁色を聽されたる女房等は、織物の唐衣を着て、その下には、またおなじ織物のうちぎなど着たれば、かへりて、嚴格にすぎ、人々の新奇をきそひ、物好にて作らせたる、折角の用意も見えず。

また、織物着用を聽されぬ人も、すこし年增の女房たちは、餘り目に立つべき事はせずして、いふにいはれぬほど優美にうつくしき三重の內着、五重の內着の上に、表着は、織物を着て、その上に模樣なき唐衣を着て、サッパリとしたるが、その下に着たる襲は、綾を着たる人も、羅を着たる人もあり。

また扇なども、ワザト只、フイト見たる處は、大層らしく、ピカ〳〵せずして、ワケもなきやうに調らせたる物を持ちたり。

さて、その扇には、雅致ある、詩文章などの句を書きて持ちたるは、たがひに、言ひあはせて約束したるやうなれど、左樣にはあらず、銘々おもひ〳〵に、工夫して、アノヤウにしたるありと思ひはしたれども、年齡の程合、おなじドウシのは、同じやうなる好みの裝束ゆゑ、互に見かはして、約束もしておかぬに、こりや、ドウじやと笑ひたり。

かゝるさまを見ても、人の心の、われおくれじと、物好なる裝束して、たがひに競ふ氣色は、明らかに見えける。

また、年わかき女房たちは、裳や、唐衣などに、色糸にて、種々の模樣をぬひたるものは、言ふまでもなく、飾り立てゝリッパなるに、袖口にも、種々の糸を以てかざりたるおき口をなし、裳の縫ひ合せ目には、銀糸をぬひつけて、組糸のごとくなし、また、金箔を延べて、綾の文に

おきたるさまウックシク、扇などのハデあるさまなどは、只、雪の澤山ふりたる山を、月の光りの明らかなる夜に見渡したる心地しつゝ、ビカ〳〵と、きらめきて、慥に、それと見とめられず、こなたより見れば、まばゆきほどリッパにて、マルデ鏡を懸けたるやうなり。



和畫通信講義（第卅回）

山崎彩峨

梅實は、其の形色、種々あれども、墨畫にては、すべて、淡墨を含めたる筆先に、濃墨を附して畫く。果蔕葉等も、これに同じ。枝幹は、例の如く、淡墨を挾墨となして描き、後ち濃墨にて、果點葉脈を入るゝなり。

彩色畫にては、養老と稱ずる類は、淡青色、豐後と稱する類は赭黄色、難波と稱する類は黄がちの淡青色を含めたる筆先に、臙脂を附して畫く。果點は通常赭墨なれども、臙脂小量を和するもよし。葉は果實未熟の頃なれば、深緑色、成熟の頃なれば、緑色に赭黄色を點ずるもよし。枝幹の色は、花の紅白にて、自ら異なれども、意匠畫にては、總て赭墨なり。たゞ紅花の幹は、白花の幹より少しく色を濃厚になすのみ。葉脈は、濃墨に書き入るべし。

葉脈



泉の話

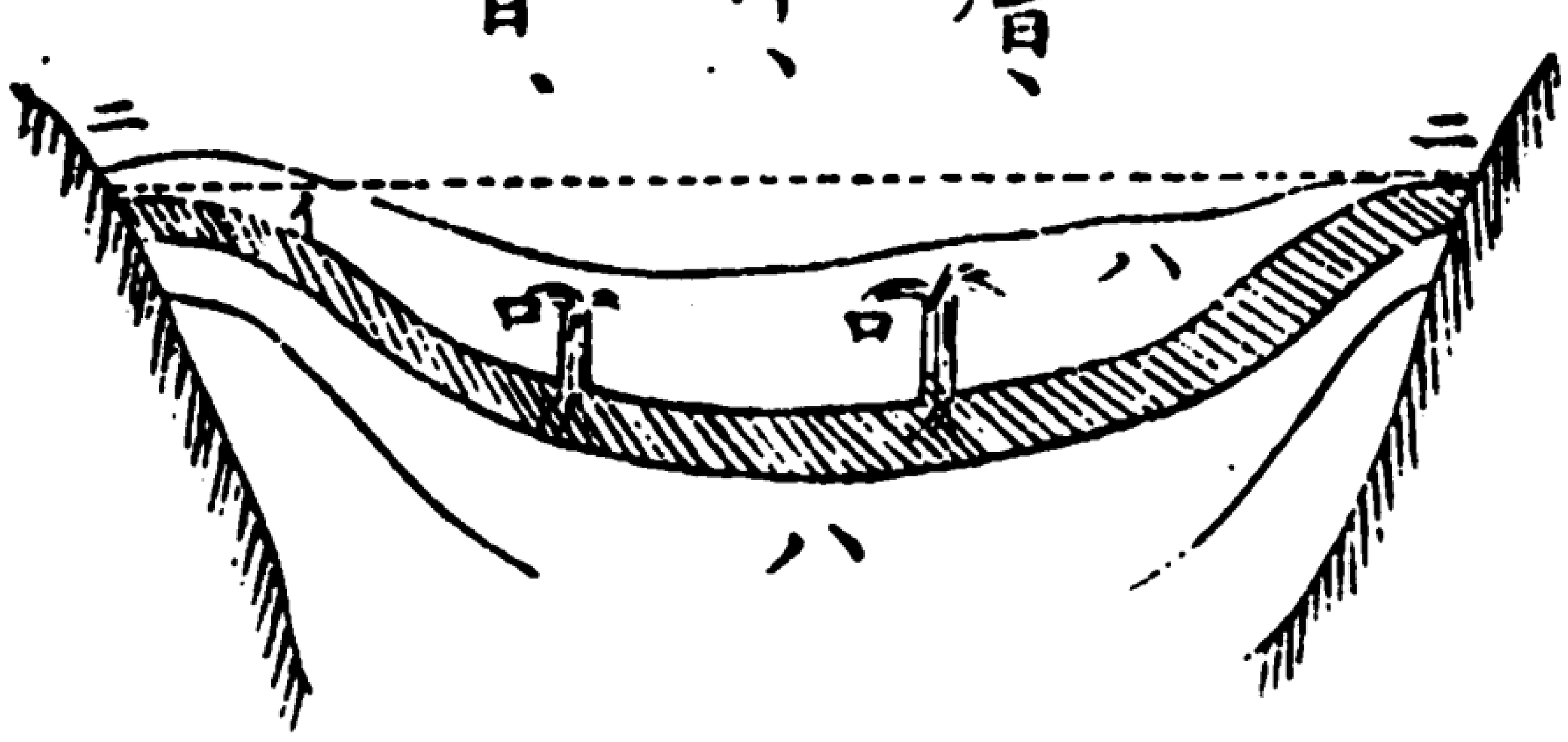
田中生

地上の水が熱に遭遇すると、其の幾分は水蒸氣となつて空中に發散いたします、所で空中にある水蒸氣が冷氣に遭遇すると、それが又雲霧、雨雪等となつて地上に降下いたします、そして此の降下する折其の幾分は地下に滲入して水溜りとなつたり、伏流となつたりいたしますが水が多量になれば再び地上に涌出いたします、之れが則ち泉であります、次に泉に就て大略を申述べます。

地皮を組織して居る岩石は層をなして居るもので、層毎に岩石の性質が異つて居ります、中には粗鬆で水の浸入を許すものもありますし、又極緻密で水をして浸潤せしめないものもあります、そこで一旦地中に滲入した水が途中で緻密な堅固な地層に遭遇いたしますとそれからは深く浸潤することが出來なくて其の儘瀦溜いたします、それ故に若し土地を堀つて其の場所に達しますると水があります、之れが則ち通常の井であります、

之の瀦溜した水が順々増加して來ると何處か土地が低くて軟弱な様な所に孔を明けて地上に涌出いたします、之れは則ち泉水でありま す

(イ)含水層、
(ロ)鑚井、
(ハ)地層、



若し又地層の工合に依つて水の瀦溜する場所が上圖の様に一帶の層をして其中央の方が窪くなつて居ると、その窪い中央に穴

を穿ちますと、水は兩側の水流の壓力によつて地上若干の高さに噴出致します、併し其の噴出する高さは(ニ)の高さより低いのであります、之の種類の井を鑽井則ち堀拔井と申します、東京の鑽井には大きなのはない樣に見受けます、

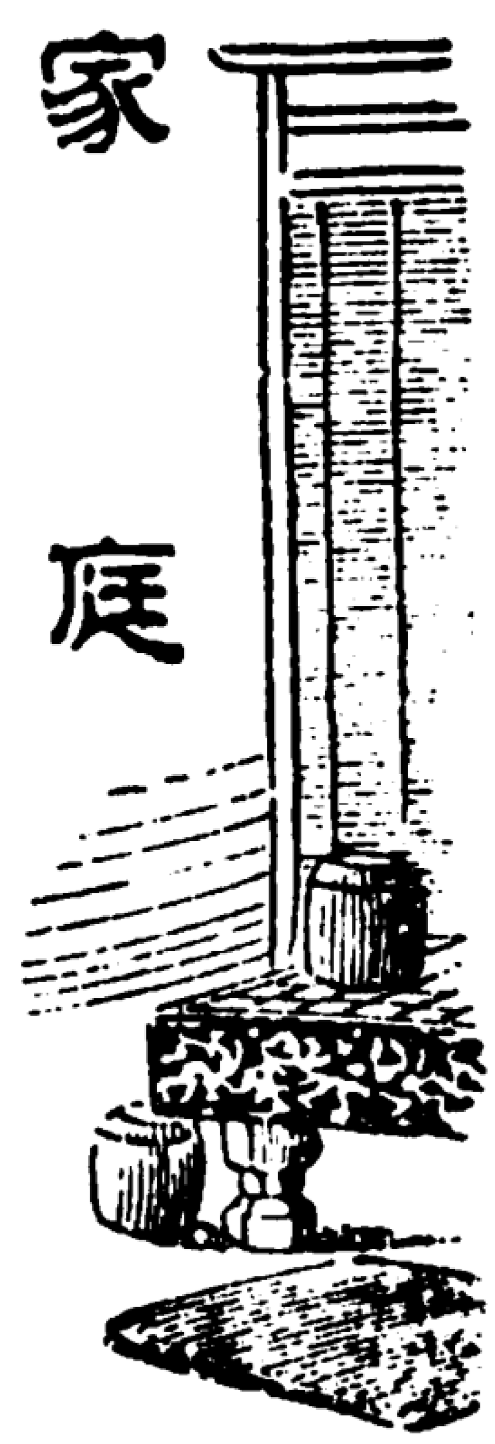
地球の中心には地熱があります、それ故內部に近けば近くほど温度が暖くありまするから、地中に滲入した水は餘り深く入らないならば冷く少し深く滲入すれば温かになります、そこで、地上に出て來る泉を、冷泉、温泉、の二つに分ちます、尤も通常温泉と云へばその水の温度が空氣の温度よりか温かいものを云ひますし、冷泉とはその水の温度か空氣の温度よりか冷かなものを申します、温泉は多く火山地方、地震地方に澤山あります、水には元來物を溶解する性質がありまするから地中を流れて居る間に諸種の岩石を溶解して含有いたします、殊に温水は冷水よりか溶解力が強い故に温泉には從つて含有して居る鑛物が多くあります、かく水中に鑛物を含有して居る泉は冷泉温泉に係はらず凡べて鑛泉と唱へるのです、

之等の鑛泉の中でも其含有して居る鑛物の種類によつて別々に名稱があります、硫黃質を澤山含んで居るならば硫黃泉(箱根の葦の湯)。多量の食鹽、硫酸曹達、硫酸苦土を澤山含んで居るならば鹽泉又は鹽類泉と申します(下野の鹽原温泉)。多量の炭酸を含んで居るならば炭酸泉(豊後の別府温泉、紀州龍神の湯)。澤山の遊離硫酸、亞硫酸、鹽酸などを含んで居るならば酸性泉(上州草津温泉)と申します、其他含有して居る鑛物の質によつて石灰泉、鐵泉など種々あります、若し又温泉でも含有物が少いならば之を單純泉と云ひます箱根の湯本温泉などは、則ちそれであります、

泉から涌出する水の量は泉の種類によつて異ります或る温泉は殆んど年中一定して増減のないのもあります、又或る種の温泉は時々其水量を増したり減じたりいたしまして更らに一定しないのもあります、又種類によつては一日中時期を定めて噴出し又時期を定めて中止するのがあります、之れをば殊に間歇温泉と云ひまして伊豆の熱海、陸奥の鬼首、膽振の登別の温泉などであります、此の間歇温泉の研究は面白くありますから後日特別に申述べることがありませう。

泉水は鑛物を溶解して含有いたして居りますから時日を經るに從ひまして之を沈澱堆積して岩石を作つたり鑛脈を組織いたします、その上、泉水は河流の源となつて田畑灌漑の本となり動植物に飲料水を與へるなど實に人生には直接間接有益なものであります。

家庭



歯の攝生法に就て

小林醫科醫院長 小林清太郎

近來一般の人々が、衛生を重んずる樣になりしは、誠に喜ぶべき現象である。されど、世間の多數は、動もすると、唯その住居地や飲食物などにのみ心を用ゐて、全身百般の根源、即ち、食物咀嚼の作用をなす歯牙の健否には、毫も注意を仕ない傾きのあるは、嘆かはしい次第である。

そこで、身體の健康といへば、先づ、呼吸器の完全を要するは、言ふまでもないが、亦、消化器の要途も輕々しくは出來ない譯である、否、極めて緊要缺く可らざる機關と言はねばならぬ。殊に歯

牙の如きは取り分け要用のもので、萬一これが不備不完全なる時は、食物咀嚼の好結果を得ず、それが爲めに、消化器を害し身體の健康を傷つけて、遂には貴重なる生命にまで影響を及ぼす譯になるから、自然歯牙攝生の必要が起るのである。而してその攝生上の方法にも種々あるけれども、常に歯牙を清潔にするといふことが第一の要件であるから、こゝで歯牙清潔法のお話を仕様と思ふ。凡そ、人はその一生の中に、二種の歯を有するもので、最初に生へるを乳歯といふ。これは生後五六ケ月より始まりて、二年半に終り、上下を通じて二十枚ある。次は永久歯といふて、六歳頃から一番奥の方に生へ始まりて、二十五歳位までに生へ揃ふもので、此の數は上下三十二枚である。そこで歯の構造に就て、一寸説明すれば、歯は總て、石灰質より成て、琺瑯質、白堊質、牙質、歯髓、

歯膜等を含むで居る。又その各質を解剖すれば、歯の表面は琺瑯質を以て被はれ、根は白堊質を以て包まれ、歯の實質は牙質で、歯髓が其中に挿通されてある。而してこの歯髓が歯を養ひ、歯膜が歯の根を包んで之を維持し、外來の激動に耐ゆることになるのである。

斯の如く精巧に作られてあるものが、一朝病魔の犯す所となるや、彼の眼、耳等の柔軟なるものとは違ひ、如何なる治療を施しても、決して舊の健康に復するものではない。然るに世間の人は、歯を保護し、衛生をまもることに注意を怠り、歯痛を感じて始めて治療を受くるが、殆ど今日の習慣といふても過言ではあるまいと思ふ。故に、既に痛みを起して後始めて治療を爲すは、時期の後れたるものと思はねばならない。

抑も、齲歯(むしば)といふは、一種の傳染性を有

して居るもので、一齒腐蝕するときは直に他齒に移り、遂に數齒を殘害することになる。然し腐蝕が琺瑯質の部分にある間は、その勢も至極緩慢であるけれども、漸次牙質にまで侵入する樣になれば、その勢、實に驚くべき速度を以て進み、齒髓に近接するに從つて、此處に始めて名狀すべからざる痛みを感ずる樣になる。

（未完）

慈母と愛兒（承前）

みむら

◎懷姙

かくも愛らしきみどり兒の胎内にやどるは、もと自然に屬し、人力の左右する能はざる所なりといへども、平素の心得の如何によりては、至大の關係を生ずべし、今その心得の重なるものをあぐれば、

第一、兩親の健全

つとめて（一）攝生し（二）運動を怠らざる事

第二、心身の爽快

常に（一）心廣く（二）體ゆたかなるべき事

右の二大綱四要目なるべし

人各々天稟の體質あるべけれど、其如何に拘はらず、攝生と運動とをつとむるは第一なるべし、攝生とはひとり滋養ある食物のみ食せよとの意にあらず、所謂生きとし生ける者のあらゆる慾を程程にするを主とすべしとの意にて、特に飲食其他の體慾を攝せざれば、たとへ完全の身體を具ふる者も、決して懷姙する事あらざるべし、又多少體質の薄弱なる人も此攝生と日々定時の運動とをつとめ、其身に適する度に於て働けば、愛兒を得られざる事あらざるべし。

殊に、朝な夕な、心を汎くし體をゆたかにして、見る物聞く物みな爽快に感ずることこそ肝要なれ、なべての婦人、あるは嫉妬の情つよく、あるは忿怒の念おこりやすく、其他悲しみ怨みなどの情の度に過ぎやすく、凡ての事など樂しみの方面に見る事なくして、ひたすら悲しみの方にのみ考ふる事の多きは、いと悲しむべき事にて、かくては懐姙など到底望まるべきにあらず、いかに健全なるも、いかに强壯なるも、此樂しく快よく平かに安らかなる、うるはしき心身のはたらきあらでは、叶ふべくもあらじ、

書きつらね見ば、誠に平凡なる事なれど、此二大綱四要目をば、眞に實行し得る人幾何あるべきか、讀者深く熟讀せられよかし、こゝによき例あり。そは、

一婦人十二歳の頃までは運動等も適度にして所謂花のかんばせ月の眉とも云ひつべき有様なりしが十二歳より深窓の内に閉ぢこめられ終日爲す事もなく、訪ふ人とても稀に、只二三の人と談笑し、茶、花、文學などの師の時に來るあり、又偶々其師を訪はん爲に外出するのみなりしかば、爲にや諸病の基となり、病の床に打臥しがちになりしかば、かくてはとて、十七歳の冬結婚せらるゝ事となりし時、記者はかたく以上の綱目をかたり其要をば日夕つとめらるゝ事となりしかば、遂に五年の後より玉の如き愛兒を得らるゝ事度々となりぬ。されば其の後は記者に向いて昔し亞歴山大王は、生命は兩親より、善き生活はアリストートル師より貰へりと、常にの玉ひつと聞きつるが、予の愛兒はげに君の言の薬の賜ものなりとのたまふを常とせられき。

◎懐姙のしるし

凡そ婦人十三四歳より五十歳までの間、大凡二十八日毎に、三日乃至五日間ほど、身體並に精神に異常を生ずる事あり、されど姙娠せば(一)其翌月より決して此異常を生ずる事なく、(二)あるは尿量増加し、且頻回となり、(三)あるは頭痛及び歯痛を起し、(四)あるは忽ち眩暈を生じ視力弱く、(五)あるは氣鬱し或は爽快となり、(六)あるは面色忽ち紫色となり、或は暗斑を生じ、(七)特に乳房は暗黒色に變じ、(八)特に味覺に異常を來し、酸き物を好み、遂には常に好みたる物をも嫌ひ、嫌ひたる物をも好み、食すべからざる物をも食せんとし、嘔吐を催すに至り、或は急に惡寒を覺え或は急に發熱し、いとたへがたく打臥し絶食するに至る、此れ惡疽と稱へて、いと困難なる苦しみを爲すに至る。

されば此等姙娠のしるしありしより後は、心身の安靜をつとめ、過激なる運動を止め、腹部を暖め、氣を爽かにし、いと靜かにいと安らかに振舞ふこそいと肝要なれ、

惡疽鎮靜の後、口内炎とて俗に稱する、口舌唇などのあれを生じ、分娩後凡二週間を經過するも尚治せざる事あり、されば何事にまれ深く注意して攝生を怠るべからず、

夏の衛生（承前）

醫學士 岳水書窩主人

夏の氣候は斯の如く、吾人の身體を衰弱せしめ、病原菌を蕃殖せしめ、飲食物を腐敗せしめ、昆蟲類を生育せしめ、以て一方には吾人を抑へて疾病に抗抵するを得ざらしめ、他方には疾病を助けて

吾人を襲ふ便利を與ふるものなれば、吾人の爲には、四季の中にて最も惡しき氣候なり、この氣候に侵されず、安穩無事に、天高く、氣清く、心爽かに、體肥ゆるの秋を迎ふるの法(夏の衛生)は概略左の如し

皮膚を清潔に保つこと　頻回入浴し或は清拭して皮膚を清潔となすときは、皮膚の作用亢進し體内の不用物並びに有害物を體外に排除するを以て、獨り夏季に限らず四季共に必要のことなるも、夏季に於ては、既に述べたるが如く、外圍の氣温昇るを以て體温を放散せしむるの必要あり、體温を放散せしむるに與つて最も力あるものは皮膚なれば、皮膚を清潔に保ちその作用を亢進せしむることは、この季に於て最も必要なり、されども、入浴その度に過ぎ、入浴時間長きに失し、浴の温度高きに過ぐる等は皆な共に不良にして、殊に近時學者の研究せる成績に據れば、胃の鹽酸の量を減少するものにして、胃の鹽酸の量の減少することの夏の衛生上に至大の關係を有することは、前に述べたる次第なれば宜しく注意すべし

飲食物に注意すること　病氣は口より入ると云ふ諺あり、この諺は夏季の病氣に最も適切するものにして、夏に多き疾病は實に皆口より入るものなれば、この季に於て飲食物に注意することは、別して肝要なり、いま其注意を述ぶるに當り、理解に便ならしめむが爲に、左の諸項に分ちて述べんと欲す。

(い)飲食物を撰擇すること　既に述べたる如く、夏は身體殊に胃腸の衰弱を來し、胃の鹽酸量減少し易きを以て、平素容易に消化するものも消化し難く、僅の原因にて容易に胃腸病を起し、既に胃腸病を起せば、虎列剌赤痢等は容易に侵入するも

のなり、而してその原因となるものは殆んど飲食物なるを以て、飲食物を撰擇することは夏季の衞生中最も緊要のことなり、既に急性胃腸加答兒の原因の條下に述べたる所の飲食物は他の氣候に於ても胃腸病を惹き起し易きものなれば、夏は決して飲食すべからず、夏の食物に適當するものは、淡白にして且つ消化し易きものなり、然れども平素慣れたる飲食物を廢するは甚だ宜しからず（有害のものは勿論廢せざるべからず）、平素慣れたる飲食物を廢し慣れざる所の飲食物を取るときは、胃腸の健康の時に於ても胃腸病を起し易し、況んや夏季の如く胃腸の健全ならざる時に於てをや、多くの人は甲地より乙地に轉住するときは、當分の間、胃腸の疾病に罹るものなり、之れ慣れたる飲食物に離れ慣れざる飲食物に就くが故なり、以て慣れたる飲食物を廢するとの不可なることを知るべきなり、甚しきに至りては、少しく虎列剌等の流行せんとする徴あるや、平素慣れたる飲食物を全廢し粥鷄等の如きもの丶みを食し、以て攝生の法を得たりとするものあるも、之れ寸益なくして百害あるものにして、如此人は却て腸胃を害し寧ろ虎列剌等に罹り易きものなり。

（ろ）飲食物の量に注意すること　暴飲暴食の衞生に害あることは勿論にして、殊に夏季に於ては胃腸の力弱きを以て、少しく飲食物の量多きに過ぐるときは最早之れに堪ゆる能はずして疾病に陷るものなれば、決して過量の飲食物を取るべからず、而して彼の間食なるものは一定の食量以外のものなればその結果暴食と同一なるを以て是亦廢せざるべからず、然れども平素慣れたる食量を減ずるは亦不良にして却て胃腸の機能を弱むるの虞れあるが故に特更らに減ずべからず。

（は）飲食物を防腐殺菌すること　旣に述べたる如く、夏は腐敗黴菌の爲め飲食物の腐敗を起し易く且つ虎列剌赤痢等の黴菌は飲食物と共に體内に侵入するものなれば、飲食物の腐敗を防ぎ且黴菌を殺すことは片時も忽にすべからず、さて飲食物の防腐を防ぎ病原菌を殺すの法は種々あるも個人の實用に適するものは只だ熱氣消毒の一法あるのみ、然れども之れ實に諸般の消毒法中最上のものなれば敢て他の法を用ゐるの必要なきなり、熱を以て飲食物を消毒する法は、日常の庖厨に於て行はるゝ如く煮又は燒くにあり、煮るには攝氏の百度以上即ち沸騰するまで煮るべく、燒くには中心に熱の届くまで燒くべし、如此煮るに適するものは煮て食し、燒くに適するものは燒て食するときは決して虎列剌赤痢等に罹ることなしと雖も、旣に腐敗したるもの、或は有害の成分を含むものは縱令煮沸焙炙するも依然有害にして、腸胃を害し或は中毒を起すを以て煮沸焙炙したりとて決して安心すべからず、又一旦煮沸焙炙じたるものも久しく之れを貯ふるときは腐敗に傾くは勿論、再び黴菌之れに附着すべし、又消毒せざる容器を用ゐるときはその黴菌飲食物に混ずるを以て飲食物の消毒は徒勞に屬するものなり、故に飲食物は必要の量を毎回煮沸焙炙して食すべく、器具は毎回熱湯にて洗ひたるものを用ふべし、今少しく細目に亘りて説述すれば、

水は黴菌の最も混じ易きものにして多くの傳染病は水より起るものなれば、之れを飲料水とすると使用水とするとを問はず必ず濾過したる者を用ふべく、夏季に就ては加ふるに毎回煮沸して用ふべし、而して水を濾過するには種々の器械あるも

（ロ）水道の布設せられたる土地には此煩なく敷か

も數層上等の水を使用し得べく洵に幸福の至りなり）內務省技師醫學士野田忠廣氏の考案に係るものは實用に適するが如し。

牛乳、「ソップ」等も黴菌の好んで棲息するものなれば必ず煮沸して飲料に供すべし、その煮沸時間は一時間以上を可とす、就中牛乳の消毒にはソクスレーと云ふ人の考案に係る牛乳消毒器を用ゆるを可とす（此器械は東京神田區淡路町後藤節藏方にて販賣す）而して人工榮養法を以て養育する小兒に胃腸病の多きは「ミルク」等の性質にも因ると雖吸乳器の掃除不完全に因ると往々之れあるを以て夏は使用前毎回熱湯を以て淸洗し而して後に用ゆべし。

酒は敢て煮沸するに及ばざるも不良の者を用ゆべからず、酢醬油等の黴菌を殺す力を見るに、酢は十五分時間位にして赤痢の黴菌を殺し、その度の強きものは一分時間位にして虎列剌の黴菌を殺すも、醬油は七十二時間を經るも赤痢の黴菌を殺す能はず、又二時間を經るにあらざれは虎列剌菌を殺し得ず、故に醬油は煮沸して用ゆべし。

漬物類は概して煮沸するの必要なしと雖も之れを洗ひ之れを切るに注意して黴菌を殺したる水幷に器具を用ゆべし

（に）飲食物の保存に注意すること　斯の如く消毒したる飲食物も保存方不適當なれば更らに何等の効力なきを以て保存方に注意すること亦緊要なり、總て飲食物は直に蓋を覆ひて黴菌の侵入するを防ぐべく、特に蠅蚊等の如き昆蟲の止まることを嚴重に防ぐべし、醫學士川原汎氏は黴菌の侵入を防がん爲め衛生食棚を案出せり、夏季之れに飲食物を入れ、成るべく淸凉の場所に置かば頗る可ならん、然れども之れ只だ腐敗を遲くするまでの

効用あるに過ぎずして全く腐敗を止むるものにあらざれば之れに依賴して安心すべからず
○○○○○○○○○○○
感冒に罹らざる樣注意すること　感冒は人の餘り重きを置かざる疾病なるも、寒冷の時は呼吸器病を惹き起し易きが如く、暑中は胃腸の疾病を惹き起し易く、殊に虎列剌、赤痢等は感冒より起ること間々之れあるを以て感冒に罹らざる樣注意すること亦肝要なり、感冒を防ぐには皮膚を强固にすること最も必要なるを以て每朝早起冷水に浸した手拭を以て軀幹上肢等の皮膚を摩擦し、夜間睡眠するときは所謂寢冷せぬ樣注意すべし、而して寢冷は注意に過ぎ、餘り溫かに着る爲めに睡眠中知らず〳〵ふみぬぎて起ること多きを以て、腹部に腹帶を帶し、蒲團は極薄きものを用ゆべし、間間裸體にて就眠するものあるも之れ極めて不良の習慣なれば斷然廢すべし、又障子窓戸等を開放して就眠することもよろしからず。（以下次號）

產所式（つゞき）

東京女學館講師　有住常子

まもり刀の事

上々にてすぐれたる名作を用ゐらるゝなり、長さは刄の分六七寸ばかりにて拵はなしめぬき鍔なし鞘は小尻を丸くするなり、下緒は短きを用う、わきざしにつくるなり、男女ともに同じ作りにて誕生の日、父君より參らするものなり

守刀といふが正しき名なれど、脇差につくる故に守脇ざしともいふなり

宮參の事

元は、うぶすな參といひしあり、上々にて百日の內は白小袖にして百一日目色直しとて產婦並びに

兒仕女ども色小袖を着す、色直しの祝あり、色直しの祝ありてより、三七日を經て宮參あるべし。又百日に赤き小袖きせて、うぶすなへ參らす、又二百日餘にても參る事あり。うぶすな參とは、出生の地の鎭守の神に參る事なり、氏神へ參るにはあらず、

女禮心得草（十）

日本女學校
禮節助教授　大谷喜代子

◎また〳〵きよ子様に申上候さきごろ或學校にて客むかへの事有之候ひしに諸禮科の設けも候へ共他の受持の先生のうちにて洋風と當世風御このみの御人の御座候て、禮法などにて客に對しては客を不滿足させ候はん、諸禮科の下につきて客の應接は出來ないなど申されをり候が其御人は技藝の敎師にこれあり候ひて、諸禮科といふ學科はかくも不用のものと見られ候學科にや御伺ひに及候かしこ　もと子

◎よく〳〵禮節の事につき御たづね被下ありがたく候、此度はよき事御注意に相成候、いかにも諸禮科の不用に見られ候は、尤にて候、しかし不用と見候人は學問なき人と存候、少々にても學問有之候人に候はゞ、其校の學科に對して、我自身をへりくだりて諸禮科の下につきて、客をむかへ候方、をとなしく誠に技藝の講師らしく候、諸禮科の上にあるやうに平日思ひ居候事、まことにまことにあはれなる次第に候、技藝にては敎師にても、客來の時には諸禮科の敎の下にたちて働き候が本來にて、其人の人からも知られてたのもしき事にて候

一、禮法などにて客に對しずり足でやられて

まに合ねば、客を滿足さする事がならぬといはれ候は、禮法を習はぬからの事に候

さ候へども、不用といはれ候ところは、今世間の禮式あらふもの丶、一番に注意すべき點にござそふらう。

挿花の話（つゞき）

小畑いく子

水のさし方の程度

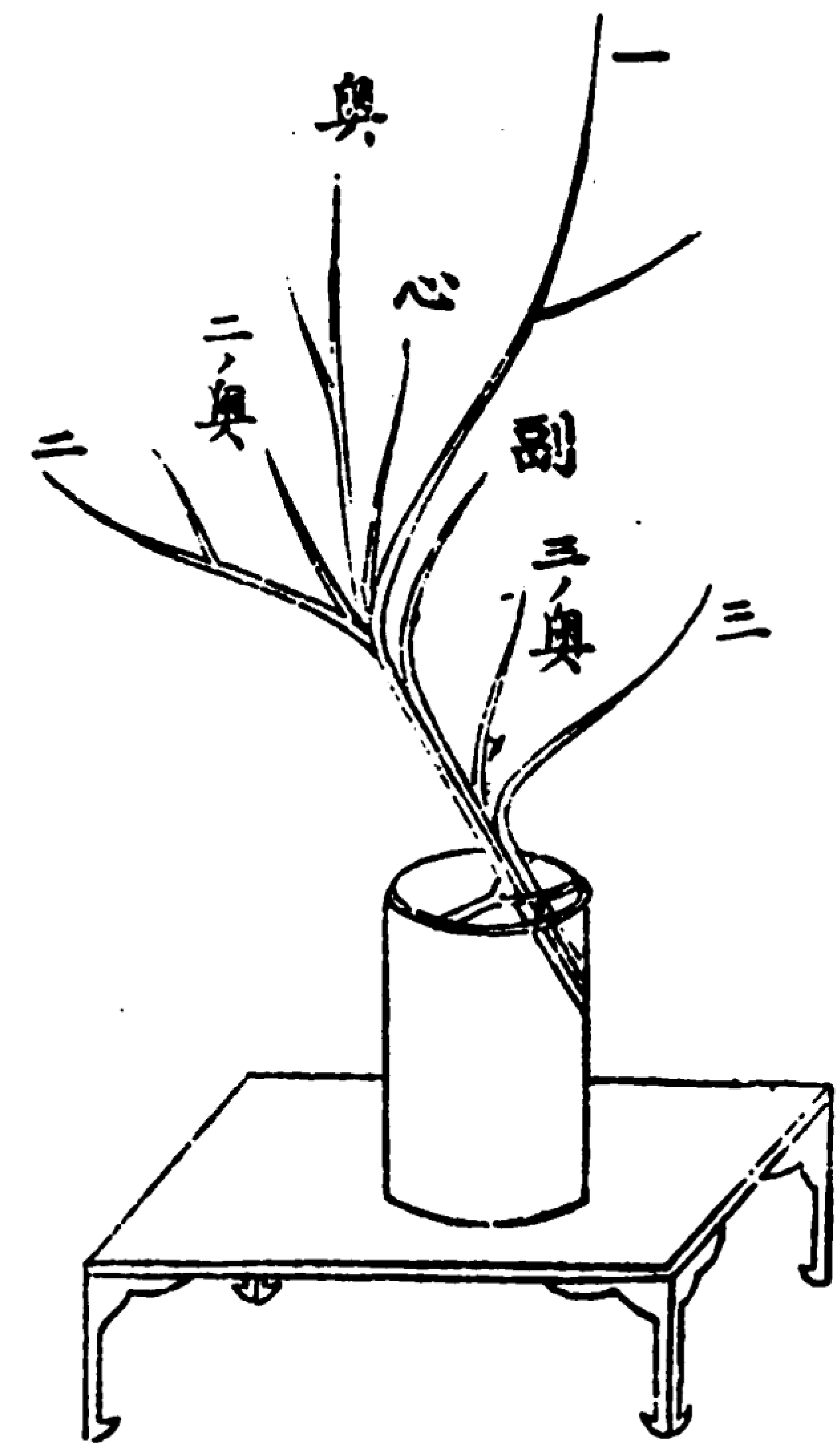
先づ花を挿す前には、必ず花器中の六七分通りまで花を入れ置く必要があります。何故と申せば、第一花器の重みをつける必要がある。殊に人の依頼を受けて挿す時は、幾杯も水をさしかへるのは甚だ不體裁。また望む方にとりても余りに人を勞するに當りますから、平生より、かく習慣をつけ置かねばなりませぬ。扨挿し終りて器中を掃除し水をさし添ふる時は必ず口長き水指を用ゐて、よく其配木の隱るゝ程にさすのであります。然しこれは、四季によりて變りがあります。夏は九分通りさし、春秋は八分、冬は七分位に入れます。それは、夏は水多く冬は少き故であります。また夏は水氣の蒸發する事も速ですから、多く入れて置く必要があるのであります。

挿方の注意

挿花の形式は、三の數が基となるものであります故に天地人といひ、眞行草といひ、眞體副なゞと各流各派それ〴〵の名稱を付して居りますが、つづまる處「一」「二」「三」の三枝に始りまして是を補足したり、復雜に變化したりする爲に、五となり七となり九となりて余るのであります。それより

以上は、必しも奇數でなければならぬといふやうな窮屈な考はいりませぬ。草物などは殊に葉蘭輪挿物を除くの外は幾本にてもよろし、然し株數だけは、三つとか五つとか七つとか明に分るやうにせねばなりませぬ。

第一圖　枝の名称



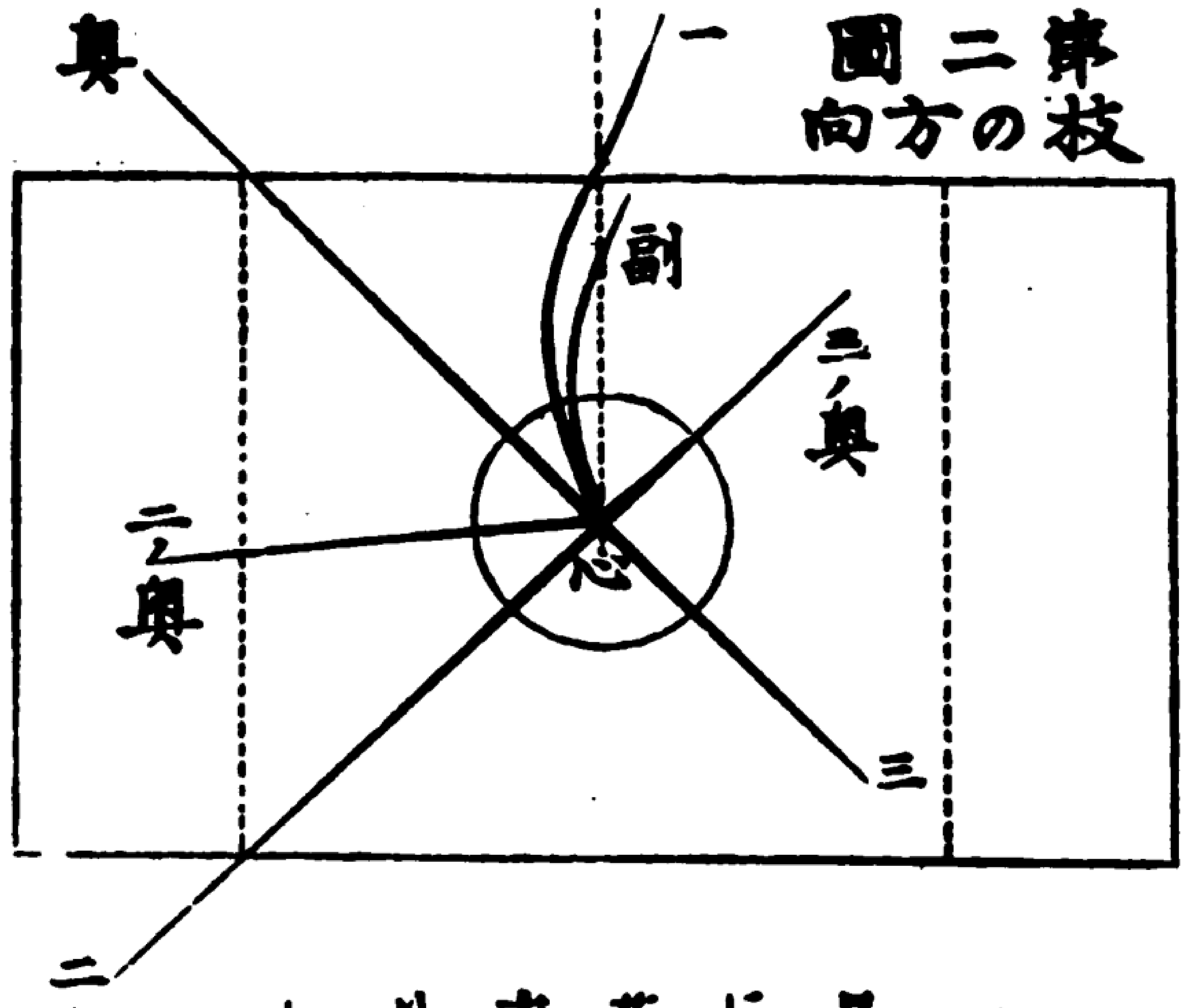
◎枝の名稱　などは、如何でもよろしいのでありますが、是より挿方の御話に移るつもりですから便宜上假に名稱を付て置きます。以後は此名稱に依りて說明を致します。勿論これは大體を現したのみでありまして、此外に「二」の前「三」の前などを使ふ事もあり、また一枝にて二三の部分を兼用する事もあります。つまり其邊は臨機應變でなければなりませぬ。

◎枝の方向　花の左勝手、右勝手と申すのは、床の位置に依て定まるものでありまして其室にさし入る光線が床の左より重に入れば左勝手となり、右より多く入れば右勝手となるのであります。左勝手と申ますは別項本花の圖にある如く「二」の枝が花器の左に出で、是に應じて凡ての方向が圖の如く定まるもの。右勝手はそれと反對で「二」の枝がまづ花器の右に出で、隨て圖の如く、總て左勝手の反對になりて居るのを申します。

そこで凡ての準備終りて花器にむかひ、いざ挿んとする時、初學の人には方向のとり難いものであ

ります。其時は花器花臺の如何に係らず、配木の股の分れ目V|を中心として、花臺が正方形ならば、其前の角の方向に斜に「二」の枝を出し、長方形の花臺ならば、角より少し中の方、正方形の分界の角と思ふ所に「二」の枝を出し、順次圖に示せる如く挿すのであります。若し「二」の枝が前の方

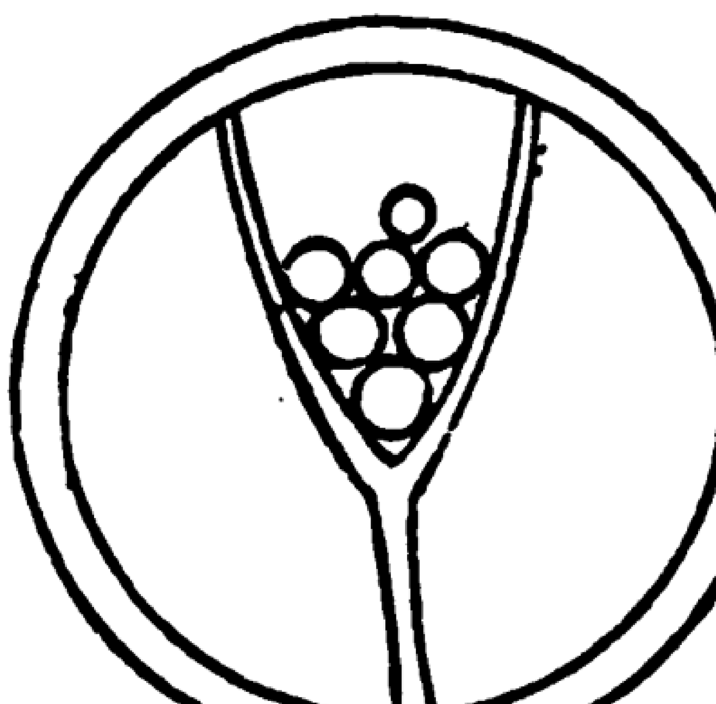
第二圖 枝の方向



長方形は花臺の面にして中の圖形は花器なり點線は正方形の分界を示せり

に來過ると、これを「肩衝」と申して忌むのであります。それは單に挿る者の肩にて花を損ふのみならず挿げ上げてからが誠に見すぼらしくなります。其挿順は普通「二」の枝を始として「二」の「奥」「三」の前「三」「心」「一」「副」「奥」「三」の奥とさすのであります。が、これも材料に依て變更するものであります。まづ「一」の枝を挿して他を

第三圖 配木と枝の關係

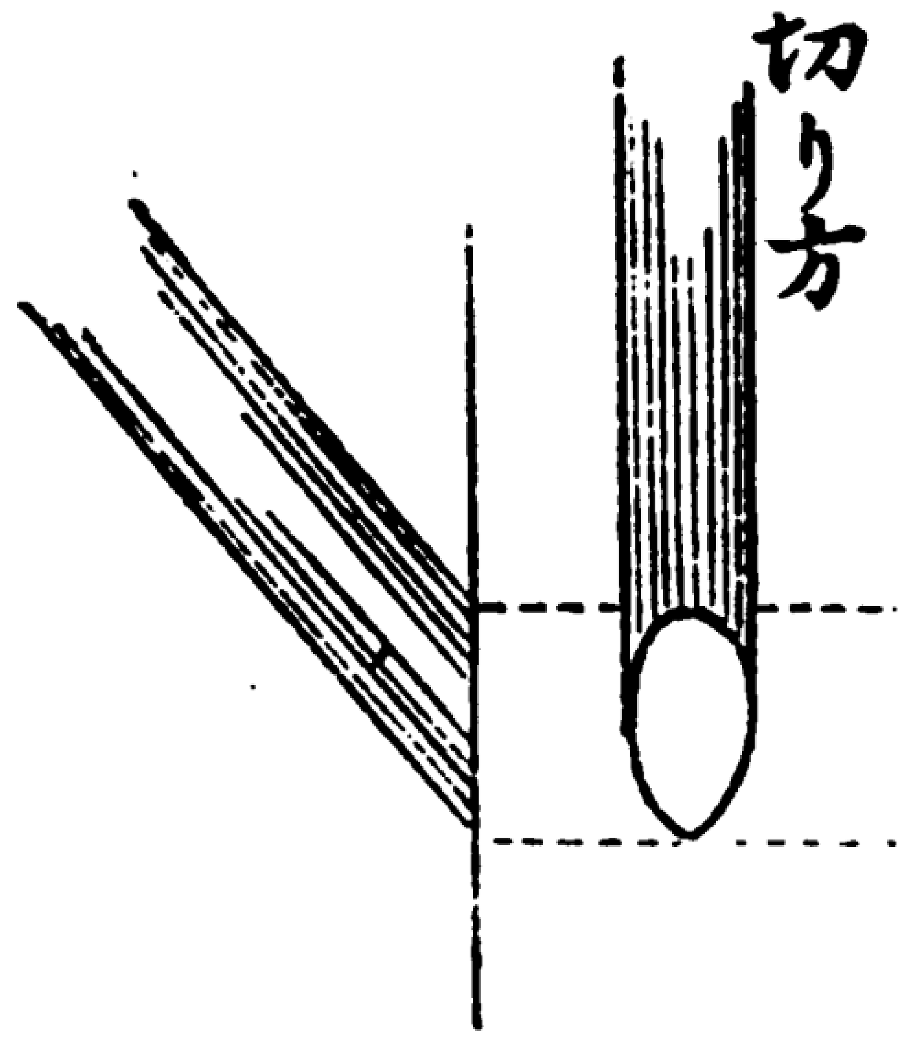


其蔭より出すこともあり、葉蘭の如きは「三」の葉よりさきに挿す方根のしまり方容易なのもあります。木ものに至りましては、殊に其何れに係らず最大なるを幹として前に挿さねばなりませぬ。

◎根の切方 は最も大切なものであります。これ一つで、枝の方向が心のまゝに立つのであります

左圖の如く、斜に花器の縁によくつくやう平面にきるのです。切口と花器の縁とが、一面に密着する事が立つ事の一の要件ですから、平面でないと容易にたちませぬ、流義に依ては立て上げた根に「控へ」を後から張りて押つくるのもありますが「控へ」にて立つ花は直にくづるゝ恐れがあります。

根の切り方



「控へ」などは、無くとも充分立つのでありますから、私は「控へ」などは不用と思ひます。また初學者は、まま立たぬ所から紐などにて結ぶ事がありますが、實に見惡いのみならず、かゝる狡猾手段をとる癖がつきますと、決して熟達は致しませぬから、床の花は勿論、たとへ稽古の時にてもかゝる事は嚴しく禁じて置かねばなりませぬ。

花の種類

花の形は種々ありますが、これを大別して、單挿、組挿の二つとします。其單挿また分れて、本花、高ながし、中ながし、低ながしの四つとなり、また各床の都合に依りて左右の勝手があるから、即ち八種となるのであります。組挿の方も、込挿、二瓶組、三瓶組、五瓶組、二重切、三重切、五重切となりて居ります。されば單挿の本花より述べ初めて順次他に及ぼすつもりであります。

かやうに幾種にも別れて居りますが、本花は即ち其名の如く花の形の本となるものであつて、元來高ながし、中ながし、低ながしの如きは材料もしくは場合に依りて生じた變化でありますから、まづ其本たる本花で充分練習をして置きませねばなりませぬ。

（未完）

だいどころ

割烹學校講師　石井湧太郎

芋かけ玉子

○やまのいもをよきほどに切て、皮を庖丁刀にてむきて、山葵おろし金にて、能々すりおろして此かさ五合に、かつをだしにてときたる醤油三合ほどをすこしづゝだん／＼に入れてすり交づべし(だしはかつをまゝにてよし)
たまごを小さき器へ一つづゝわり入て、外の中器へわけかへわけかへして十個に、かつをだし三合ほど合せて(これもひえたるもの)かきまぜて瀬戸鉢に入れて、蒸籠に入れてむしあぐべし
○さてむしたるを金杓子にてすくひて椀に入れて右の芋汁をかけて出すべし



東京府伊豆新島の女

理學士　福地信世

これから衣服の裁縫の事を御話しますが、晝は農に忙はしいから、衣服の裁縫は、常に夜業か又は雨天の時の仕事にして居る。嗚呼新島の婦人は、少しも閑暇がないのである、次に農業であるが、是は全部を擧げて、女子の業としてある。男子は少しも助けをせぬが普通の例である。耕作物は種種であるが最も主なるものは芋と麥とである。中年の女子は、毎日／＼畠に行き、一心に耕作にも從事して居るが、若い女も、勿論其手傳をして

居る。女子は、朝一家の食事終るを待ちて、大抵畠に行くが、晝食は、極めて僅かの芋にて凌ぎ、大抵午後四時迄は働く。四時頃より家に歸り又僅かの芋にて一時の饑を凌ぎ、夕食に至り、初めて眞の食事をするので、實に驚くべき勉强である。

偖島の婦人は、何物でも此れを運搬するには頭上に載せると云ひしが、然らば肥桶も頭上に載せるかと云ふと、流石に肥桶は頭上には載せない。此れには天秤棒を用ゐる。吾々は、天秤棒と云へば忽に肩と云ふ事が胸に浮ぶが、島では大きに違ふのである。そこが頭上に物を戴せる事が得意の女だけあつて、此の天秤棒を頭にて擔ぎ行くのである。內地の天秤棒は丸くつて下に返つて居るが、新島のものは、三角張りて上に返つて居る。而してペコペコ撓ふのが特長である、女子は此天秤棒の中央を頭上に載せて、兩端に肥桶を掛け、ペコ〳〵〳〵撓はせつゝ歩み行くが、其歩調につれて、肥桶が慢々として上下に運動する狀は、內地では見られぬ奇觀である。

次に水產業の事につきて述べん。此の島の產物として、最も主なるものは、魚類の干物と塞天草とであるが、此の兩種の原料を採るのは、此れだけは男子の本業である。

然し男子は、魚を網で取るまでにして、陸に魚を上げれば、それで職分は盡したのである。それから先き、其魚を開き、魚を干して干物に作る業は主として女の業である。（男子も勿論共に業を操る事は操るなり）また寒天にする海草を採集する事は男子の業であるが、此れを陸に上げてより後は、此れを濱に擴げ、日光にて晒し等する事は、主に女子の職としてある。

此の他、山に行きて薪を採り、此れを頭上に載せて歸り、又時に養蠶をなす等、皆女子の職であるなんと忙はしい事ではないか。

◎◎◎老媼の業　老媼の業と云ふては、是れぞと云ふ事もないが、農産物の取り入れ、及び養蠶などは寧ろ老女の職である。其他、老媼の職として見るべきものは、寺詣りである、新島の老女は、三々五々連れて、赤鉢卷をなし、毎日〳〵寺詣りに出掛る事を好む風があるが、寺詣りは、多少老女の一種の娯樂の如き有樣である。

◎◎◎葬禮の風俗　寺詣りの話に續いて、茲に葬禮の時の女の風俗を一言しやう。元來新島は、全島擧つて日蓮宗であるから、葬式の風も、島全體皆一樣である。葬禮の最も先きに編笠冠りて、青色の紋付の羽織着たる(但し袴はない)男數人が、竿に旗を付けたるものを持つて進む、次に棺が行く、棺は腰輿である。次に位牌が行く、次に又編笠の男數名、旗を持つて行く、次に其家に居る女(即ち妻娘等)が行くのであるが、此の女の風が頗る興味のある風で、今茲に特に述べやうと思ふて居る所である。

此の女は、袖短かき衣を着て、巾廣からぬ帯を〆め、前にて結び、山草履を穿いて居る。頭は勿論赤い鉢卷である、此の女等は、家の者が亡くなりし爲めにとて泣いて居るが、皆大聲を擧げて「カワイヤナーヤンナヤイー」と云ふて泣いて居る。

此の泣いて居る女等は、皆頭より衣を一枚冠つて恰も今日芝居で見る御姬樣の冠つて居る「カツギ」の如きもので、新島では、此れを「カブリカタビラ」と云ふて、青色三つ紋付もあれば、白地又は紫地に、色々の絲で美しく縫がしてあるのもある。

此の女等は悲しみに堪へざれば、歩行も十分なら

ずと云ふ事を形の上に示さんがためにや、親戚又は朋友なる女が、泣いて居る女に一人づゝ附き添ひ、泣いて居る女の手を引いて行くのは、頗る奇觀である。

此の泣いて行く女の風俗は、如何にも古風であつて、王朝の末より、鎌倉足利時代の事が思ひやられる樣である。

○婚姻の風俗○　茲に婚姻の風俗につきて少しく述べたいが、此れはわざと遠慮申して止めて置く事にし、唯一言殊に面白い事のみを述べやうと思ふ。

婚禮の時に、嫁が持つて行く品物の內で、最も大切にする者は、水桶と卵塔桶とであると云ふ事である。此れを以て見ても、女は家の墳墓を大切にする事と、日常缺くべからざる水を汲む事とが、最も重い職である事を知るに足るのである。

○中古の遺風○　女子の衣服頭髮等の風俗は如何にも鎌倉足利時代のものに似て居るものが多い。此れは多分其時代の風俗が、今日此の島のみに殘つた遺風であらうと思はれる。

風俗の事は措置き、女子が多く働き、男子が僅か働くと云ふ此の習慣は、何によりて起つたか？私は、此れも矢張鎌倉足利時代の遺風であらうと考へる。

嘗て鎌倉時代以後より、戰國時代までの一般の世の有樣を察するに、男子は常に戰爭に忙はしくあつた故、家の生計は、皆女子の手によりて營まれ男子は單に戰爭の如き荒仕事のみを事として居つたのであらう。

其頃の習慣が、其當時風俗と共に新島に入り來りて、其後變化を受けぬのであらう。內地では、習慣は時世と共に移り變り、今日の如くになつて居

るも、島は島の特長として、久しく遺風を存し、今日尚女子の手によりて、生計を營むと云ふ習慣があるのである。

今日は太平であるから、男子は戰爭を本職とすることは出來ぬが、漁業の如き、殊に新島の漁業の如き生命をも惜しまぬ荒仕事のみを業とし、女子が生計の多分を營むと云ふ事は、蓋し亂世の遺風であらう。

總じて遺風と云ふ事は善き事であるか、惡しき事であるか、兎に角新島にては、男子は折々漁業をなすのみで、他の凡ての事は、皆女子が營んで居る。恰も男子は殿樣にて、女子は男子に虐待せられ、牛馬の如く、朝から晩までミシ〳〵使はれて居る樣に見える。

一見此れを觀れば、男尊女卑の甚だしいもので、女子は如何にも氣の毒である。一度新島の女子の生活の有樣を見る時は、此れに對して同情を表せぬものはあるまい。

然るに、私は久しく新島に居て、案外の思をなした事がある。それは、家々の家庭を注意して見ると、實は女子が家政の實權を握つて居る所があるやうである。若し果して女子が「我こそ家の生計を立てゝ居る本尊樣なれ」と、威張て居ると云ふ事が眞實であるとすれば、女子たる品格を失したものであつて、實に忌はしき事である。（完）

女子服飾の沿革（第十回）

椎園信成

冠● この事につきましては、史料に乏しいので詳しくお話しする事は出來ませんが、天武紀十一年六月の條に「男女初結髮仍著紗漆冠」と云ふとが

見えて居りますから、此時は男子も女子も、一樣に冠をつけて居たことは明白であるが、此時の令に、只男女共に漆紗冠をつくとのみあつて、男子の冠はしか〳〵、女子の冠はしか〳〵と區別して記してありません。されば男女共に同じ物を用ゐて居たらしく思はれます。黑川博士も、男子も女子も此當時は同じ冠を用ゐて居たとの說であります。で、先づ冠は同じものであるとして、其形は如何なる風であるかと申しますに、これ又昔しより女子の漆紗冠をつけたる圖がありませんから、知ることは出來ません。併しながら、男子の冠着用の圖は、法隆寺の御寶物と成て居る聖德太子の御像、及び輿福寺にある野見宿禰の像並に正倉院に傳つて居ます大大論の畫などに見えて居ります。若し前に申しました如く、男子のと同じ物としますれば、其形は明かに知れます。

女子漆紗冠圖

前



後

上圖は即ち黑川博士が上の畫像に依て書かれました想像畫で、參考の爲めに載せておきます。

今日まで其製作及び形狀は確かにかうであると云ふ事は斷言は出來ないが、何にしろ女子の冠をつけて居たと云ふことだけは確かであります。併し前申しました如く、當時は大に結髮をきらひましたから、其結果、冠をつくる事も好まなかつたと見えまして、間もなく廢せられたらしい。それは朱鳥元年七月の詔に「勅更垂ニ髮于背ニ

何如レ故」とありまして、冠を廢せられた事は見えませんが、垂髪とあれば、其冠は既に廢せられたことは明かであります。されば女子の冠を用ゐましたのは十一年より僅か二三年の間でありますから、材料のないのも尤もなことであります。

●●寶髻　内親王内命婦など禮服着用の時の髮飾であります。前申しました衣服令の中に、内親王、一品禮服寶髻、（金玉を以て髮髻を飾る故に寶髻と云ふ）とありましてこれは髮の飾の名稱であります。後世ならば簪とでも申すものでありませう。其制は令に四品以上は品毎に各々別の制がある。女王にも五位以上毎位に別制あり、内命婦も之に準ずとありまして、各各階級に依て、其制は定まつて居たものでありますが、何分年を經ること久しかつたからして、今日では如何なる制があつて、如何なるものを用ゐて居ましたか、一向知ることが出來ません。それ

上古内親王寶髻の圖



中古以後寶髻の圖



で、又ぞろ黒川博士が種々の古畫古書を參考して作られた想像畫を參考の爲め上にのせておきましたから、之に依て想像が願ひたいのです。

降つて奈良朝の末になりましては、新奇なことが流行しまして、衣服なども次第々々に古制を失ふ樣になりまして、凡ての物が大に變遷しました。これに伴つて寶髻も亦古へは髮飾と申して居たが、此時は早や寶髻を飾るべき下地の頭の結ひ方を寶髻と申す樣にありました。其樣は垂髮を頂の上に取り上げて瘤の如くに結び、夫れに釵子を刺すのであります。この風は、平安朝の中頃までも行はれたものでありますから、委しくは其時にいたします。

此他裝飾品としては、櫛、簪なども在つた樣ですが、此時代は今日と違つて、專ら實用的のものでありましたから、平日頭に刺すと云ふ樣なことはありません。只大禮服の時に着くる外、時々髮を結ふ時位ゐに用ゐたものであります。委しい事は申しませんから、また後に折りを得て記します、

以上、奈良朝の大体で、もとより、誤解した處及び、事實の間違つて居る處がないとも云へませんから、これは後日訂正することゝいたしまして、奈良朝時代はこれにて終結といたして、來號より平安朝にうつることゝいたします。

百夜譚

林恒山

曆の話(つゞき)

此グレゴリー曆を第一に採用したのは佛蘭西で、次に二年後に獨逸に採用せられ、又二年の後に波蘭に採用せられ、英吉利は一千七百五十二年即

グレゴリー改暦より百七十年を經て採用し、我國の採用したのは、前にも云つた通り明治六年即西洋紀元一千八百七十二年で、グレゴリー改暦よりは貳百九十年の後である。斯く西洋諸國では大抵此グレゴリー暦を用ゐて居るが、露西亞は今に昔のシーザー暦を用ゐて居る。其故シーザー暦の閏一日の置き過ぎを改めぬから、今日ではグレゴリー暦とは十二日間も後れて居るのである。

是で太陽暦の出來て來た事も分かつたであらうが、總て暦で一月一日と定めるのは、何いふ日であらう。何も寒い時に限らぬ譯で、暑い時でも何時でもよさそうなものである。又今日の一月一日でなくとも、二日でも、三日でも、四日でもよさそうなものである。其れを一月一日と定めたのは何か仔細のあることであらう。是が分からなければ、今日は何いふ日だいふことも分からぬのである。斯る疑問は尤至極な事で、一月一日といふも人間が定めたのであるから、其れには何かいふことがなければならぬ。今日でも天文學者は春分の日を年始とする。又波斯人は八月十一日を年始とし、回敎徒は七月を年始とし、墨西哥では二月二十三日が年始で、佛蘭西でもシャルマニー帝が十二月廿五日即クリスマスの日に即位して、之を一月一日とし、英吉利でも三月廿五日を一月一日としたことがある。此外にもマリーがキリストを懷姙した日だといふ三月十五日等を一月一日としたこともある。今の一月一日はデー、オフ、シルキユムシーシヨシといつて、キリストがシルキユムシーシヨンといふ宗敎式を行つた日で、即グレゴリー第十三の一月一日と定めた日である。此一月一日が前にも云つた通りに我邦の舊暦で丁度明治六年の十二月三日に當つたのである。

序に今日の曆の不完全といふことに就いて云はう。其故はグレゴリー曆は最早計算が間違つて來たといふのではない、尤もグレゴリー第十三の當時は分數以下四位までの計算より出來なかつたのを、今日では最早分數以下六位までも計算が出來るさうで、推步の多少の差違を生じて之を正すことは出來るには相違ないが、未一日といふ相違が出來て來たといふ譯ではないから、今急に之を改正せなければならぬといふことは勿論ないのである。今の曆の不完全といふ點は、斯いふ計算の側ではなくて、形のこしらへ方である。即月に三十日と三十一日とあるのはまだしもとした處で、二月に限つて二十八日しかないと云ふのは如何にもお可笑、又今日七曜日といふ事が行はれて、日曜には必らず業を休むことになつて居るが、此日曜といふは月々變るから、頗る不便である。若し月の日數が何れも二月の如く二十八日であつたならば、何日は何曜日といふことが極まつて、頗る便利であらうと思はれる。其處で何とかよい工夫がないかと云ふことは、西洋人も疾くに氣附いて居る。其故先年合衆國で、懸賞して考案を募集して見たものがあつた、其時一番名案だとして懸賞を得たのは、凡て一ヶ月の日數を二十八日として、一ヶ年を十三ヶ月とする、すると一ヶ年の日數は三百六十四日となる。其處で一日を別に十三月の末に置くといふのであつたさうだが、隨分面白い考案である。是れでも毎年七曜日が同じいといふ譯にはいかぬが、一年中の月々丈は何日が何曜日と極めることが出來、是丈行はれても便利が少なかるまいと思はれる。倘是れより一層名案があるかも知れぬが、今日の曆は最早改正の考案中にあるといふ丈はいつてもよからうと思はれる。

予は暦を改正するならば、今一つ希望がある。前にも云つた通り、一月一日といふ日は、キリストの宗教式を行なつた日だといふが、耶蘇教國は夫れでもよからうが、我邦などでは面白くない、一層人事を離れて、何國にも何宗教にも關係のない、今日天文學者の年始とする、春分といふ樣な日を一月一日として、漸次世界中に行はしめる樣にしたらよからうと思はれる。

（未完）

都の塵

本居宕水

西の京には、名所あまたあれど、わが東都の方には、そが少きぞ口惜しきや。元より、塵深き巷なれば、かの京には比ぶべくも有らねど、さりとて、みづから無下に、言ひ捨つべきにもあらざるべしと、例の、負じ魂のあづま男には漏れぬ我の、覺束なき筆づかひをかへり見る暇も無く、心に浮び出づる儘を、しるす事とはなしぬ。其の名を都の塵と云ふも、末遂に、かいやり捨てらるべき兆とは思はるれど、さも有らばあれ、思ふ事は云はでやはとて、箒木なせるちび筆とりて、やがて、斯うこちたくは、かき集めつ。

◎千代田城

枝をならさぬ松の老木は、あだ波騒がぬ御濠の水と、常磐の色をきそひ、常しへに變り無き堅磐の石垣にも、動きなき御代の榮えは知られて、名に負へる千代田の宮居、高々に人も仰ぎ、御垣外に布きつめたる小石も、大君が御齡の數とりにと、喜びあへるさへ、げに、御階の櫻に風も靜けき、治まれる御代の春ありけりな。

◎根岸の里

こは、上野の山の麓にて、いと靜けき所なるを、まして、春の鶯、夏の郭公、秋の蟲、など、すべて、騷がしき都の巷にて聞かるべくもあらぬものは、大方この里にてぞ、なく音は洩らす習ひなる。ことに、冬の雪は、跡付くる痴者のうれひも無くて、一際、靜けく眺めやるべかりけり。されば、世の煩はしさを避けて、此の里にのがれ住む風流男も數多ありと聞けど、猶、こゝもうき世には洩れざりけん、呉竹の根岸と云ふさへ、何となう、世のうき節は籠りげなりかし。

◎淺草

西の京近く、深草の里ありと聞きしを、今この東の京には、淺草と云ふ町はありけり。露ちりて鶉なく秋の夕、笛ふきて皷うつ春の朝、ふか草、淺草、何れもをかしかるべけれど、猶、物のあはれは、深草ぞ深かるべき、淺草の淺ましきには似ずて。

◎吾妻橋

我が思ふ人はと、言問ひけん古へに、わが妻と名に負へる此の橋のありたらんには、都鳥のなく音も、かばかり世の人には聞えざらましをと、いとど、其のかみのしのばるれど、今は、程近く、業平と云ふ橋もかゝれりと聞けば、げに、其の靈も安けくてや。言問ひと云ふさへ、所の名のみとはなりけらしな。

◎御茶の水

昔は、此の川のほとりに井ありて、澄みたる水湧き出でしかば、徳川の淸き流の、かしこきあたりも、猶、此の水にてこそ、木の芽は煮たまひけらし。今は、川はゞ廣まりて、此の井もかくれたりと聞けば、知れる人も稀なりけり。あはれ、むさ

し野の野中の清水ぬるき世に、もとの心を汲む人もなれや。

◎枕橋

古へに、誰がうたゝ寢のよすがとやなりけん、此の橋よ、彌生の空ののどけさに、浮かれ出づる世の人は、大方、枕と云ふ此の橋を渡るが、やがて咲き續く堤の、花にあくがれて、現し心も無く、夢路にはたどり入るなりけり。かくて、長命寺のかね、夕暮を告げ、さく花も、二ひら三ひら根にかへる頃、また、うかれ男は、此の枕をすぎてぞ、うつし世の人心にはかへり、おのがじゝ散り行くなる。されど其の折、此の枕をすぎ來ぬ人は、大方は、また眠りより覺めあへで、猶も、川を渡りて、春の夜のあだ夢を買はんとするすき者の類なるべし。

◎隅田川

花に、納涼に、月に、雪に、其の折々、都の人のめでたき遊びは、大かた、此の川の邊にてぞものすなる。げに、此の京に此の川無からんには、あはれ、都の人心、いかばかり、あい無からましと思ふにつけても、荒川と名に負へる、こちたき流れの末とも覺えじかし。

◎烏森

色黒く、あく音忌まはしげなれば、烏を憎きものに云ひなすは、世の常の人心なるを、此の森にすむ浮かれ烏よ。程近き神の社の御稜威やかうむりけん、色いみじう白く、うたふ聲いとをかしげなれば、あか〳〵に愛でたゝへられて、夕暮れ方より、塒もとめにとて集ひ來る者も、こゝらありと云へば、憎しと云ふ言の葉は、唯、燈火の影ほの暗きあたりにて、私語の端に聞くのみなるべし。

あなかしこ。

（未完）

諸道の歴史

文學士　宮崎鳥府

一、茶道

こゝに諸道といへど、そは女子に關する茶道、花道、香道、琴曲等をとりすべていへるなり。これ等は皆みやびたる業なれば、すこし品高からむ姫達は、その方法、禮式などは既に知り給ふめれど、なほ一歩すゝめて、昔のゆかしき跡をたづねむも又無益のことにはあらざるべし。まづ左に茶道のことより始めむとす。

茶道諸流系

- ○珠光—志野道甘
  - 宗陳
  - 宗悟
    - 紹鷗
      - 今井宗久
      - 千●宗●易●（利休流祖）
        - 道庵
          - 桑山重長—片桐貞昌（石州流祖）
          - 金森長重（金森流祖）
        - 織田長益（有楽流祖）
        - 宗●諄●—宗●旦●
          - 宗拙（武者小路）
          - 宗●佐●（千家表）
          - 宗室（千家裏）
          - 杉山晉齋（晉齋流祖）
          - 山田宗徧（宗徧流祖）
        - 久田宋榮（久田流祖）
        - 藪内紹智（藪内流祖）
        - 古田重勝—小堀正一（遠州流祖）

蓋し本邦に於て茶を愛玩したるは、古代よりの事なれども、一の風雅として禮式を定めたるは、足利義政に始まれり。文明十五年足利七代將軍義政、東山に閑居し、其地に茶寮東求堂を作り和漢の雅器を集め、金銀を以て修飾しぬ。銀閣寺とは即ちこれなり。狩野祐清をして、漢土瀟湘の八景を畫かしむ。世にこれを茶室の權輿となせり。義政此處に移りしより、村田珠光、同朋能阿彌、相阿彌等を召して、朝夕茶會を催したり。其頃大德寺に宋より渡來せる臺子ありて、何の器たるを知らざりしが、珠光之を茶事に用ゐ、方丈の室に飾りて、諸人に飲ましめ、それよりさま〴〵苦辛して抹茶の術を工夫し、其法式を定めたり。一説には、筑前國崇福寺の開山南浦正明、正元年間唐に入りて、文永四年歸朝する際に、かの臺子一かざり徑山寺より持來り、崇福寺の什物となせしが、程經て、紫野大德寺へ之を贈れるを、その後、天龍寺の開山夢想國師、此臺子にて茶の湯を始め、茶式を定めしと云ふ。

抑珠光は、もと南都稱名寺の僧ありしが、茶道に勝れたるを以て、遂に召しいだされ、六條堀川に地を給へられき。其名海內にきこえて、茶道を學ばむとするものは之を知らざるなし。誠に茶道の鼻祖と稱するもうべなりけり。子の宗珠も、父の遺跡を受け、其名高し。珠光年老いて臺子の法を、志野道甘に傳へ、道甘又宗悟に傳ふ。宗悟は性を松本と呼び、十四屋休齋と號せり。弘治年中、弟子一閑齋紹鷗に傳へぬ。紹鷗は武田信光の末にして、前名を武田因幡守仲村と稱して、泉州堺に住し、爾來秘傳を得てより、專心自得して、遂に一家を建て、名海內に鳴りて、珠光と併稱せられ、後世茶家の宗匠となせり。其門に納屋四郎あ

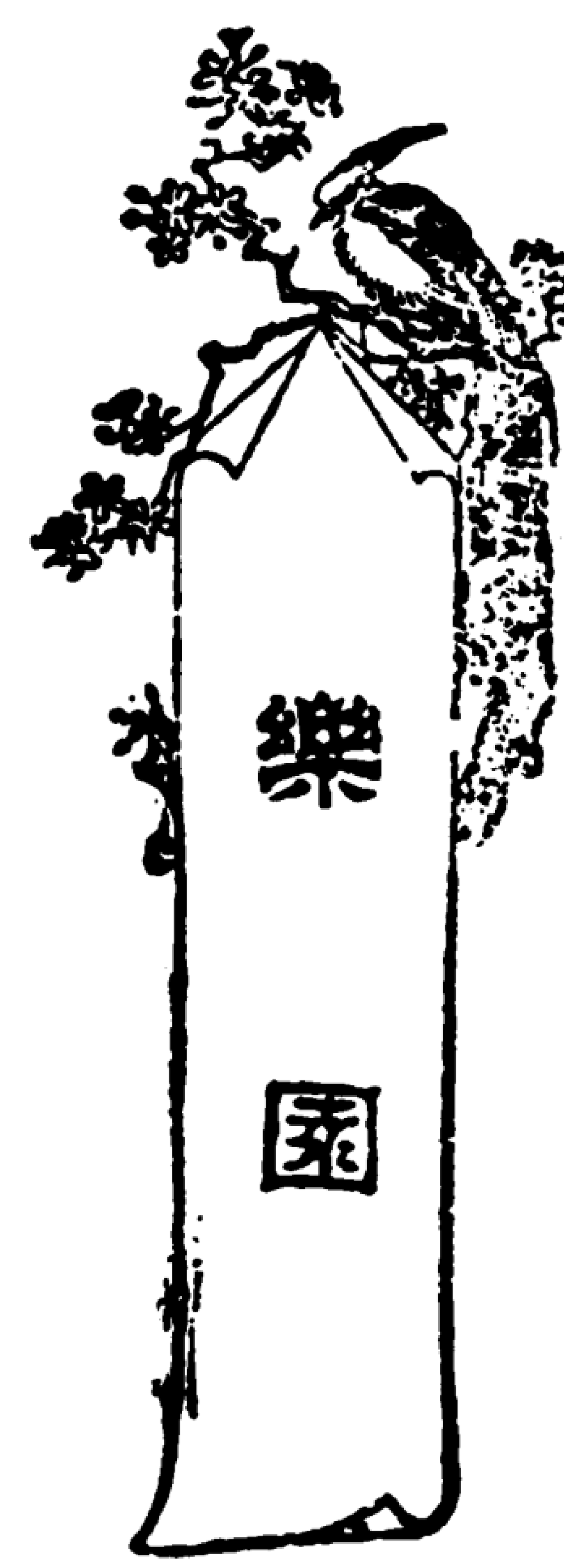
り。泉州堺の人にして、薙髪して千宗易と稱し、抛筌齋利休と號す。これ千家流の元祖なり。足利氏亡ぶるや、茶道を以て織田信長に仕へ、ついで豐臣秀吉に仕へて、三千石を領せり。珠光に次で茶事の法式を改定し、或は茶器の寸法を定めしかば、茶事をいふもの何れも利休を宗とせざるはなし。元龜年間正親町上皇の勅により、茶具を製して奉りしかば、感賞のあまり、居士の號を賜はれり。其子道安宗淳ありて、皆此道を繼承せしが、宗淳の子、宗旦よく父祖の意を得て、大に家聲を振ひしかば、人、千家中興の祖と仰げり。宗旦に三子あり。曰く宗拙、宗佐、宗室、何れも茶道を極めて各々一家をなし、宗拙の流を武者小路と云ひ、宗佐の流を千家の表と云ひ宗室の流を千家の裏と云へり。次男宗佐表たるの故を以て、千家の嫡流たり。此他利休の門にありて、尤も名を得たるは、有樂流の祖織田有樂齋長益、久田流祖久田宗榮、藪内流祖藪内紹智、織部流の祖古田重勝等なり。織田有樂齋は、源五郎長益といひ、信長公の弟なり。茶事を好みて、利休の門に入り、其名高かりしが、利休の沒後一流を創始し、茶家の宗匠と稱せり。藪内紹智は利休の高弟にて、其名殊に高し。之を藪内流の祖となしゝが、當時千家は洛北に住し、藪内は洛南に住せしかば、人呼んで千家を上流と云ひ、藪内を下流と稱しぬ。織部流の祖、古田重勝は將軍秀忠に仕へて、一萬石を領す。其門下道晃親王、慈胤親王、近衞信尋、永井尚政。大野治長、本阿彌光悦大久保忠隣、小堀政一等あり。中にも小堀政一は、德川家光に仕へて、遠江守に任ぜられ、伏見奉行職となり、一萬石を領す。後茶道を以て家光公の師となりき。遠州流の首祖これなり。斯く茶道の家々定まり

てよりは、秘事秘傳など丶稱する事甚だ嚴重となり、其法式を知らざれば、一服も喫する事能はざるに至れり。當時の僧上角の諷歌に曰く

茶會とは湯に茶をたて丶のむことを
しらぬと云ふて人のこはがる

此の如くなれば、茶式も複雜となりし程に、傳授前には、長緒仕組、點、組合點、茶煎飾等十三條の式も備はり、傳授には、茶桶函、唐物點、台天目、盆立、亂飾等あり。尙其上を長盆三段と稱して、眞の點方となす。其三段中又眞草行の三等に區別し何れも極秘となしたりき。次で德川時代に至るも、千家は累世職をつぎ、利休の門下より出でし古田、金森、藪內等前記の諸士これを唱導したりしかば、上下共に流行するに至り、少し風雅たるこ丶ろある者は、皆之を學び、家々に茶室を設け、殊に器物を選び、一個の茶碗に數百金を費すに至れり。その頃宗家としては、小堀政一、將軍の師となりて、遠州流をおこしたる外、道庵の門より金森長重出でて金森流をおこし、杉山晉齋、山田宗偏の二氏は、宗旦の門より出で丶、各々晉齋流、宗偏流をおこしたり。次で片桐貞昌、道庵の門弟桑木重長の門より出で、其名一世に冠たり。貞昌は石見守と稱し、一萬石を領せり。一說に、小堀遠州の門より出づとも云ふ。其身石見守たりしかば、此派を石州流と稱す。其門に堯然法親王、酒井忠能等あり。又小堀遠州の門には、狩野守信、瀧本坊、照乘、澤庵和尙等輩出して、斯道の奬勵を計りしかば、益々隆盛を來したり。利休以來上は王侯より、下は庶民に至るまで、茶を弄ぶこと盛なりし結果、從つて人々之を競ひ、斯く流派を生ずるに及びしなり。而して今日に至りては、此の流派より、又

他の流派を生じ、殆んど記すに遑あらざれば、ここに略しぬ。以上はたゞ茶道の歴史の大略に止まれど、多少讀者の參考とならば幸なり。次回よりは花道、香道等の沿革を述ぶべし。



○虞氏の涙

塚原蓼洲

(四)

抜けは抜けたが其の刀はじやりゝゝといふ音がして、するりとは無かつた。看ると、無慘や、世に在る時は研ぎ拭ひに手を入れて、夏猶は寒きといふ程であつたのが、鬼は逃げやうが猫は飛びつく眞赤な赤鰯と變じてゐる。

母では見るより又もや聲を擧げて泣き出したが、良多時して涙を拂つて、

「輕、もう私は何も云ひませぬ、今迄は彼に逢うて其の所存も聽きたい、此方の異見をも云ひたい、生さぬ中ではあるが家名を續いだ内藏助、仇を討つ心とあらば此方も女子相應の手助けもしてと思ひましたが、もう此刀を見て我も偏執も折れました。あゝ好うも〳〵根性も腐れば腐るもの。然し其の人は腐るなりや腐るも勝手じやが、此の刀は故賴母殿の秘藏の物で、大石家に取つては大切の品、其の犬めがやうな奴に持たせて於いては私が亡い夫に濟みませぬので、此刀は持つて歸ります。の、那の犬めが戻つたりや一應其方から然う云ひ聞けての。然らばじやぞ。」

大小の刀を一所に持つて起たうとする、其の母親

の袖に縋つたは輕、

「其れは協りませぬ、此刀は私が旦那樣から御預りの品、今御持ち歸りになりましては私申し譯が立ちませぬ。御入用なら何卒主樣御手からに願ひまする。」

「はてのう殊勝らしい義理立、其れでも人間並の事云ひますの。其の人間らしい口狀に愛で丶私が一通の理解をします。其もじは其れでも穢多ではあるまいの？」

「え丶」　と驚いた輕は目を瞬つたが、餘りに意得ぬ問條なので返答も容易にし難ねてゐた。

「さわ得もや穢多でもあるまい。其の穢多ならぬ其方が、六條とかの「皮買う」の家へ遣られて、生涯を送らねばならぬ事となつたなら其方は如何します。逃げ出るか、又た依然に温順しうして居まするか？」

愈出で丶愈不思議なので、此方は暗默！後室は然もこそと云ふ身で、疊み掛けて、

「のう、呆れて返詞もなるまいが。此の兩腰も其の通り、刀は貞宗、脇差は波平行安の名作で、今も云ふ賴母殿御秘藏の品、其の秘藏の名作を、此、此の汚穢れた、見るも忌はしい穢多小屋同然の此の家に置いて、犬に等しい那の畜生の手に翫弄はせたりや双刀は甚麽と涕泣ますする？な、其もじと穢多とは左のみの差違ひが無うあつても猶は悲歎きやるじや。況て忠儀な亡い夫の魂の宿られてある此の双刀、此家に置いたら御位牌から血も流れませう、其れのみが彼奴が爲には猫に小判の、其れよりも最つと無益な品、の、其れ故私が持ち歸る。さう思ふが可い。」

所由を聞けば實に有理。然しもの輕も只赤面して、俛首たま丶の齒を嚙切めて、口惜し涙に暮れてゐ

るのを、小氣味好げに覗遣つた母親は、冷ら笑つて出やうとする。

「あゝ待た！」

と一間に聲あり、慌忙てゝ………否、丁々り蹌踉き出でたは、酒の酔の未だ醒めきらぬと見える、其れは内藏助！

（五）

「はう此れは母者、好う見えられた、こりや輕、何を其方は其の樣に氣疎げな顏色して居るぞ。こりや偶の御出に何をなと御馳走申せ。さゝ次へ立て〳〵。………いや母上、其の後はきつい御不沙汰、はゝゝ内藏助、内外の用事でな、いや立て込うでつひ遠方の宅へとては戻らぬ。留守中は變りもおざらぬか。」

と云ふ口の餘りの脫け〳〵と白々しさに、憎さの堪らぬ母親は、云ふまいと念つた口もつひ辷らした、

「其方は他行じやと聞きましたが、何時戻りやつた？」

「はゝゝ、今、つひ唯今、裏口から戻つた計り………。」

「おゝ戻られたで恰ど好い。其方は大石が家の養子じやの。それ存じてか。」

「いやこれは今めいた事、如何にも内藏助、養子でござる。」

「むゝ其れ知つてなりや、離緣のします。亡父賴母殿にあり代つて此の母が今去りましたぞ。」

「ふう、御去りやれた………？」

「いかにも去た。去た〳〵！仔細は云ふ迄も無い事じや。就ては婿引出の此の兩刀、これは母が取戻します。異議あるまいあ。」

「いや有りますの。はゝゝ何さま昔日は千五百

石の知行取、其家を去られては内藏助、些と窮りも致さうが、今は一人扶持の與れ人もない天竺浪人、大石が小石の家名失うても、あはゝゝ、これや御腹立てられたは、蚤の頭を斧で割つた程惜うもござらぬ、が、其刀には異議がある。」

「ナニ異議じや？」

と母親の眼は逆吊つた。此方は平氣で、

「あはゝゝゝ異議と申すはのう別義でござらぬわ。拙者近來不手廻りで金銀な忙がしい。ところで此の双刀、此の程さる人の所望によつて、金百兩に賣り渡す約束いたして、もう其の内金な五十兩受け取りましたじや。それで此刀を持歸られては此方些と迷惑しまする。然し何も金づくじや。强て欲しくば其の百兩を直上げして御買ひ下され。百三十兩なら賣りませう、なあ、如何でえすな。」

母親はもう何も語はなんだ。

「御買上げなりませぬかな。やれさて養父頼母殿魂魄の乘り移つてあるといふ此の双刀、百三十兩ではお廉いもの。これ養父どの魂を百三十兩で買はしやれるのじやが。さ百三十兩！……好は負けろか、百二十兩！これ御覽なれ、裝飾にも大分の金銀はある、潰金にせられてからが二三十兩の價値はありますじや。御手拍たれぬかあ？」

「勝手にしをれ！」

持つたる双刀を投附け……たいは山々なれど、然しも亡夫の紀念といふので、其れもならぬで母親は其場にさし置いた。

「はあ、買はしやれぬ、……いや、去なしやりますか。これは御茶すら進げませいで御無愛想。又た御出で……。」

咽き上げる涙を嚥み下むで、後をも顧ずして立ち

歸る母親の其の後ろ影を、內藏助は如何しだのか見えずなるまで凝望た眼に、何時しかはろり！

「あゝ、もう去なれたか！」

（六）

「酒が出來ました、御氣休めに喫りあんせぬかえ。」　と出て來たのは輕である。

「おゝ苛い時費りのお客が見えたで、折角の酒も醒めたじや。いゝどりや喫うかの。時に輕、何かで乃公は忘れてゐた、大事の用向がありますじや。急用といふが出來たで身は明日、江戸へ立つ。」

「えゝ」　と驚いた彼は少時凝視て、

「什麼じやとて？」

と、其眼はもう淚でゐる。

「いや、江戸三界へ徃んして、といふ洒落でもない。はゝゝゝ置かしやんせ鉢の子か、いや其の俺がのも鉢米の有り附きじや。聞きやれ、大石內藏之助、さる御大名が入らぬ米を五百石與れうとあるで江戸へ行く。然し其れも暫時の別れで、來るか、呼ぶか何れにか爲うほどに、機嫌好う留守して呉れ。」

「はあゝ！」　と輕は堪らず泣き伏した。

其の江戶行は言はでも知れてゐる故主のお復讐、復讐とあれば討つか討たるゝか、縱しや其れが目出たう御本意とあつた處で、御命の無いは知れてゐる。然すれば是れが一生の御訣別！妾といふは名のみの事で、日ごろ御寢床の上下ろしさへ爲せて下されぬ其の御心から、豫て此やうな時節もあらうとは想うて居たもの丶、其の悲しいお別離が、今日とは知らなんだ。ま如何せう！と彼は前後の正體も旣う無いのである。

「はアて面妖な、內藏助立身の首途とあるに何じやとて泣く。其方にも似ぬ、痴呆けた事……。」

「はい。いえもう泣きませぬ。泣きは爲ませぬが、江戸伏見と離れましては………。」

「離れたが甚麼じや。泣いたとて出立が延るか。其れよりも明日は夙いで、倖ひの酒、此處へ持て。疾う喫むで寢まるとせう。持て〳〵。」

「はい。」

盃は出た。饌は勝栗に喜昆布、打鮑もある。

「はう、これは祝うて呉りやつたな。心入れの御饌で身も過ぐさう。其方も一盞飲め。………あ、久しう聞かなんだ爪音、今宵はのう所望せう。」

輕はもう其れ處で無い、言ひたい事は山程ある、聞きたい事も海程ある、然し其れは言ふことも聞くことも出來ぬので、其の海山の思ひの丈も、心の丈も唯遣る瀬ない涙にのみ萬一を語らせてゐる。

疾く〳〵と責められるので箏の前には坐つたが、

柱の立所も爪の當所も掻昏れて分らぬのである。漸々に調子だけは合せたもの〻、扨て其の唱歌、此れが何うも喉から出ない。

「目出たい歌を………。」

「はい。」

此れ程の涙を見せてゐるのに、意地惡う目出たい歌をとは餘りな！もとより御口へ〳〵は出されぬ事、明かされぬ大事とは知つては居るも、此れ迄に空知らぬ顏に御秘匿みなされるは恨めしくもある。其の恨みを責て唱歌に。おゝ其れじや。

「燈は暗し數行虞氏の涙………。」

「呀？」　と内藏助は聞き咎めた。

「………落ちては同じ山水の、岩堰く千々の物思ひ、劃れての末に會むとも、測り難なき契りこそ………。」

「えゝい措け！も、聞きたう無い。目出たい門出

を祝へと云へば………!」不吉と怒つて氣色を變へた大石は、盃を抛げ棄てて突と起つた儘、其後は遂に二度と彼は輕に口を言はなむだ。

◦◦　◦◦　◦◦　◦◦

彼は翌日江戸へと立つた。恁くて復讎の事了つた後、彼は寺坂吉右衞門して、亡き後の紀念に見よと、日ごろ着馴れた彼の緋無垢の肌着といふを伏見に送つた、其れに添へたる文に曰、、

「常意即妙の虞氏の涙、我等世に在りて哀れなる物の音、悲しき言の葉の聽き納め、今もしみじみと身に忘れず候………」

怒つて物も言はあむだと見た彼は、其夜は確かに泣き明して居たのである。

（をはり）

名殘の一夜

（四）

楞　夫

翌る朝、綱子は兄の末雄に伴はれて遊學の途に就いたのである、好く晴れ渡つた朝景色が何ともいへぬ美しさを眸の底へ映じさせてはにこ〳〵ッと微笑みでもする樣に見做されるけれども、綱子は一向に引立たぬ容貌をして、悄然二等室の椅子に座づた、滊車が出る、故鄕の樣が見えなくなる綱子は堪らなくなつて泣き沈んだ。

◦◦　◦◦　◦◦　◦◦

只今無事着致し候、綱子同道叔父上の許に行李を解き候ひしは丁度六時少し廻つた頃に候ひき何れ兩三日中に歸宅すべく、萬縷は其節と申殘し

候、匆々不一

四月二日　　末雄

御両親樣

兄上お歸りの後淋しくて／＼堪らなく淋しくなり、日々東の空ばかり眺めやり、那の山の方に懷しい父樣や母樣や兄さまや姉さまがお在遊ばすのかと思ふとつひ／＼涙ばかり出て、留度なく悲しさばかり添ひ行き申候あら／＼かしく。

四月五日　　綱子

御両親樣

(前略)此頃は入學試驗に紛れて稍淋しさと悲しさとを忘れ居り候、今日一日にて濟み候まゝまたまた身の置處なき樣になるだらうと、其ればかり苦勞に候、試驗は大抵上出來にやつた心得に候へ共如何に候や其れも心配にて、日々面白からず暮し居り候(後略)

四月十三日朝　　つなより

皆々樣まゐる

一筆しめし上まゐらせ候、首尾よく試驗及第候て、今日、入學の許可を得候間御喜び被下度候、叔父さまも叔母さまも非常に御喜び被下、只今私の爲めに赤の御飯をお祝ひ下さる樣仰せられ、まことに忝く候、今日は出京以來の樂しき日にて日頃の憂さを忘れ申候、別紙、お隣の玉子さまへお遣し下され度願上まゐらせ候、何申上度事山々候へ共筆廻り兼ね餘儀なく此れにて筆とめ候、時節柄御養生專一と祈り上候あらあら可祝。

四月廿二日　　綱拜

御一同樣

(前略)漸く落ついてまゐり候爲めにや、初め程

に淋しくなくなり、此頃にては平氣で通學致し居り候間御安心被下候、道の遠いのには少々困り候へ共母上樣の御敎訓もあり、日々怠らず勉强致し居り候、學課の方は六ヶしきものもあり候へ共、大抵は思つたよりやさしく安心致し候、お友達も意地の惡い人は少なく、皆好き人故これまた御心安う思召し被下度候、お絹さまと申す私と同年位の方と一週間ばかり前より御懇意にあり候處非常の結構な方にて、まるで兄弟同樣、お隣の玉子さまを見るやうにて、嬉しく／＼學校へ通ふにも大抵一緒にて樂しく暮らし居候（後畧）

五月十日　つな子

御兩親樣

御兄姉樣

追々お暑く相成候處皆々樣お變りもなく、何より御芽出度祝ひ上まゐらせ候、私事も其後ちとの患ひもせず壯健にて、日々勉强致し居り候まま乍憚御休心被下度候、暑中休暇も追々近くなり其れのみ樂しみ居り候、歸省致すわけではなく候へ共、東京の夏を無事に過して見たいのが樂しみにて、今より待ち暮し候ことに候、お隣の玉子さまは如何遊ばし候や、暫らくお便りなく、御丈夫の事とは存じ候へ共心配のあまり一寸伺ひ上まゐらせ候、寢卷に致す浴衣お序での節御送り被下度、其れから半襟と襦袢を買求めたく候まゝ今月分は少し餘分に頂戴致し度候あら／＼可祝

六月一日　綱より

御兩親樣

（前畧）玉子さまには縫物のお稽古においで遊ばし候由、最早大分御上達の事なるべく、お序の折宜敷く御傳へ願ひ上候、私事も此頃は四ッ身の縫方を敎へられ大抵呑込み申候、今度は本裁を初

むる筈に御座候、めつきり暑くなり候へば蚊も多く堪へがたき程になり候、併し夜は晝間と違ひ涼しくなり候まゝ、大きに凌ぎよく候、お絹さまは此休暇に御歸省なさる由に候、お國は備後尾の道との事、隨分遠い處から御遊學遊ばされ居られ候ことにて、只々感服の外なく羨ましい程の御氣象に候、學校の方もお出來になり此試驗には一番になるのだと仰有つて、大層なお意氣込に候、私も負けないやうに一奮發致す考へにて一生懸命勉强致し居り候

此間叔母さんや光ちやん達と堀切へ菖蒲見に參り候、其澤山な事といつては本當に眼を驚かすばかりにて候ひき、歸りにはもう疲れ切つて、一同車をならべ夕方歸宅致し候、樂しき事にて候ひき

六月十日　綱子

皆々樣

明日より試驗に候、一生懸命夜の眼もあはさず候、併し幸ひに身體は丈夫に候まゝ御安心被遊度候、明日の試驗課目は地理と歷史と數學に候、何も試驗後と申殘 候草々不備

七月〇日　つな

父上樣

母上樣

(前略)只今試驗を濟ませて歸宅致候、自分では何れも、これも旨く行つた樣に考へられ候へ共如何なものにや、表の出るまでは心配に御座候、玉子さまに宜敷く。

七月〇日　綱より

愛する

皆々樣

まゐる

御喜び下され度候、私事第二番にて及第致候

首席は例の絹子さまに候へ共、平均點數は僅か一點の差に候、別紙成績表封入差上候まゝ御覧下され度候先は右御知らせまで此の如くに御座候あらあら可祝。

七月〇日　　　　綱　　拜

御双親樣

御兄姉上樣

（前略）寫眞三葉差上候、私の後に立つて居る方が豫々お話し申候お絹さまに候、私よりはお身長も高し、色もお白し御標致好しに候、一人寫の半身のうち小形の一枚はお隣の玉子さまに御上げ下され度候、私の樣に肥つたものは、本當に澤山はおく候、まるでお角力さんの樣にて耻しい位に候。

昨日上野の精養軒にて洋食の御馳走になり候、是は叔父さまが、私への御褒美だといふ事に候、姉上の御丹精にて、過日は風通の單衣御揃へ御送り下され有がたく山々御禮申上候、出立前の晩の夢など想浮め、思はずはゝゑみ申候、相變らず亂筆御ゆるし被下度念じ上まゐらせ候あら〱かしく

七月〇日　　　　綱子

皆々樣

（をはり）

清風涼雨記

文學士　濱田紅於

小引

思ふことかなはねばこそうき世なれ、志皆敗れて、宿痾さへ起りたれば、都の塵にも住みわびつ。初秋風に送られて、しばし上毛の山水に

うそぶきぬ。羇旅侘傯慰籍の人に乏しく、會心の友は臻らず、雨の晨月の夕、心にうつりゆくよしなきごとを書きあつめて、養痾日記と名づく、清風涼雨記はすなはち其抄出なり、凡庸浅薄はふかく自ら恥づる所、諸子讀むことなかれ

山村水郭を幾めぐりして、こゝに上毛磯部の里の草枕、朝には妙義の嶙峋におりゐる雲のたゝずまひを望み、夕には碓氷の清流岩に躓く音を聴き、小夜更けて涼雨に嘯き、曉かけて清風に口ずさみ、身のいたづきはやう／＼癒えにたれど、有漏雜染の凡夫、心の塵を拂ひつくすに由なくてなかなかうきを重ねけり。おもへばはかなきうき身かな、鳥にも如かぬ人の心よ、草葉にすだく蟲の聲あはれにして、遠音にひゞく鐘は腸を斷つ。碓氷の河水いとゞしく聲立つるは、夜もいたくふけぬらし、いでや幽燈をかゝげて、見ぬ世の友と語らん哉。

馴れぬ山里のわび住ひには、清風涼雨の外に、友とてはなけれども、我は幸にゆかしき故人を伴ひたり。されど、これらは我がためにはかなしき友なりき。「トーマス、ヂクインシー」は、人生の悲哀なる半面を語りぬ。「ヨハン、デルフガンク、フォン、ゲーテ」は悲しく苦しき情を說きぬ。胸苦しくしていもねられぬまゝに、袖かき合せて「オピヤム、イーター」を讀む。あはれ多情多恨ある「ヂクインシー」よ、そがやさしき温情は到る所に流露すれど、その情緒の殊に纏綿せしは、哀なる「アン」にぞありける。「アン」はやさしくめでたき處女なりしかど、無情なる天命は、これをあさましき憂川竹に陷れしものから、「ヂクインシー」は厚き熱誠と深き憐愍とを以て、これを庇保せり

き。しかも彼はこれを甚とせずして自白し、かゝる薄倖ある處女と親しむは、少しも恥づる理なきを道破して、冷淡刻薄死灰の如き、唯物先生高標紳士の意表に出でぬ。由來哲學者あるものは、一視同仁、その門閥教育に執着するものにあらず、賢愚尊卑を差別するものにあらずとは、その永劫の主張なりき。されば一たび「アン」と相別るゝや再びこれを見んとて、いたく煩悶せり。晝はひねもす、夜はよもすがらおもひなやみて、遂に「最早「アン」を見ることを欲せず」と叫びしは、煩悶の絶頂を超越せし最後の失望なりき。されどその最終の決心は頗る平靜なりき、彼は云ひぬ「たとひ重壤相隔つるとも、我は「アン」を忘れじ、我は常に「アン」の身の上を思ひつゞけて、巳がわびしらをなぐさめん」と、醞籍ある言葉の裏、熱き涙の滂沱たるを見ずや。この夜軒の玉水音しめやかに、して、身を知る雨もいと繁く、涙の海に枕たゞよひぬ。」

◌　◌　◌　◌

軒頭の啁々に困しき夢を破りて、やをら閨を出づれば、昨夜の雨はなごりなく霽れて、蒼空碧玻璃のごとし。飛橋に立つてながむれば、前栽の翠微零露を帶びて、朝日花やかにさしたり。ゆくりなく寓を出でゝ、碓氷河畔を行吟す、水流淙々として松濤謖々たり。瑞枝さしかはす綠の陰に、赤蜻蛉のゆきつかへりつ、秋を告げ顏にあそぶ。鑛泉橋に佇んで、ふりさげみれば、北方二里の前程妙義の奇峰、峻岨の全形を效し、天つ神の鑿もて削り立てし天險、崛岫嶕嶢たる危勢將に飛ばんとす。崎嶇の山容、鏗鏘の水聲、以て胸中に磅礴せる鬱積を舒暢するに足るなり。青葉のかげ清く風涼しき所に盤桓して、靜に萬葉集類葉抄を繙く。

山河の清き川瀬に遊へとも
　奈良の都は忘れかねつも
岩走る瀧もとゞろに鳴く蟬の
　聲をし聞かば都しおもはゆ
天さかる鄙に五年住ひつゝ
　都の手振忘らえにけり

嗚呼おもへば、我病軀を擁して帝都の風月に負くことすでに旬餘黃塵萬丈の裏、賴なき人、うらめしきもののみ多けれど、帝京は寤寐にも忘ると能はざるなり。わが才疎にして恒人に後れ、終始轗軻不安の勢にありとは云へど、帝京一日も去るに忍びざるなり。

　天さかる鄙にも月は照れゝとも
　　妹を遠くは別れ來にける

寓の鄰室に淑女あり、琴をよくす。絃歌の聲終日耳に滿ち、嘈々切々悉く我室に來る。この日淑日

露組の唱歌を彈ず。嬌音宛轉として、大珠小珠玻璃盤上を走るに似たり。

　かげと云ふも月の緣きよしと云ふも月の緣
　かげきよが名のみにてうつせど袖に宿らず

これぞうき世のさがなりける。淑女よく世路の嵯峨を知れるか。心なぐさにかなづる歌も、あすは誰が身の上となるらん。

☆　☆　☆　☆

夕の風の心ちよきに、寓後の坂路を逍遥りて、淺茅が原をとめくれば、草葉の露を命にてかごとにすだく蟲の聲かな。夏衣の裾もいまだ取りつくさゞるに、つゞれさせとのいさめをきけば、ゆく末のおぼつかなさぞおもはゆる。ちゝこひすだく簑蟲よ、我もなき父母にあこがるゝものを、かなしきこえなきかせぞ、しばしなりとも、礫砢たる小石に行きなやみて千歳の松がげをしばしの宿とた

のみ、その盤根にやすらへば、いづこより慕ひ來たりけむ、白き小狗の愛らしきが、うち仰ぎ我前に蹲きゐたり。よく主の恩を忘れずて、まめまめしう仕ふるものを、誰が犬じ物など云ひそめけんと、あはれにおぼえて、頂かい撫づれば、尾をふりつゝ馴々しげに戯れかゝる。あはれ剛直犬の如きは、土に寢て飯にだも飽かず、便佞猫の如きは閨闥に出入して甘脆に厭く。氣節の士矜持高ければ、世に捨てられ、空しく利器を抱きて、獱獺の笑ふ所となり、臥龍に終るもの幾許ぞや。利巧の人、好んで膝を權貴に屈するものは能く浮雲の榮華をなして、非人も往々顯達す、顚倒是より甚しきは莫かるべし。

沈思多時、衣手やう〳〵寒きにおどろきて仰ぎ見れば、星の光もいつしかうすれゆきて、雲の往來もたゞならず、やをら身を起せば、小狗は一こゑあはれになきて、行衛も知らず走せ去りぬ。歸來孤閨に清座して瞑想すれば、思轉綿々たり。枕につきて眠らんとすれど、眼いよ〳〵さえて、夢遂にむすばれず、更に身を念ひ家を念ひ、切に帝都を偲ぶ。詩云 瞻二彼淇澳一綠竹猗々、有二斐君子一、如レ切如レ磋如レ琢如レ磨、瑟兮僩兮赫兮喧兮、有二斐君子一、終不レ可レ諠兮。

つとめて、雨いとゞしく降りしきり、清風座に滿ちて、こゝちいはん方なくすが〳〵し。明窓の下淨几を控えて「ゲーテ」の悲劇「クラヴイゴー」を讀み、我は思にえ堪えで泣きぬ。げにや戀とはたのしくして又苦しきものなるべし。破鏡匳に復りて落花枝に上りし時、うつくしき「マリー」の喜悅はいかなりしぞ、明鏡再び碎けて、鴛鴦の衾冷なりし時ものうげなる「マリー」の苦痛はいかなり

しぞ。「クラヴイゴー」に對する「マリー」の眞情は全くその生命なりけらし。されば「クラヴイゴー」が二度の變節をきゝしとき、其胸中の苦痛を治すべき藥石はたゞ一つあるを覺悟して、その賜與を神に祈れり。その藥石は死の外に何物をも意味せざりしなり。おもひの胸をうち出でゝ、姉「ブファイー」にかきくどきし言葉の、いかに酸鼻をきはめしかよ。「マリー」終始いとはしき名を呼びつゞけてむなしくなりぬ。嗟乎隱忍輕薄ある「クラヴイゴー」が、自己の品位に執着せし褊狹は遂にこの爛熳花の如く、皓潔雪の如き「マリー」をして、絶望の奈落に陥らしめたり。世の唯物先生高襟紳士、試に葡萄の甘き汁を舐めよ、薔薇の清き香を嗅げよ花菫の快き色を視よ。神聖無垢の眞情は甘く清く快きものぞかし。

されど〳〵至誠は人を動すものなり。さすがに輕薄なる「クラヴイゴー」も、「マリー」の赤誠に恥ぢて、その柩にひれふしつゝ、いたくおのが罪業を悔ひて、血の涙は眠れる如き「マリー」の頰を濡しぬ、さは云へど、「マリー」の兄「ボーマルシエー」の憤怒は、この涙を以て融和せしめえざりき白刃鞘を脱するや、紫電きらめきて鮮血迸りぬ「クラヴイゴー」はおのが碧血を以ておのが罪障を洗ひ去り、微笑を娑婆の名殘として、こひしき妻を白玉樓に追ひ行きたり。あはれ至誠は人を動すものぞとよ。

淹留已に一旬に垂んとす。狹隘なる山里には住み飽きぬ。歸心頻に動いて堪へがたければ、晴れ間をまちて行李を理め、倉皇として火輪車に投ず。車窓に凭りて顧みれば、雨後の新綠更に鮮を加へ、妙義、赤城、金雞、金洞の諸峰莞爾として我行

を送るもの丶如く、磯部の里は雲烟模糊の間にかくれて、復たその一角をも見ること能はず。（大尾）

文林

加茂眞淵　　東久世通禧

かけ高き岡へのまつにふくかせの
調へは千代にのこりけるかな

巖　　長岡護美

萬代のかめもあそへるなりしまの
いはほは苔のふかくむしけり

夜梅雨　　竹屋光昭

夕はれはしはしなりけりみし月も
またかきくらすさみたれの頃

瓜蔓になりたり　　水野忠敬

おもしろく瓜のさま社みゆるあれ
這ひまつはれるつる長くして

水族館　　宮地厳夫

わたつみの底に入ぬることゝちして
魚のすみかをみるやかたかな

撫子一もと　　北郷久政

なつかしくたかはこくみて育て劍
色もゆかしきなてしこのはな

夏松　　小出粲

古葉みなこほれつくして夏やせの
すかたすゝしきその丶高まつ

遠帆　　鎌田正夫

見るか中に帆影あまたに成にけり
おきは追手にふきかはりけむ

竹徑通幽處　　千葉胤明

清水くむやまひとならて通ふひと

ありともみえす竹のしたみち

蚊遣火　加藤義清
かやり火のほのかに見えて山本に
有りとしらるゝ木かくれの宿

山寺子規　蜂須賀隨子
照つきのたか野のおくのやま寺に
わかつきかけて鳴ほとゝきす

禁苑新樹　柳原愛子
いつくしみひろき御園もさくら木の
若葉にせはく見ゆるころかな

深山瀧　小池道子
鳥か音も聞えぬ山そとよむなる
くもより奥にたきやおつらむ

夏市　松平健子
めせめせといち路にいてゝ氷うる
聲さへあつくきこえけるかな

蟬聲　保科節子
鶯をきゝしこすゑも茂りあひて
かしましきまて蟬そなくなる

石川丈山　常磐井文子
わたらしとかたくちかひし石川の
底のこゝろそはかりしられぬ

千代野尼　三條章子
若まつのみとりの髪をかりたちて
かへぬは千代のみさをなり鳧

雨後新樹　佐藤艶子
なりかきのかなめの若葉露みえて
過にしあめのあとそすゝしき

拿破崙第一世　小川直子
立かへるおとは天にもとゝろきぬ
えるはか島のおきつしらなみ

引田部赤楮子　服部磯子

大君にめさるへき日をまつほとに
いつかやそちの齢へにけむ

歌ほご

醫科大學　永潜生

○夏のころ、母君の病なぐさめんとて、矢掛なる伯母君の來給ひし折ふし、わがために、四季の曲とかいふ、妙えなる調べを、かなで給ひけるに、心ゆくばかり覺へて。

ものおもふけふのたもとに露そへて
ことぢにおつる山ほとゝきす（夏）

かけ清く月かけしろきこの夕
秋をのせくるつまことの聲（秋）

みなつきの空ともいはす小夜ふけて
かたふく月に千鳥なくなり（冬）

つとめて、よべの樂しさの、忘られがたくて。

あはれ〳〵ゆめかうつゝか夢ならは
おほろつきよの春の夜のゆめ（春）

○庭前に咲ける、白萩の風情、またなく覺へければ

しら萩の花は一つをつきにめて
つゆにもめつるけふにもあるかな

○冬のころ、年久しく仕へまつる師の君に侍し、逗子より鎌倉に通ふ路を、そゞろありきして、打くつろぎたる物語しけるが、またの歳の春、おのれひとり同じ路を辿りしことありしに、そのかみのこと、わすられがたくてなん。よみて奉りたる。

世を泣きてきみとかたりし道の邊に
すみれたんぽぽいまさかりなり

○秋のころ、友の病をとひてやる、文のはしに。

きり〴〵すいたくな鳴きそこの夕
　わか思ふ人はいねがてにせん

○夏のはじめに、友の病おこたれるをいはひて。

ほとゝきす雲井にあのるひとこゑに
　はれてうれしき五月雨の空

○ゆかしき名のみは聞けど、年久しう、え逢はざりつる友の許へ

鶯のねをこひつゝもいたつらに
　梅あき宿をかこつけふかな

○親しき友の、西の學びの業了へて、歸りきつるが。ほどなく、仙臺なる醫學專門學校の教授に、任せられしを送りて。

たとりゆく文のはやしに春ふけて

　つゝちか岡に君つきにけり

みやき野の流れはきよし艸青し
　千さとの駒にみつかへよきみ

○永井松三君は、わがふたつなき友達なり。かつて寫眞を贈り給はりしかへしにとて、戯れに、かきてやりたる

風きよきなか井の浦のまつかけに
　われとこしへにあらむとそ思ふ

○こその秋、矢掛なる弟と妹との、新婚をほぎて。

よき父となれよき母となれよき子われと
　やをよろつよの神にいのらむ

かくはしききくのしつくをすみにすりて
　はき歌しるすけふにもあるかな

○松坂伯父君の、華甲の賀を、四季今樣に寄せて。

春

はくとよみきに影みえて　一本さける梅の花
匂ふにはひのゆかしさは　君か心に似たるかな

夏

きみか千町の田のおもに　植ゑわたしたる若早苗
みつはのあきの色も見ゆ　とめるはきみか心かな

秋

御園に匂ふきくのはな　天つ星ともまかふなり
もゝとせ經て其の花に　老やわすれん君こそは

冬

降つむ雪に色かへす　松の老木はたちにけり
かしらに霜をいたゝける　きみか姿をすかたにて

○川上氏に、喜字の賀あり。壽親いたく菊を
めでらるゝよし、きゝければ

流れも淸き川かみの　岸邊に匂ふきくのつゆ
その一しつくこほれては　千歳の水となりぬへし

玄林

早苗をよめる長歌一首　　下田春興

賤の男はすけかさかふり
賤の女はたすきとりかけ
とり〳〵に田歌ひまなく
大君のめくみのつゆに
朝な夕なうるはひせたつ
はしり出て小田の玉苗
うゑぬへき時來にけりと
たなひちにみおわかきたり
むかもゝにひちかきよせて
しかこしのいたけくしらに
しかうてのつかるゝしらに
やかてこむ秋をたのみに
とりかゝる露のたま苗
こゝろきよしも。

野の百合

敏子

ゆきかふ人もまれなりし
山田の里も小くるまの
通ふ大路となり行く中に
哀れ黄金や白金の
杖しおらずはわけ入らん
すべをだになし學の道は
心の駒にむちうちて
文の林の奥深く
わけ入る人の多かる御代に
たつきなしとてひらけ行く
道もたどらでいたづらに
遊びて暮す身の行末は
道なきやみをそこはかと
ふみ迷ふらんあきらけき
御代に生れし甲斐やあるべき



七月廿日兼題

夏旅

天　東京市麹町區富士見町一丁目一番地　戸賀崎治子

見るひともなくて散るらん我か宿の
のきのたちはなかきのうのはな

評、旅にして故郷を思ひ出たる情さもありなむ。

地　大阪市西區阿波堀通五丁目六十四番屋敷　原田照子

さやかにも今宵ききけりひとりぬる
旅のまくらのやまほとゝきす

評、趣意よくとほりてあはれ深し。

人　北海道札幌區南三條四
三丁目山田長治郎方　山田婦美子

くさまくらみやこにかよふ夢の間に
はや明けわたるなつの夜のそら

評、調つゞきなだらかによくとゝのひたり。

甲之部

大阪　伊勢村春子

あふ阪のせきはなけれとたひゝとの
こゝろとゝむるましみつのおと

肥後　千知波橘子

旅ころもあつをわすれてふきわたる
かせもすゝしきさよのなかやま

東京　内田きみ子

なてし子の床なつかしき野へにきて
かりねはすらめあつのたひゝと

東京　古矢みつ子

ふみわけて深くもつゆにぬれころも
そてにすゝしきたひのあさかせ

肥後　徳永萬壽子

風かよふやなきのかけにたちよりて
あつのたひちのあつさわすれむ

肥後　鶴田貞子

旅ひとはあさたちすなりなつの夜の
つきけのこまのあかきはやめて

東京　戸賀崎久子

ふる里をしのふのをかのほとゝきす
こゑきく夜半そおもひまされる

東京　安井きやう子

草まくらひるのあつさもわすられて
たひねすゝしきまつのしたかけ

丹波　大槻まつの子

夏のあさけをかへの松のしたつゆに
ころもてぬれてゆくたひちかな
大隅 上田うき子

なつころもきなれぬ旅のゆふくれに
こゑもさひしくなくほとゝきす
大隅 上原雛子

うかりける旅のあはれをけふもまた
おもひかさぬるさみたれのそら
大隅 野田くみ子

ほとゝきすなきねきゝつゝゆく旅は
あかつきやみもうしとおもはす

乙之部

松かけにしみつのもとにいこひつゝ
おくれかちなるたひにもあるかな
上總 高石とよ子

ゆきなやむなつの山路はおりたちて
またむすひけりたにかはのみつ
東京 椎野秀子

たひころもすゝしくなりぬ夕たちの
はるゝをしはしまつのしたかけ
東京 椎野薫子

岩根ふみみねをこえつゝゆくたひは
なつなりなからなつとしもなし
東京 椎野ぬき子

ほとゝきすこよひもきゝつ草まくら
かりのやとりのうさもわすれて
東京 大木光子

風かよふかたやまかけにめくりきて
あつさわするゝなつのたひかな
松山 水木よし子

いささらはしはしいこはむ旅ころも
すゝしきのちのまつのしたかけ
松山 梯たけ子

清水くみゆふかせまちてせみのはの
かろくもいてしたひころもかな
長崎 日高かず子

旅ゆけは富士か嶺見ねてかせかよふ
もりのしたみちなつとしもなし
東東 名木勝子

旅ひとのすけの小かさにゆふ日さし
くりのはなちるをかこえのみち
大阪 林常子

ほとゝきすなく聲のころあさくもを
ふみわけてゆくあしからのやま
大阪 原田芳子

いはまもるしみつのもとの涼しさに
おもはすゆめもむすふたひゝと
大阪 大阪谷信子

蟬のなくこゑよりほかにともそなき
このみなつきのたひのやま路は
三河 本多きさ子

山かけのくさ葉のつゆをふみわけて
なつをよそなるたひそたのしき
東京 田中秀子

あさなきに海つらとほく見わたして
つゆふみわくるたひちすゝしも
東京 近澤和子

夏ころもいそのたひねのなみまくら
うらかせすゝしゆふくれのそら
茨城 荒野たに子

道のへのまつの木の間をもるかせは
廣島 衣笠澄子

たひゆくひとのいのちなりけり

しけりあふ木かけ／＼にやすらひて　肥後　田代艶子
みちはかとらぬなつのたひかな

夕たちにぬれしたもともほしあへす　肥後　田代綾子
木かけたとりてゆくたひ路かな

うきものとおもふ旅路のくさまくら　肥後　筑・紫春子
むすふもはかななつの夜のゆめ

道のへのならこのかけにやすらひて　肥後　徳永識子
こととひかはすなつのたひひと

しはしとてみとりのかけに夏の日の　肥後　徳永廣子
たひねのゆめなむすふうれしさ

おしなへてしけるこすゑの深みとり　東京　平尾あさ子
あさけすゝしきたひのそらかな

飛ほたるそてのつゆをやしたふらむ　東京　片山あさ子
あくかれてこしくさのまくらに

さなとめか歌ふ小うたもめつらしく　東京　戸塚てつ子
あつさわすれていこふたひひと

わきいつるいつみの水としけりあふ　伊勢　池田梅子
こかけなたのむなつのたひかな

月くさなひきむすひたるたひまくら　肥後　鶴田梓香子
いとゝつゆけきなつのあけほの

旅ころもかされきそちのあけほらけ　肥後　佐々有鄰子
さみたれはるゝそらぞうれしき

すゝすしやと立よるかけもなつのそら　肥後　佐々小琴子
ひなのなか路そたとりかれける

おひしける大木のかけないのちにて　東京　林　環　子
しはしやすらふなつのたひかな

道のくにおひしけりたるたての葉の　岐阜　吉村せい子
からきは夏のたひちなりけり

たきかはのなかれにそひてゆく旅は　大隅　山田よれ子
てるひさへにもすゝしかりけり

めつらしき野ゆき山ゆきおもふとち　信州　臼井ひさ子
かたるたひちそたのしかりける

あさほらけつゆの玉のなうちすきて　京都　坪内りき子
なつのやまちなこゆるたひかな

たちよれはあつさわすれつ旅ひとの　筑後　鏡山増代子
しはしやすらふましみつのもと

みしかきなかこつはかりか旅まくら　長崎　八尾いへ子
かされてやとるなつのよのつき

まつち山ゆふこゑくれてほとゝきす　和歌山　長尾　小ゐい子
はつねかたしくたひまくらかな

ひるねして月夜にこゆる木そやまの　松山　上原のぶ子
なひにはなつもなつなかりけり

たに川のなかるゝおとなきくほとは　東京　泥堂菊代子
なつのたひともおもはさりけり

さみたれにいとゝ日數もふりぬれは　埼玉　前野ふさ子
ほすひまもなきたひころもかな

くさまくら露のひるまはやすらひて　埼玉　前野嘉賀子
ゆふへにいそくなつのたひゝと

朝またきすきのしたみちゆくほとは　大隅　平田二葉
なつとしもなきお木曾のやま

ほとゝきすこゝろしあらはゆく先な　大隅　宇都涙子
わかふるさとのはゝに知らせよ

分けのほる峯にひかけはさしなから　大隅・平田花子

すきこしさとにゆふたちのふる

旅ころもひもゆふくれになりぬれは　大隅　前田花子
みちのしるへと保たる飛ふなり

たちならふ松のこかけのすゝしさに　大隅　宇都常子
たひのつかれもうちわすれけり

丙之部

しはしとていこふ旅路のくさかけに　東京　小川たき子
ひともとさけりひめ百合のはな

まかれちをはしる車のある世には　伊豫　淺江富子
なつのたひちもやすけかりけり

とほくともあつさわするゝ松かけを　伊豫　松山春子
たとりてゆかむなつのたひ路は

とほからぬ道もと保しとおもふよは　伊豫　原廣子
なつのたひちそこゝろくるしき

いのちともいふへき物はあへきつゝ　伊豫　春野花子
こゑゆくたひのしみつなりけり

たひ人のそてもかるけにみゆるかな　東京　椎野清子
ゆふかせそよくなつのやまみち

五月雨にふりこめられてけふいくひ　東京　椎野鋭子
たひのやとりに日かすへぬらん

かきねとは誰かいふらん保とゝきす　東京　佐藤成子
きゝつるやとのたちにくかな

いとゝしくみやこのそらの戀しきに　東京　佐藤央子
とりのみかへるなつのゆふくれ

嬉しくもおも保ゆるかなゆきくれし　松山　水木友子
さとはなつなきところなりけり

ゆふ日かけさしもいそきし旅ひとも　大阪　伊勢村花子
しはしとゝむるいはしみつかな

たひ人もなつのいのちとたのむらむ　大阪・橋本庄子
あつさなかるゝたにかはのみつ

世をすてゝ深山路ふかくたとる身も　東京　筋川ふき子
たのしかりけりなつのたひちは

海やまのかはるけしきのそれよりも　和歌山　瀬戸榮子
なつのたひちはしみつなりけり

ゆふ風のたつをはまちてたひゆけは　長野　松澤まつ子
あはれにはかにかみのとゝろく

日盛りは木かけにいこひゆき行きて　栃木　青木たま子
しみつむすひつなつのたひひと

夏たひのあゆみつかれしゆふくれに　岩手　森りう子
きくもすゝしきまつかせのおと

夏のひのなみきのまつのしたかせは　岩手　武田けい子
たひゆくひとのいのちなりけり

ひるの間はすゝしきやとに休らひて　三河　三宅中枝子
ゆふあるきするなつのたひゝと

大御代はかな路くるまのたひなれは　三河　石田れい子
なつのあつさもいとはさりけり

あつき日にあせあゐもせす旅ゆくは　三河　河合ぬひ子
かな路くるまのあれはなりけり

袖はかろし日かけは氷し木々は青し　東京　北島功子
なつのたひちのさておもしろき

旅ころもひろのあつさにくらふれは　東京　高橋津音子
なれぬやかたもうれしかりけり

あつき日は馬にくるまにのらすとも　肥後　服部倫子
木のしたかけをゆくへかりけり

しはしはと岩間もれ出るみつ汲みて　東京　太田やへ子

木かけにいこふなつのたひかな
せみの羽のうすき衣もあせにぬれて　伊豫　竹村竹里子
やとりをいそくなつのたひかな
夏くさのふみわけかたきたひなから　東京　川村松子
木のしたかけはすゞしかりけり
夏はたゝすけの小かさをたのめとも　東京　矢野やす子
日さへもりくるたひのくるしさ
夏の日のあつきをしのくたひゝとは　肥後　徳永多瑠子
木のしたかけをたのみてそゆく
うき事も嬉しきこともうちとけて　東京　朝澤わか子
かたりあひつゝすゝむたひゝと
夕たちにぬれて木曾路のたひころも　肥後　野口靜子
いとゝくるしきくさまくらかな
夏やまをこゆるたひちはこゝろせよ　埼玉　横田音羽子
まつかねまくらたにかはのみつ
ふきおろすみれの松かせはたさむく　埼玉　横田秋子
つきにこねゆくなつのやまみち
たひ行けはみやこそかはろみ吉野の　相州　岩橋花子
やまもさくらのみとりなりけり
みもかろくこゝろもかろし旅ころも　横須賀　上田ゆき子
なつなほあさきゝそちたとりて
水のおとの凉しきやまのいはかれに　埼玉　森谷もと子
あつさわすれてたひねしてしか
やとるへきかたなき野路を夕たちに　大隅　稲垣まさ子
ぬれつゝもゆくなつのたひかな
松かけにしみつ見いてゝやすらふは　大隅　山田稲子
なつのたひ路のいのちなりけり

木曾の山うきもあつさもわすれけり　山口　田村多豆子
木の下かけのかせをすゞしみ
おほかたもぬるゝならひの旅ころも　三河　永井さい子
なつはあせさへかわかさりけり
ほとゝきす鳴ゆく山ちのあつき日も　肥後　坂本豊子
なつのたひちのともとなるらん
旅ひともゆきなやみつゝなつの日は　肥後　澤田春子
しみつくみてそあつさわするゝ
夏ころもすゝしきかせにおくられて　福岡　千石ふみ子
こゝろやすくもゆくたひちかな
堪へかねしひるのあつさも忘るゝは　鹿兒島　上妻よし子
かへるたひちのゆふたちのあめ
なつの日のたひちのうさの數かつを　下野　井上しゐ子
ともとかたらふまつのしたかけ
たちよりてやすらふかけも夏の日の　東京　鳥飼美登子
たひちはいとゝくるしかりけり
都いてゝすゝしきかたをたつねんと　本郷　野口しま子
おもふともとちゆくたひちかな
ほとゝきす鳴音をきけはあけやすき　長崎　内藤美與子
夜半にもぬるゝたひのころもて
かきくもろけしきをかへて夕たちの　筑後　武田龜子
そらもこゝろもはるゝたひかな
わきいつる山の井のみつすゝろへは　東京　松村あさ子
なかれしあせもいつちゆきけむ
夏の日もこゝろにかゝるくもゝなく　東京　三好珍子
あくるたひこそたのしかりけれ
ひるの間はこかけ〳〵にやすらひて　肥後　徳永雪枝子

ゆふへすゝしくゆくたひちかな
ゆきくれてかりつることは竹はしら　肥後　坂本たけ子

ひとよのふしもあはれなりけり
やところへき道なもしらにゆふたちの　伊豫　横山芳子

たひのこころもなぬらしてしかな
たひころもかたしく山のいはしみつ　東京　山本梓子

ふるさとひとにくませてしかな
おほやけのつとめなき身も人まれの　名古屋　瀬木せき子

たひおもしろきなつはきにけり
たひゆけは木かけの風をたのみにて　山口　村上操子

はなももみちもおもはさりけり
夏やまをこゆるあつさのくるしさに　山口　井關れう子

よるはたひれのゆめもくたくる
行くさきのかきりもしらぬ野山ゆく　山形　常井れう子

なつのたひこそくるしかりけれ
山をこえかはをわたりて行くたひは　和泉　稲原董子

なつをよそなるこゝちこそすれ
みれにかゝる夕たちくもを旅ひとは　大阪　中館やう子

見ていそくらんやまのしたみち
あさつゆのたまなす稲のはたゆけは　日向　林くに子

なつのたひともおもはさりけり
このなつは學ひのにはのともとちと　大隅　石上うた子

にひたひころもきるそうれしき
旅ころもうらふきかへすゆふかせに　大隅　高見汀子

すゝしくなりてひはくれにけり
日盛りはあつさにたへすたひころも　大隅　宇都良子

ひもゆふくれをまちてなゆかん

汗にぬれてたひより歸るこのさきを　大隅　永田のり子

はやくもつけよやまほとゝきす
旅ころもあせもかわきぬふくかせの　大隅　岩田つき子

すゝしくわたるなつのゆふくれ
旅ころもあせにぬれてもおほきみの　大隅　野田たけ子

ためとおもへはなにいとはまし
玉をなすあせをふきてもこのなつは　大隅　石村とき子

くにのためにとゆくたひちかな
汗あゆるたひちのうさをふるさとの　大隅　外山まさ子

はゝにもつけよやまほとゝきす
あとになきさきになきつゝゆく旅を　大隅　野田こま子

おくるに似たるほとゝきすかな

七月廿日兼題

夏の朝

天　　伊豫國松山市一番町　宇高松子

朝とく起きいでぬれば、まだ消えやらぬ有明の月影のいとをかしきに、夕の遣水の名殘か今朝おく露か。涼しく渡る朝風に、はら〳〵と葉末をこぼれたるもいと心地よし。殊に垣の朝顔のとり〴〵色美しく朝露に咲にほへるは、まづ目も醒むる心地

する。幼きもの共もいつしか、目さめて金魚に麩をやるとてもて騒ぐ弟。髪結ひて給はれと袖にまつはる妹もいぢらしく〵中程の髮少し斗りとりて、お下げに結ひやれば、嬉しがりて、朝顔の花などかざしにさし、姉樣顔して、朝清めの手助けせんとて、己のたけよりも高き箒打ふる樣もいとをかし。かくて樂しき朝食も終れば、早も弟はさでよ手桶よといひ騒ぐ。隣の次郎さんが誘ひに來たればとてなり。母上の遠くなゆきそ、怪我なしそと、慈愛の御言葉のまだ終らぬに、姿は隣の生垣の蔭にかくれぬ。正午頃には少さき金魚鉢に、目高の四ツ五ツは見るなるべし。表に、野菜ものひさぐ商人の聲も勇ましく、裏には下女の衣洗ふ水の音の忙がはしげなり。いざ我も涼しきうちに、昨日都の伯母上より賜はりし浴衣をや縫はん。

評　夏の朝の景を敘して、家庭和樂の情味をさへ記したるはいともめでたし、

地

長崎市櫻町廿番地　内藤美與子

春は曙、秋は夕と、昔人の言ひけんはさることながら、夏の朝ばかり心ゆくものはなかりけり。青みたる山の端に月の殘りたるに、郭公の鳴きつる言はん方なし。露のこぼれたる木々の梢に、螢のかげ二つ三つ消殘りたるさへあるに、門田の稻葉浪立やうなる風のすさび、又なくをかし。池の蓮の花、今朝はたいくつにかなりけんと、子等の指かゞなふるも哀なりや。此頃人のすなる朝顔を移し植ゑなどしたるに、待つけし花の咲いでたる、嬉しとも嬉し。契りおかぬ友のとひ來て、品さだめなどすなるを、ほこりかに言ひのゝしれど曉より咲きたる朝顔の花のたしなみにくらぶればねくたる髮を人に見らるゝいと恥はしく、汗あゆる心地なんし侍る杯語り出づれば、夏の夜のふすかとすればと言ひて笑ふもあり。晝の間の暑をのみ言へれど、花紅葉のみ見なれて、夏の朝のけあひを夢に過ぎゆく人のしゐ事なめりと、すき〵〵のゝしり、木の芽もたうべずいで行くを送るとてかくなん。

思ふこと夏の朝の涼しさを
ゆめにも人は見さるなりけり

評　王荊公の云ひたる緑陰幽草優二花時一の面影ありておもしろし。

人

本郷區丸山福山十　名木山　勝子

はしためが椽の戸開くる音に、あたら夢破られてやをら枕べの時計打見やれば、未だ三時五十分あり。「よき程に、起こしまつれば、ちとやすませ給へ。まだあまりに早く侍れば」など心づけられたれど、さりとてめづらかにも早う目さめたるけふ此まゝいねんもいぎたなかればと、打ゑまひつゝ寢衣かふ。

端居近く、日頃めでつるふみどもたづさへて立ち出でつ。庭面の夏くさいと茂れるが、よべの夕立のなごりの露、葉毎におきそひたる。朝がほもやうやう二尺ばかりになれるが、四つ目がきのあたりまつはりて、もゆるばかりの色の、三つ四つ二つ匂ひいでたる、いとあはれにもゆかしき姿なりや。

朝風ゆるく簷のはつれげをなぶりて、風鈴の音も涼しく、そゞろ柴折戸を立ちいでぬ。仰げは水淺黄の空、色あざやかなるが、紫、紅などに彩られたるくもの、右手の岡の茂れる樹々の梢よりたなびきたるも、えいはずうるはし。折しもいと愛らしき清らなる聲もて、唱歌ものする音のきこえたれど、あないづこよりぞと見まわたす程に、口惜しくもはたとばかりとだえぬ。

もろ手杉がきを見やりつゝ、五歩七歩ありくほどにかたへのまがきの横より、はと〳〵とあどなき靴音して、七ツばかりなる少女あらはれたり。雪よりも白きかほばせに、肩のあたりまで房々とかかりたる黒髪、結ばぬさまいとゞゆかしく、友禪メリンスの袂ひら〳〵とかろく、海老茶袴かひがひしく着たる、いと愛らしうて、行くて定めぬ身は、我にもあらず、そゞろにたちどまりつ。

はや日も松の梢をはなれければ、いざやとて見か

へりがちに、かへりぢたどるに、こたびはなほもさだかに、清らなる唱歌の聲は、そうびの蕾に似たる彼の唇より洩れいでぬ。あはれかのゆかしうきゝなされし歌のあるじは。……ひら〳〵と、胡蝶我が後の方よりまひ來りしが、をとめの袂かすめて、杉がきの内に入りぬ。

評　文章優麗にして叙事も甚だ巧なれど、あまり長きに失して小說など讀みたらん如き心地せらるゝは惜むべし。

（以下原稿到着順）

三河　本多きさ子

池の蓮の露ふきちらす風は、袖にすゞしくかなりつゝ、前栽にしげりあふ草木の、こゝちよげに打なびきたるさまなど、いとゆかしきに、夏木立しげれる庭の朝風に、深くもかなる花蓮かな、かにかくに、夏の朝げにしくものぞなき。

長崎　日高かず子

夏は朝こそなかしけれ。青みたる山際の明け行空に、有明の月の白う殘りたるいはん方なし。遠の村里にたき捨てたる蚊遣の絶々なるに、朝げたく烟のあらたに立そひたるもまたなかし。ぬれたる庭におり立てば、心もすが〳〵しう、ひれもすかくてもがなとおもふもはかなしや。散り果てたる卯つぎにこぼるゝ露は、時鳥のなく涙にやあらんと見れば、朝顔の花さへまだき咲たるいとなかしう、日影をまたでしぼみなんは、しばしの榮にほこる世のいましめにもよからんなど思ひつゞけて、耐清めしつゝ見さぐれば、月の入るさの山の端に、薄雲の棚引たるばかり心ゆくものなんなかりける。

東京　田中さだ子

おのれ春の末つかた土かひ水そゝぎし朝がほの花咲そめしより、朝な〳〵のねざめたのしくなりぬ。今朝しも降續きし五月雨名殘なうはれ渡り、東の空うるはしく青葉のつゆも玉と散り、垣根のうばらはたなでしこ姫百合など時得顔にさき匂ひ、いづれなつかしからぬはなく、ふきわたる朝のかぜの心地よさ、いひしらずうれしかりけり。曉おきの人のからだに益あるは言ふまでもなけれど、わきて夏の朝とくおきいでゝ、草花などおほし立なば心のたのしみはさらなり、衞生の道にも叶ふべきと思ひてかくなん。

『朝つゆのまたきひぬまにおりたちて木立茂れる庭めぐりせむ』
『二葉よりおほしたてたる朝がほの花のひもとく朝けたのしも』

和泉　稲原菫子

ほの〳〵と明け渡りたる夏の朝ばかり、心地よきはなし。そよぐ朝風身にしみて、よべの暑さも、いづち行きけん、いとすが〳〵しう、前栽の草木はみるからにみどりしたゝるばかり、彼方の垣根には、白、赤、あるはむらさきの朝顔、三つ、二つ、露ながらみはこぼれたるめざましさ。こなたの池には蓮花の色香ゆかしく、置きそはりたる白玉の風にゆらげる其樣など、見るからに心地うき立ちて、實にすてがたきは此朝になん。

肥後　德永廣子

日々のあつさになやまされて、朝夕の日影をのみなつかしくおぼはぬるころ、夜にいりては、よもすがら夢だにむすびはぬばかりに、ふかく枕にねぶりけるを、父母ののたまふにおどろきて、園の戶ひらき朝のけしきをながめつるに、草木のみどり葉に夕のなごりおしみつつ、玉ぢる露をさそひがほに、ふきくる風に千町田に生しげる玉苗、もろともにそよぎいでていとすずしく、ねもいはれぬ心ち身にしみて、夏ながら。あつさわするるばかりに侍ることのうれしくて、思ひうかびぬ。いかに夏は塩がたきなどいひ侍れど、吾國

は四時の氣候外國にまさりて、くらし方やすけく、日を送る事の、さまぐ\にしのがれて、かく目出度皇御國に生れ出て、幸ひ多き事をふかくかんぜられて、國恩を仰ぐのみ。あなうれし、よろこばしや。

肥後　佐々有鄰子

短夜は郭公の一聲とともにはやあけはてにけり。蓮の浮葉におく朝露は、朝日にかゞやきて、風の心にまろびあひ、水晶の玉にもまさる光をはなちぬ。軒端の若竹には、兒雀さへづり、門の柳には燕とびかひ、池の蛙はころびれたかくたてて、朝のけしきをそへてをもしろくきこゆけるものを、梅の實のうみはてたるがふと落ちて、さざ波たてつれば、蛙のこゑやみて水中に飛いり、ひとしほすずしく、白妙の袖に風をやどして、ゐもいはれぬここちのせられ手かひの虎の兒も、なれなれしくたはむれぬ。

朝露の玉をかざして牛ひきていつる童か白妙の
ころもてかろく朝かせのふく

東京　太田八重子

夏は夜月の頃は更なり、と清少納言のいひけむも、さる事ぞかし。ひるはあつさ堪へ難くて、とくくれなむくれましかばやがて凉しき流に遊びて、日ひと日あせにぬれたるを忘れんなど思ひつゝ、からうじて夕になりぬれば、其の涼しげなる風のまにく\、小川に近きあしの葉末、只ならぬつゆの、飛びかふ螢のをかしきほどの光りに、きらく\とみゐたる。いと涼しげなり。月出でゝはまた更に云はん方なしや。さはあれ夜の涼しきは遠からなめり。橋の上、水の上など、殊に涼しきは朝こそ勝れり。とく起き出て、露ふかき草むらを、そぞろありきしぬれば、蟲の夢をおどろかし、彼方の畔畝路には、馬子がかひばの草刈歌などきくもをかし。或はよべの螢狩におくれをとりし地理をきはめ、胡蝶のたはぶれを愛でなど、又一際豔にうるはしきは、朝の程はかばかりに涼しきものを、晝になりもてゆけば、さるにても暑き事よ、と思ひつゞくる折しも清き風のふき渡りて、木々におく露のほろく\と落ちつるに、朝日の山の端さしのぞけるに映じて、水晶を投げいでたらん樣に見ゆるにぞあな涼しや。とおもはずいはるゝもをかし。誠に夜よりもまさりてあかずこそあれ。さる折しも、ぷゆと云ふ虫のいと細き聲もてなのりしつゝ來るぞにくき。されどいみじう涼しき朝は、さるものもまれにて、夕立のあしたなど、殊にいとふばかりにはあらずかし。

山形　村越こど子

ま金とろかす晝の暑にひきかへて、夏の朝ほどこゝ地よきはあらじ。されば例のおこたりに似で、朝いもやらず起きいでゝ、手あらひ口すゝぎせんと淸き流れに趣きぬ。日毎見なるゝ青柳の長きみどりの糸に波をあやつるさまいと涼し。岩に激して泡なす水、あなたの岸にさくあやめ、なべて目新しくあまりのこゝ地よきまゝ、一首ものせばやなど、風流心なきわが身にも思はれて、朝飯の調度もわすれ、暫し見とれし折柄、ふと朝日のほばゆきにこゝろ付き、自らあの朝いをいましめつゝかへりき。

讃岐　横山芳子

終日照りさらされて、あはれ、夕の露のなかりせば、枯れや果つらん草も木も、情のつゆにうるほひて、よみがへりたる朝まだき、野に山にみどりしたゝる夏木立、さては、なつ草の繁みが中にまじれども、我庭の敎はづかし小百合なでしこの、優に氣高く、昨日早苗採りし田面は、さながら、豊年しるく生ひ茂りて、秋の實りをしめす也。げにや草木の數多き、いづれもいまの夏の盛りに、秋の支度にいそがしく、さもしげりける其中を、杖曳くにつけても人の身に引くらべ、彼是とつおいつ思ひながら、行くとなしに歩を進むに、ほの昇る朝日の光りまばゆくて、葉末の露も玉と散り、光景いとゞ

芽出度な、暫し見とれ居たるまに、はや燒くが如き日光に射られて急ぎ賤が家へ歸りて、ありのまゝを記しつけぬ。

東京　大木光子

いつはあれど、夏のあしたほど心地よくすが〲しきものはあらじ。されば靑葉につゝまれ、かりの庵に住ふ身は、世の中のうさもつらさも、露おもはぬこそことはりなれ。しらむともなく白みゆく東雲の空、曉月夜影うすきころほひ、立ちて外面を打見やれば、よもすがら門田にもねし螢の光りも消はてゝ、露の白玉數並べたる蓮の葉がくれに打つどひて、うたふ蛙のこゑなどいと心ありげなりや。向ふの岸此方の汀には奇しく妙なる音のして、花の開くよとおもへば、軒の簾そとゆらぎそめて、香はしき風の徐に、寢くたれ髮を吹きはらふなど、ねもいはれぬ風情にこそ。

東京　山本梓子

夏はよると淸原のおもとがいへりけむ、げにも螢に月にあかぬ所多けれど、あつさにわびしれやの板戶いとゝくあげて、まづみわたしたる空の、すが〱しさはまたたぐひこそあられ。夜のまにすぎし夕立の名殘にやあらむ。木々の雫みだりがはしう打ちりて、すゞしの袖のしとゞになるも、いとをかし。まして朝風心地よきに、蓮のにほひ淸らかにおくりきたるそ、にごりの世のものとおぼねず。心のちりもはらひたるやうなり。つくろはぬ籬などに、朝がほのめさむるばかりとり〴〵にさきたる。露をいのちときくにも、しばしばかりの花の盛をめでてすやはある。かくいひもてゆけば、あはれに床しき事ともぞ多かめる。時につけつゝうつろ心には、さしもさだめがたけれど、白糸のすがすがしきにひかれては、夏はあしたといはまほしくなむ。

大阪　桝田益子

夏は夜をこそと朗詠にもみゆる物から、朝顔の露打はらひ、床夏の塵もすゑぬ螢の內に、すゐせうの珠數とき亂したらんやうなる若葉の雫に、有明の月薄らに匂ひ、遙けき雲井の空、一聲高くなのり行く郭公きゝたらんは、ねもいへずうれし。はた、山水をまかせたる軒の筧の音凉しく、雪をあざむく花うつ木、垣つの影に水鷄のなく聲も、いとあはれなり。かの雪ならねど、高殿の小簾かゝげて、やをら見出せば、さと吹きくる風に軒の立花、池の蓮の薰りあひてげに身にしむあしたなりけり。また左の方を見渡せば、千町の小田に、菅の小笠もつどひつゝ、若なへかゝるをとめが田歌も聞ねて、何がしの昔物語りも偲ばしう、みとしある瑞穗の秋の、今よりぞたのまるゝ。右の方を望めば、常盤の松のひまより、淸き海づらみねて、磯のさき〴〵、あまの小舟の木の葉の如く浮びいでたるは、朝な釣るにこそあるらめ。近き鈴のおとは、川社にゆふさゝぐるならん。遠きごん〴〵のひゞきは、山寺の朝づとめなるべし。とり〴〵にをかしければ、見るまゝきくまゝを、朝つゆに筆さしぬらして、目覺しのすさびにかくなむ。



雜報

●女子敎育品展覽會　新潟縣南蒲原郡田上村敎育會にては、女子敎育の、進步を計らんため同縣下各小學校、高等女學校、女子師範學校、工藝學校、裁縫學校等に於ける女子の製作品、書畫、作文、敎育參考品の類を蒐集し、田上高等小學校内に陳列し、本月十日より十五日間公衆に縱覽せしめしが、同縣に於て女子敎育展覽會は、是が始めて開催せらるゝものなれば、婦女子の參觀者多かりよし。

●高等女學校紀念式と祝賀會　滋賀縣立彥根高等女學校にては、去一日同校に於て創立紀念式を擧行し、併て同地有志の醵金寄付にて、本年四月より縣立に移りたる祝賀會をも擧行せしに、來賓も多く種々の餘興あり。近來稀れなる盛況にて、尙翌二日も餘興の催ふしありたりと。

●幼稚園の開園　靑森縣弘前市の第一大務尋常小學校女子部に設置したる幼稚園にては、去月二十五日より開園。去一日より愈々保育開始となりたるに依り入園幼兒を召集し、開園の披露式を擧行したるに、當日の參集幼兒は卅五名にして、何れも父兄に伴はれ出園したるが、校長は、父兄及び幼兒一同を堂に集め、一場の演說を爲したる後、幼兒保育の槪況及び父兄の心得方を訓示し、尙は保姆並に助手を紹介して式を了へ、幼兒に式餅父兄に規則書を配布したりしとぞ。

●瀧の川白痴院　瀧の川なる石井亮一氏は目今

廿五名ばかりの白痴者を集めて研究し且つ、教育しつゝあり。然るに白痴の治療を依頼し來る者甚だ多くして、遂に規模を擴張するの必要に切迫せられしかば、今般白痴兒百名までを收容教育することとなりしが一人の白痴兒毎に親切慈愛なる婦人の助手を要し开は自活苦學の女生に取りては尤も適當なる高貴の仕事なれば、實學園の女生をして之に當らしめんとの計畫なりと云ふ。

●治庖會　去る廿五年の創設にかゝる同會に、武田英一、安西初太郎氏等の盡力により、爾後漸次盛況を來し、世人亦割烹法の必要を認むるに至りしかば、この際規模を擴張して且つ夏期第十一回講習會を開くといふ。其規則は左の如し

治庖會本部夏期第拾壹回講習會規則

一開會期　七月廿六日より八月廿九日迄
一申込期日　七月十八日限り
一會員　女子
一定員　五十名
一科目　甲部　日本料理 / 乙部　西洋料理
　甲部　(火水金土)曜日 / 乙部　(月木)曜日
一講習料　甲部　金參圓　乙部　金貳圓參拾錢 / 甲乙兩部兼修のもの　金五圓
一材料實費　甲乙各部とも毎回金貳拾五錢內外
一入會證書　族籍住所誰妻(誰何女)姓名年齡家長職業等を詳記すべし
一修業證書　講習結了の後授與す

猶ほ教師は赤堀峯翁同峯吉(甲部)加美太一(乙部)氏にて本部は牛込區横寺町五十四番地治庖會なり

●ヒユース孃の山根醫長訪問　滯京中なるヒユース孃は、去月廿九日山根警察醫長を富士見町の宅に訪ひ、衣服改良に關する氏の意見を叩き、氏は常に令息令孃等に改良服を着せしめあるを以て之れを示しつゝ説明する處ありしに、孃は大に賞贊し、夫れより學校衛生、工場衛生に付種々質問

し、大に滿足して退出せりと

●ヒユース孃送別會　同孃は來遊以來女子高等師範學校、女子大學校等に敎鞭を採り、旁々我邦の敎育事情視察中なりしが、近々出發歸國の筈に付き、辻帝國敎育會長の主唱にて去る五日午後一時より神田男と同孃との英語敎授法に關する講話會に次で午後五時より送別茶話會を催し、三曲合奏等の催ありて、午後七時散會、頗る盛會なりしよし。尙は當日ヒユース孃の講話は即ち本邦に於ける英語敎授法に關する意見を述べ最後に右の旨意を徹底せしむる爲めに英語敎授法改良會なるものを起さんことを希望する旨を陳べて其説を結べりと。尙は同孃は、近日より北海道を視察し、來る九月頃出發歸國の途に就く可しとぞ。

●保育會乳兒　市ヶ谷監獄より收容せし女囚携帶乳兒二名は鎌倉の醫師佐竹音次郎氏の許に敎養せられつゝあるが、同氏より板垣伯夫人に報せし消息に因れば、二名の乳兒とも皆旣に親しみ馴れて、眞の母親の慈愛に於けるが如しと。

●生徒の美擧　兼て麴町區元園町帝國婦人協會所轄の女學校生徒は、女囚携帶乳兒保育會に手製の品物を贈らんとて、共々古き着物の切れや、服切れを購ひ、單物チヤン〳〵涎れ懸けより、オシメの類まで手づから數十品を製し、其他の種々の玩具をも取添へて、是非に乳兒に贈り玉はれとて、去月廿九日の夜、同校敎員之を携へて、保育會主任板垣夫人の邸に持參せりと。奇特のことといふべし。

●百三歲の祖母に事ふ孝行娘　兵庫縣揖保郡網干町の內濱田村豆腐製造業官波阿粂の二女阿林と云ふは、類ひ稀なる孝行者にして、町內にても孝

行者と云へば誰知らぬ者なく、阿林一人の働きに依りて、五人の家族安々と其日を送り居る由あるが、同人は十七八歳の頃より、朝は四時頃床を離れ、母阿菊を助けて豆腐の製造を爲し、午前八時よりは、身装も厭はず豆腐を擔ぎ、同町は勿論、大津村の内御津村地方を賣歩き、十二時過ぎに歸宅し、其れより翌日製造の豆腐原料なる大豆の搾へ、及び油揚などを製造なし、夜に入れば祖母阿梅(百三歳)の寢床に赴き按摩しながら世間話をして其心を慰め、今日に至るまで一日も怠る事なく殆ど八ヶ年の長き月日を一日の如く、老婆と實母に老養を盡すにぞ、老母の阿梅は孫の阿林に慰められ、年の寄をも知らず至て健氣にして自ら洗濯物をなし、又其容貌は百餘歲の老母とは見受けがたく、八十歳前後とより思はれざる程なるが、是も孝行娘阿林が、叮嚀に看護する餘德なりと、阿梅は常に涙を流して嬉しがり居るとぞ。

●稀なる節婦　甲州東八代郡富士見村舊小石和區の高野松右衛門方にては、長男佐太郎其妻阿菊及び、佐太郎の弟某等の四人暮しなるが、昨年中佐太郎は、大口山に登りて大負傷をなし、爾來躄同樣となりて起居も自由ならず、父松右衛門も、本年二月中旬より病氣となり、二人とも稼ぎもならぬ身の上なれば、元來不如意勝の生活は一層困難となり阿菊が女の手一つにて父と夫の介抱をなしつゝ、一心不亂に稼業を勵み、一方には弟を通學させ居りしも、佐太郎の病氣は段々に手重くなりしより、阿菊は大ひに心配をなし如何にもして今一度夫を健全なる元の身體に回復させ度と思ひ斯る時には神頼みの外はあるまじとて、躄の夫を車に乘せ、一里餘も隔たりたる不和村まで神詣でをなし、一日も怠らずして祈をるとは、近世稀なる

節婦と云ふべし。

●平和の家庭　往にし善美の風儀地を拂ひて、求むるに由なき今日此の頃、世にも珍らしき一家こそあれ下野國那須郡湯津上村大字片府田に、大久保萬治(四十)といふものあり性温良、幼より孝心深く、一郷の推重する所となりけるが、先ッ年父を亡ふてより、今年七十一歳の老母お淺に仕へて孝養怠らず、身目から朝夕其の機嫌を伺ひ、次いて吾が子をして恭しく祖母の前に跪き、日常の機嫌を伺はしむる言語動作苟もせざるより、禮儀作法自から備はり、極て嚴肅なる家庭の裡、又云ふべからざる和氣藹々として、宛然春海の如く、未だ曾つて風波の起りし事なく、爲めに一郷擧つて同家の和樂を羨まぬはなきと共に、其の家庭の嚴肅なるを褒めそやさぬはなしと。

●米國婦人の日本美術評　近着の米國新聞でベ

ロース夫人(横濱米國總領事の夫人)の日本美術評の大要を紹介しませう▲日本人が外人と交際するやうになつてから、非常に美術の品位が低落つたと言ふのは美術家が何んでも作品を高く賣らうと云ふ商賈氣を起したからなのである▲昔の美術家は、美術の本旨を解して居た彼等は美を尋ね、作品の完全を求めて、一意專心美術の爲めに盡したが、今日の美術家と來ては全然反對で、作品の巧拙は第一に措き、只だ〳〵賣らんことを心懸げて居る▲然し他の方面から觀察すれば、爾うなつて來たのも強ち無理ではない。何故かあらば、日本では近年非常に美術家の数が殖た。のみならず日本品の驚くほど奇麗で、而うして廉價であることを耳にして、買收のため出掛ける外國人が多過ぎる程になつて來た。此等の外國人は、概して鑑識がないので、何んでも手當り次第に買ふと云ふ

風であるから、需用は供給を生ずる經濟上の原理が、終に美術界に行はれて來たのである▲コンナ風で外國へ輸出する品は、外國人の嗜好に適しさへすれば可い、日本品だからと言つても、何にも特色が如何こうと云ふ必要がないと云ふことから濫造品が盛んに輸出されるのである。是れも美術の品位が低落つた一原因である▲此の儘で移つて行くなら、眞正の美術品は段々なくなるであらう殘念な事である。

外報

●●●●●●●●
●七十四歲の女學生　米國セント、ルイズの一新聞の記す所に據れば、四年間同地の學校に在りて歷史、幾何、美術を始め、其他の諸科學及び諸國語を學びて、此程卒業したる一女學生は、卒業後尙ピアノの稽古を爲さんため、ミッスリー州キユバに在る同窓の一友人の許に赴きたるが、驚く可きは、此女は多くの家族を有し、祖母たる事なり。こは此女の若き時には、敎育を受くる便宜を與へられず、自ら學問を爲す時間は、生計の事に忙しきため、之を得る能はず、漸く其希望の滿たされて、組織的の敎育を受くるに至りしは、今より僅に六年前、即ち其女の六十八歲の時なりしためなりと云ふ。

●●●●●●
●マルコニの母　無線電信の發明者なるマルコニの成功は、其母の力多きに居ると云ふ、母は愛蘭の有名なるホウイスキー釀造者ジエームソンの娘にして、頗る美人なるが、幼年の頃大に敎育を授けられ、尙充分に音樂を學ばしめんとて、伊太利に送られぬ、同地にてマルコニの父と懇意となり、終に結婚してマルコニを生むに至りしが、爾

來一意マルコニの教育に努め、何處に至るも之を伴はざることなくマルコニが化學電氣學等に興味深きを見て、自ら此等の科學に關する有らゆる器械雜誌等を求め、吾兒に與へて奬勵し、之が爲には毫も時と金とを惜まざりき、母子の關係は同情と眞正なる愛情との强き結合にして爰に母に伴はれたるマルコニは、今や到る處常に母を伴ひつゝある由

●英國皇后の美貌　英國皇后アレキサンドラ陛下は本年五十八の齡なれど、其容貌は到底四十以上の年とは想はれざる由にて、此程ウイリアムソン夫人の著はしたる皇后の傳記に據れば、或る時皇后が二人の皇女と微行せられたるとき、皇后を皇女の姉と誤りたる人ありとぞ、又或る時某國の皇子此三人に會したることありて、其内の一人は皇后なることを知れども、何れが皇后なるやを見分くる能はざれば、皇后に向ひ『何方が貴女の母上ですか』と問ひたることありと云ふ。

●露國の女子多き市　露國百三十九個の市邑中十九個の市には男子より女子多く其他の市には男子多しと。

●英國皇后陛下の御慰み　英國皇后サレサンドラ陛下は各種の寶石にて、極小さき獸鳥蟲などを彫刻したものを多く蒐むる事を慰み居らるゝが、いづれも頗る美麗にして、其うち最も高價なる碧玉及び硬玉にて彫刻したるものあるよし。

●支那婦人の世界漫遊　香港デーリー、ニユースの記する所によれば、チヨン、チユ、カンといへる支那婦人は、資産多く、敎育も充分に受け而も英語を綴るに巧にして、非常に進歩主義を有せる由なるが、今回自費を以て、歐米各國を漫遊すべしといふ。支那婦人の世界漫遊は、之を以て嚆

失とすといへり。

●自轉車掃除婦　歐米諸國には、近來自轉車掃除婦なるものありて、自ら自轉車を掃除するを煩はしと思ふ人の依頼に應じ、一定の賃錢にて、常に自轉車の掃除を爲す由なるが、其掃除の仕方極めて丁寧なるのみならず、微細なる點にまで注意して、途中損所を生ずることなきや否やをも確むるため、自轉車屋に送りて掃除せしむるよりも、大に優る所ありとぞ。

落葉籠

▲ある雜誌を見ましたら、女學校で賢母良妻を養ふを目的とすれば、嫁にゆくための方便となつてよくない故、それよりか、人格を養ふを主眼とせねばならぬとありましたが、誠に御もつとものことゝ思ひます（東京はつ子投）

▲埼玉縣の關口しづ子さまに申しますが、用文章で、高尚なのは、國光社から出版されました指原先生の女子文章軌範が一番よいと思ひます。それにはいろ〳〵の種類の文章がありまして面白く、また雅文消息集も見ましたが、これも御參考にしましたら、非常に益あることゝ信じます。（千葉やへ子投）

▲私は、宮地先生の美文を御のせ下さるとありましたから喜んで待つて居りました。（長門なほ子投）

▲先生は廿日ばかりまへから御病氣で、つひのびましたが、おひ〳〵御癒りなさる故、次回位には必ずのせませう。（かゝり記者）

▲この頃、ある學校の卒業式の寫眞を見ましたが、袴もはかず居りましたので、一寸藝人風に見えていやな感じが起りました。（京都よし子投）

▲追々暑中休暇が近よりましたが、皆様は如何し

て御暮し遊しますか。私は國へかへつて、あつかしき父母、または妹のそばで、たのしく過さうと思ひます。（東京のり子投）

▲信濃の御方に御答へしますが、私は一度よめいりますれば、どんな事情があつても、離縁するのは、甚だ善くないことゝ想ひます、そのかはり、嫁入る前に十分考へなければいけますまい。（靜岡きわ子投）

▲一旦縁づいても怏々一生をくらす樣では、夫にも姑にもためになりませぬから、それよりか離縁した方が勝つて居りませう。（青森とき子投）

▲信濃の某女樣の御だしになつた問題は、二說に分れましたが、みなさむはいかゞ思召しますか、御意見を發表して下さい。（かゝり記者）

▲毎號の女鑑へ、有名の教育家の肖像をおのせ下さいまして、實にうれしうございます、まのあたり先生にお遇ひ申す樣で、まい日、おとも達と口繪を見て居ります。（肥後とり子投）

▲去年初めて國へかへりましたら、大變言葉が東京にそみて生意氣だなどゝいふ人もありましたが、實際惡いのでありますか。（宮城とし子投）

▲今日では、全く言葉がまち〳〵で、鹿兒島の御方と東北の御方と御はなしをしますれば、通せぬことが多い。同じ國の中でこのありさまでは實に困ります。言葉は國命で、國語の統一は目下の必要で、その標準語は東京の詞でありますから、可成はなまり詞をすゝて、その詞にちかづく樣にせられたいのです。英國では、ろんどん語を用ゐなければ、賤しめて貴族の中間に入れあいさうであります。日本もやがてさうなるでありませう。（かゝり記者）

▲この頃、女學生を非難するお方が多く、えび茶

式部など、異名をつけられたのは、實に口惜いことであります。それをよく味はつて、身をつつしまなければなりますまい。(東京某女投)

▲學校に居るよりか、家庭に居る方が長いから、身を修めるには家庭が一番大切でありませう。(群馬ゆり子投)

▲御存じのお方に御尋ね申します。日頃より度々持病が起り、困つて居る人があるのですが、胸を下よりこみ上る如くなるのです。何とか仕様はありませんか、何卒良法をお教へて下さい。(備後學嬢投)

▲先年小石川邊にて一番良い女學校を御存じの御方樣は御知らせください。(石見津田愛子投)

▲日本女子大學校では、今年は暑中休暇過ぎて、九月からでも入學試驗さへすれば、入校を許してくださいませうか、何卒どなたでも報知して下さい。御願申ます。(富山初枝子)

▲御尋ねの女子大學は、九月が學期の初めでありますから、その時には勿論入學試驗がありませう(かゝり記者)

▲女子高等師範の國語科は最早廢止と成るさうですが、眞實なのですか。記者の君や、諸孃の内で、御存しの方は、御知らせを願ひ升。(東京禮子)

▲御問ひのことについて、早速女子高等師範校に照會しましたら、廢止されるなどの事は、全く事實無根で、世上の浮説たるに過ぎないさうです。(かゝり記者)

▲下田義天類先生の源氏物語講義を拜讀いたして居りましたが、まことに至らぬ限なく、極く綿密に物せられましたから、初學の私共には、實に氷解する事が出來ました。處が如何いふ御都合にや、其後頓と中絶の姿となつて、一向掲載せられぬの

は、此の上もない遺憾とおもひます。これより連載し下さる樣望みます。（相模愛讀者）

▲私は夕立の歌を（枯れ〳〵しにはのちくさもうるなひてすゞしく匂ふ夕立のあめ）を出しましたが、七月五日の女鑑には載せて有りません。如何いふわけで有りますか。記者樣へ御尋ね致します。（肥後岡本たけ子）

▲歌文擔任の御方にきゝましたら、投稿規則に違がへば、編輯上非常に不都合を生ずるから、凡て己むなく沒書にするとのことです、爾後御注意の上御投稿を願ひます。（かゝり記者）

▲おのれは、教師になり度き期望に候。尤も私は、高等小學二年卒業して、村の校長の奥さんに、五年間裁縫の道を習ひ、又其暇には、作文讀書など、自習いたし居り候ところ、故ありて、先生にもお別れせし故、此度は、父母のゆるしを得て、東京に出で、手藝と學問のある學校へ登り度存候間、何學校がよきや。成丈早くお教へを願ひ奉候。（信濃愛讀者）

▲信濃の御方の出京なさるゝは、目出度いことであります、さて女學校には、凡ての學科は固より裁縫をも教へます、唯裁縫といへば渡邊、野口裁縫女學校などがあります。（かゝり記者）

口繪に就て

●津田元德氏　氏は山梨縣師範學校教諭より山形縣山形高等女學校に轉任し現に同校々長なり

●市守謹吾氏　氏は現任市立名古屋高等女學校長なり其詳傳は更に掲載することあるべし

●野口鐐太郎氏　氏は市内京橋區南八丁堀東京野口裁縫專門女學校の校長なり多年和服裁縫業に從事し傍ら裁縫教授を爲しつゝありしが今回新たに專門女學校を興し大に其の規模を擴張する計畫

なりといふ。

●宇都宮高等女學校●●●●●●●●　栃木縣立にして校長は小堀源氏なり本誌に掲ぐるものは同校專修科本年度卒業生徒及び職員にして其氏名左の如し

校長	小堀源	敎諭	屋代熊太郎
敎諭	篠崎權三郎	同	栗本清夫
同	建部よれ	同	和田あい
同	後藤美之	同	鈴木喜四郎
助敎諭	三科こと	助敎諭	高橋巴
同	岡田あさ	同	梅太興進
助敎諭心得	大久保長	助敎諭心得	五十嵐かう
同	阿部なほ	同	清水たつ
囑托敎員	田山銈	(以上職員)	

技藝專修科卒業生

廣瀨けい	柳つれ	杉山しん
木村けい	大塚つや	坂本ひの
近藤しげ	相良とよ	小森たけ
小林くに	塚本きん	増山すゑ
伊澤のぶ	湯澤よし	五月女ふみ
樺山ゑい	片柳みや	小堀たけ

●松本小學校女子部●●●●●●●●　信州松本町立開智小學校は其規模の宏壯なると收容生徒の多數あるは他に多く其比を見ざる所なるが本誌に掲げだるものは同校女子部の校舍にして位置は舊松本城の東に在り(保里寫眞店撮影)

●飯坂溫泉●●●　福島縣信夫郡飯坂溫泉は日鐵東北線長岡停車場を距ること半里許にして東北有名の溫泉場なり詳細は次號に於て紹介すべし

●避暑案內　大津と勿來

常陸磐城兩國一帶の海岸に勝景名蹟の多きことは粗本誌前號に記載せし所の如し、今常磐鐵道線路上野より中村驛に至る一百九十三哩間に於ける其重なるものを數ふれば石神驛(上野より八十三哩餘)に村松虛空藏(停車場より二十四町)あり十三參りとて隣近の兒童十三歲になれば必ず參詣して將來の開運出世を祈る。下孫驛(同九十哩餘)に河原子海水浴場(同十町)あり此地舊來より每歲夏

季潮湯治の客群集せる所にて旅店數戸あり。鮎川海水浴場(同十五町)磯原驛(同百九哩餘)に天妃山の勝景あり。關本驛(同百十三哩)に平潟(同十七町)大津(同十四町)の二勝景あり。勿來驛(同百十七哩餘)に勿來の關趾(同二十町)あり。湯本驛(同百二十七哩)に湯本温泉(同三町)小名濱港(同二里)平驛(同百三十二哩餘)に赤井嶽藥師(同三里)あり、道俗の信仰する所にして其大法會執行の夜には龍燈海上に出現するを以て名高し。中村驛(同百九十三哩餘)に松川浦(同一里)原釜海水浴(同一里)等、皆何れも一遊の價値あり。本號には大津勿來兩地のあらましを紹介すべし。

大津町は常陸國多賀郡に屬し往時より海水浴と海産物製造とをもて名高し。元來東海岸は地形大抵東北に向へるもの多く海水浴場として一の缺點とする所あるが此の大津は西南に向ひ當海岸第一の適地と稱せらる、西には天妃山の玉立せるあり、東には岬角の突出せるあり、背後は唐歸の小山脈を以て劃され、青松白砂眞に一幅の畵を見るに異ならず、

唐歸山松樹鬱蓊として傘を張れるに似たるをもつて唐蓋山と呼ぶよし、天保十二年山上に建てたる水戸の碩儒靑山延于氏の碑文には見えたれど、口碑に傳ふる所によれば、水戸藩第二世黄門光圀卿嘗て大船を造つて遠洋に航せし折天日焼くが如き處(赤道直下ならんと云ふ)に抵り暑熱に堪へずして船を廻し此山下に歸着せられしかば唐歸とは名けられしなりと、山上に佐波波地岐神社を祀る、前九年の役八幡公義家戦勝を祈りし處と云ふ。

大津の八勝園は海岸中央の地に新築せられし一大旅館にて、土地の有力家西丸健夫氏外二名の經

營せし所、規模宏壯客室淨潔にして飮饌器具も亦能整へり、口繪寫眞は樓の西角より東方の海面を撮影せしなり。八勝とは、平潟連檣、唐歸松籟、天妃回波、神峯殘霞、佛具暮黛、華園晴雪、勿來春曉、鹿岡朝暾、にして、樓は之を四面に集め、海を前にし山を後にして煙波縹緲の間に屹立せるもの此の中に靜坐すれば三伏の暑熱を一掃するに足るなり。

勿來關は磐城常陸兩國の境にありし關にて、其名は八幡太郎義家の詠歌によりて世に聞え、兒童走卒も之を知らざるはなし、然れども土地僻遠なるを以て杖を曳く者も稀なりしが、常磐鐵道開通の後は停車場より僅に二十町を隔つるのみなれば訪ひ至る者多しと云ふ。

關趾と傳ふる處は海に臨める小山の頂にあり松樹十五六株並び立てる間に賀茂季鷹の書きたる古歌の碑は建てられ其傍に二三の茶店設けらる、(寫眞參看)抑何に因りて此地を故關の趾と定めしかと案內者に問ひしに碑の傍なる二基の古石塔を指し、是れこそ往昔より安倍貞任宗任兄弟の墓標として傳へたるものにて、猶此のあたりよりは櫻の化石を堀出すとの多ければ故關の趾とは推定めしならむと、答へぬ、考證家は地形上より察するに此地は決して關所を置かるべき要地にあらねば後人の附會に出でたること勿論なりと論らふ、いかさま然思はるゝ節も少なからざれど此外に確たる證據ある古跡なければ之を其舊趾と定め馬を關門に駐めて春風に散り亂るゝ落花を惜みし風流將軍の芳躅を欽慕するも亦可ならずや。碑は四尺許の石にて表面には左の如く彫付けたり。

吹風をなこその關と思へとも
美ちもせに散る山櫻かな

千載集に撰入られし此義家朝臣の金玉を石ぶみに殘すつい手に我蜂腰をも一首とねもころに乞をいなみかたくてなむ

文政五年三月十一日にしるす

正四位賀茂縣主季鷹

千萬の仇にむかへるものゝふも
花さそふかせはすべなかりけり

碑の背面には左の詩を鐫刻せり

物族人而著。人依物以名。常奥境關稱勿越。山逕櫻華弄春晴。將軍義家討叛賊。千里領兵方東征。途過此關暮春日。落花飄風舞縱横。將軍按轡詠國歌。爾來騷客訪迹多。星霜臻今殆八百。樹名存物換少人過。素英洞月慨躊泯。俱謀錄石樹幽陂。事未及成丞即世。孝孫繼志事無佗。建碑遂離季鷹書。但慽錄詞記事疎。需余背面誌顛末。此石傳世詎風流篤孝足嘉譽。陳迹自今靡湮沒。此石傳世詎有除。正是人物相須著。永貽無窮名不虛。

嘉永辛亥歳仲春七十四翁筒井憲并書

野津大將も嘗て此地を過ぎられ、義家の八百年祭は一二年の中にあり、彼は朝廷に勳勞多かりし人なれば舊蹟には神社を建て、此碑も嚴重に看守して永遠に傳へる樣にありたきもの等の談話もありしと、案內者は語れり。

勿來の海岸は東方に面し、波軟かに沙淨ふて遠淺の處は海水浴に宜し。又塲處によりては岩礁の突兀たるあり、海浪之に觸るれば玉を碎き雪を噴き雄大豪壯の景色大に人の心氣を爽快ならしむ、旅店櫻雲閣は海近き沙原の松林中に新築せしものにて、坐がら常磐兩州沿岸の景色を眺め、太平洋を渡り來る萬斛の凉風には盛夏の暑氣を忘るゝことを得べし。

切取箋

國光社出版部發行圖書割引劵

注文書名	合計	此代 外に逓送料	申込者住所氏名
	冊		

◀圖書雜誌御注文に關する注意▶

◎割引劵を以て御注文の分（教科書を除く）に限り定價の**一割引**を以て御送本可仕候

◎地方よりの御注文は總て前金御送附にあらざれば送本不仕候

◎市內の御申込は現品引換に代金御支拂相成候とも苦しからず候

◎郵劵代用を以て御送金下され候節は必ず一割增御送附相成度候

◎御注文の御書信は書名編次冊數及び住所姓名等文字明瞭に御記載相成度候

◎金壹圓以上の御注文に對しては領收證を差出し候得共壹圓以下は送本を以て辨用可致候

◎注文品々切の際は品替を請求し返金は一切謝絕仕候

◎御照會は返信用郵劵添付又は往復端書に相願度候未納稅不足稅の信書は一切請取不申候

◎代金は總て國光社出版部會計課宛御送付被下度候

東京京橋區築地二丁目
株式會社 **國光社出版部**
（電話新橋二六九三番）



サア〳〵皆さんお買ひなさい！
先づこの本の特色は、第一孃さん達のためになるお話ばかりを集めたのと、第二には面白いのやら、悲しいのやら、又勇しいのやらいろ〳〵あるお伽話の中に、みな一〳〵修身の敎のこもつて居るのです。その外まだ面白い唱歌もあれば、球歌などもありますが、何れも世にありふれたものとは、丸でかはつて居りまして、この度著者が深切に皆新しく作つたものばかりでございます。
サア〳〵皆さんお買ひなさい！

壹册　定價金拾八錢　◎郵稅金四錢

東京市京橋區築地貳丁目
發行所　國光社出版部

本書に對する新聞雜誌批評一班

◎毎日新聞評　堀内新泉子の雅馴の筆に成れる家庭讀本にして、最と面白く且つ有益の冊子なり、目次花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等なり。

◎萬朝報評　まじめな所があつて先づ〳〵善い讀本と云はねばならぬ。

◎婦女新聞評　家庭小説を以て一旗幟を立つる堀内新泉子の著にして十三四の少女に讀ましむるため純潔なる短篇小説數種を集めたるものなり面白くをかしくまた哀れに悲しき間敎訓的意味を含ませて娘たり妻たり母たるものゝ心得を説きたれば家庭の讀本として最上のものならん續いて出づべき月の巻雪の巻こそ待遠しけれ。

◎敎育時論評　家庭向の著書、花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等の諸篇あり、家庭敎育の一助とすべし。

◎中央公論評　家庭讀本老人讀本を著はしたる氏は又少女讀本を著はせり、アドケ無き物語中自然に敎訓を含む家庭の讀物として最も珍重すべし。

福羽美靜大人序文
下田義天類大人校定
指原乙子女史編纂

女子文章軌範

全一冊
和裝美本
定價金參拾錢
郵稅金四錢

本書は上長德の頃より下明治の初年に至る九百年間に輩出せし名媛紫式部、清少納言、相摸、阿佛尼、鶉殿よの子、弓屋しづ子、三島さや子、荷田蒼生子、西三條實條公後室、柏原氏の母、馬塲存義の母千代、梶女、千代能、その女、河内孫子等の傑作中に就き其の最も精を拔き粹を收めて消息、記事、紀行、哀傷、序跋、敎訓、論文の七門に分ち每章末に其の作法を詳解し尙難句古事地名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之善く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる脩身齊家の一助たらん是を以て學校用書に適するは論なく家庭の諸媛も亦各一本を得て座右に備へば必ず無比の好伴侶たらん

發行所
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
株式會社 國光社出版部

再版出來

伯爵　東久世通禧君題辭
高等教育會議議員湯本武比古君序
東京感化院長　高瀨眞卿著

家庭教育 修身一夕話

上製總クロース定價金六拾錢●郵稅金八錢
並製洋裝美本定價金三十八錢●郵稅金六錢

本書は修身倫理の大綱を說き、東西古今の偉人碩儒の事蹟を言文一致體に敍述せしものにて、趣味饒多、近來稀有の好書なり。今回再版を發行す、苟も女子教育に留意せらるゝ諸氏は必ず一讀あれ。

發行所　東京市京橋區築地二ノ廿一　國光社出版部

明治三十五年七月廿日發行
毎月二回五日廿日發行 第貳百五拾七號
明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可

東京築地貳丁目株式會社國光社印刷部印刷